

第五章

ネッコ編

53

アマリタが去った翌日。ネッコはラクシユミ修道院にやってきた。

修道院は近くの村から離れて、ほとんど森の中にポツンと建っていた。もともと修道院などという場所は外部からの客を歓迎するものではないが、それでなくてもこんな隠れに建っている用もなく訪れる者などいないだろう。寂しいところだな、とネッコは考えたが、それは待ち人をつ間のとり止めの無い思考の一環であった。

「遅いな、アマリタの奴」

昨日ネッコがアマリタから受け取った書簡には次の通りに書かれていた。

明日、正午過ぎにラクシユミ修道院へ。あなたを母親に会わせようと思う。できれば私もゼムの目を盗んでそちらへ向かうつもりだけれど、万が一それができそうに無い場合はあなた

が一人で母親に会いなさい。私の知人と言え、きつと会わせてくれるはずよ。その際、服装はきちんとしたものを。前々から言おうと思っていたけれど、あなたの普段着に私は悲しい思いをしている。また、母親と会うことで辛い思いをしても、耐えるべき運命として全てを受け入れること。以上。

(服のことまで言わなくて、別に……)

ネッコは教会の窓ガラスに自分の姿を映し、ハイカラーの裾を引っ張ってそれを正した。サングラスの貴族の間で流行っている礼服の安いものである。本物の生地は綿ではなくシルクで出来ているのだが、一冒険者に過ぎないネッコには高すぎるし、なにより彼はあの滑々とした感触が嫌いだった。

(しかし、何だろうな。この運命って言うのは?)

ネッコが言葉の裏をそっけない文面から読みとろうと思つて、もう一度アムリタの書簡を懐から取り出そうとしたその時、窓の向こうに立つ一人の修道女と目が会った。向こうが怪訝そうな顔をしているので、ネッコが恭しく一礼をすると、修道女は慌てて奥へと引っ込む。

(失礼なやつだな……)

ネッコがそんな風に思っていると、修道院の玄関がそつと開いて、そこに先ほどの修道女が現れた。年は二十歳を少し過ぎたぐらいであろうか、人の良さそうな屈託の無い笑顔の女性であった。

「えっと、なにか御用ですか?」

いくら屈託が無いと言っても、修道院がこんなに簡単に客を招き入れてもいいのだろうか？あるいは、こんな場所だからこそめつたに来る事の無い客を歓迎したくなるのかもしれない。どちらにしろ、アムリタを待つのに飽きていた頃合だし、ネッコにとっては都合のいいことだった。

「マリアという人に会いたいんだ」

ネッコがマリアの名前を口にした瞬間、修道女の顔つきは曇る。

「……マリアちゃんに何の用ですか？」

突然、相手がつきのけるような態度に変わったのに、ネッコは驚いた。

（なんだ……？それも、なんで、ちゃん付け、なんだ？僕の母親ってぐらいなら、三十は超えてるだろうに……）

ネッコの疑問など露知らず、修道女は続ける。

「……昔の知り合いですね。帰ってください、彼女は誰にも会いませんから……」

そう言つて修道女が扉を閉めようとしたとき、ネッコは慌ててその隙間に腕を挟んだ。

「ちよ、ちよっとまって！アムリ……」

言いかけて、ネッコは口を噤む。アムリタにとってアムリタという名前は、ごく最近のものだということを思い出した。

「あの……赤目の少女の知り合いなんだ」

「あの子の知り合い？」

「ええ、兄です。一応」

「兄！」

修道女は一瞬顔をひきつらせて、悲しそうな目をした。

「……そうですか。それならば、拒むわけにも参りませんね。マリアちゃん……いえ、マリアさんの息子さんだというのなら」

修道女の言葉を聞いて、いよいよ自分の母親に会うのだと改めて自覚させられたネッコは、喜びとともになにか到底はね退けられない不穏な気配をひしひしと感じていた。ある時はアマリタの言葉、ある時は修道女の言葉、ゼムとルドヴィヒを中心に廻る特異な境遇、そして修道院という場所……「そこに落とし穴がある」と教えられても、ちっとも見わけることのできないようなもどかしさと焦燥感。

「どうぞ」

ゆっくりと開かれる扉。ネッコは中を一瞥すると、迷わず足を踏み入れた。避けることのできない落とし穴なら、さっさと落ちて這い上がるだけだ。ネッコはそう思った。

「こちらで待っていてください。すぐにマリアを呼んでまいります」

落ち着いた声で手短に言うのと、修道女は一礼し、部屋を出て行った。

案内された小奇麗な客間でぼんやりと待つネッコに、窓から傾いた陽の光が注ぐ。時計は四時の針を指していた。

(大遅刻だな、アムリタの奴。今日はもうこないか……)

もう一度、窓ガラスに服装を映して、衣服を整える。

(母さん……か。いまさら会ったところで実感なんて湧かないだろうな。僕は顔も見たことないんだから。しかし……それなのにどうしてアムリタは僕を母さんに会わせようと思ったのだろう？ 離ればなれの親子に同情して、ってやつか?)

そう考え、思わず吹き出すネッコ。

(ふふ、そんな馬鹿な！あの娘に限ってそんなセンチメンタルな感情はありえないな。どーせまた含みがあるんだ。僕を引っ掛けて、自分の思惑どおりに吊り上げるのが、彼女はきつと楽しんで仕方ないんだな。悪い癖だ、困ったやつだよ)

ふと目をやった物置棚に黒いネコのぬいぐるみがあるのを見つけた。縫い目や造形がすごく丁寧に出来ている質の良いものだった。しかし、面白いのは『ネコ』と一概に言えないそのフォルムにある。丸い頭にとがった耳、イタズラそうな目つきと生え揃った牙。手の鋭い爪などを見るにつけ、あるいはクマかもしれない。ネッコはそれを手にとって、更によく観察し始めた。

(よく出来ているな。デザインも斬新だし……それに、惹きつけるものもある。こここの手作りだろうか……?)

「こんにちわ」

突然、背後から聞こえた子供のようなあどけない声に驚き、思わずネッコはぬいぐるみを落

とってしまった。

「わ……っと」

慌ててぬいぐるみを拾い、ばんばんと埃を払う。

そして、ぼん、と元の位置に戻した。

「ごめんよ。変わったぬいぐるみだったんで、つい」

ネッコは振り向いて言った。

「それ、私が作ったんです」

少し嬉しそうな声で修道女が言った。ネッコは感心して、へえ、と声をもらす。彼女はネッコのすぐ傍まで来ると、ネッコが置いたぬいぐるみを丁寧に置きなおし始めた。手の加減、顔の傾き加減など、なにか気に入る角度みたいなものがあるらしい。

「へえ、上手だね。ネコかなクマかな」

ネッコが言うのと、修道女は彼の方を見てにっこり笑った。三十過ぎぐらいだろうか？顔にもまだ皺が目立たず、綺麗な真っ黒の目をした女性だったが、ぞっとするぐらい幼い表情をするのをネッコは少し不気味に感じた。

「お兄ちゃんの好きな方でいいですよ」

お兄ちゃん、という言葉聞いてネッコは複雑な感じがした。たしかに彼女から見ればこの青年は若いだろうけれど、初対面の相手につかう呼び方ではない。

(ひょっとして、馬鹿にされてるのか?)

ネッコは逆にからかつてやりたい気持ちになった。

「そうかい。それじゃあこいつはクマネコだなあ」

「クマネコ?」

きよとん、とした表情の修道女。

「ああ。戦闘用に異種交配されたんだ。鋭い牙と爪を持ち、ネコの俊敏性とクマの腕力を持つ。人の頭なんてちょんハネだ。それにこの狡猾そうな目つき。きっと頭脳の方も利口に違いな
い」

「……?」

修道女は当惑した目つきでネッコを見ている。

「……ほら、なんとなく強そうだろう?」

居心地の悪いネッコがぼつりと呟くと、修道女はなんとなく彼の言おうとしていたことが理解できたようだった。

「あ、うん……そうだね。この子なら、きっとお姫様を守ってくれるかもしれない」

「……姫? 姫って、どこの姫? エレイン姫?」

「ううん。私が作ったぬいぐるみ。この子は王子様で、他にもお姫様と、悪い魔法使いと…

…

まるで子供のようにぬいぐるみの舞台設定を語りだす修道女に、いい加減ネッコは少し呆れた。最初から若々しい態度をとる人だと思っていたが、これではまるで幼女ではないか。

「年の割りに子供じみた趣味なんだな。メルヘン作家でも目指しているのかい？」

ネッコが言うと、修道女はまた、きよとん、とした目で彼を見つめ返す。そして、照れた仕草で言葉を返した。

「……そうだよ。私、もう十二だもんね。いつまでもこんなぬいぐるみで遊んでたら、大人になれないよね。みんなにもよく言われる。ごめんね、お兄ちゃん」

「……十二……？」

怪訝そうにネッコが聞き返す。

「三十二……とかじゃなくて？」

「……？うん、そうだよ？ここに来たのが二年前で、その時が私、十歳だったから、多分……あ、お姉ちゃん！」

ネッコが入り口の方に目をやると、ドアを開いて黙って立っているアムリタの姿がそこにあつた。いつの間に来ていたのだろうか？修道女との会話に夢中で、ネッコはまったく気が付かなかつた。

アムリタは部屋に入ると、ドアを後ろでに静かに閉めた。

「……こんなにちわ、マリア。いい子にしてた？」

(マリアだって!?)

彼女の呼んだ母の名前に、ネッコは嘩然とした。そして、明らかに年上の修道女に、いい子、という不似合いな言葉。アムリタの言う「運命」の全貌が、晴れゆく青空のように明瞭に

見え始める。

しかしネッコはどうしていいか分からず、二人を静観した。

「うん！お姉ちゃん、ちっとも会いに来てくれないから寂しかったよ」

アムリタは静かにマリアの方へ歩み寄ると、そつと頬に手をやった。

「ごめんなさい。お仕事が忙しくって」

「悪者退治の仕事だよね」

「そうよ」

アムリタは意味深な目つきで言葉を続ける。

「あなたをととても悲しい目にあわせた、とても悪い人を懲らしめるの……」

「私？私は誰にも悲しい目にあわせられてなんていないよ。修道院のみんなは優しいし、お姉

ちゃんはどうして会いに来てくれるし……」

「……そうだったわね。ごめんなさい」

アムリタは少し俯いて、しばらく黙っていた。やがてネッコの方に目をむける。

「……アムリタ、この人は……」

「もうわかっていてるでしょう」

「……」

「これがあなたの母、マリアよ」

「……」

ネッコはちらりとマリアの方を見た。

（この人が……母さん……）

「少し身の上話をしてもいいかしら」

アムリタの言葉に、ネッコは頷いた。

アムリタが静かに語り始める。

「……私は、物心がついてすぐにあの人……ゼム・ロックから魔法教育を受けたの。教育なんて言葉を使えば聞こえはいいでしょうけれど……それは酷いものだったわ。あの人への期待に應えるまで、幼い私は何度も何度も殴られた。殴られ、殴られ、殴られ続けて、とうとう氣を失って、そうしてやっと一日が終わる。朝を迎えるのがとても怖かった。毎日がその繰り返しだったから、一日なんて始まらない方がいいとずっと思ってたわ。いまでも朝におびえて夜中に目を覚ますこともある」

「……」

「それでも、私は逃げなかった。あなたも知ってのとおり、大事な片目を奪われても、私はただ運命を受け入れた。いえ、受け入れるしかなかった。たった一人の肉親が……たった一人の家族があつた男なんだつたら、私はあの人への望むとおりに従うしかないもの」

アムリタはマリアの目の前でゆっくりとひざまづいた。マリアはきよとんとした目で彼女を見る。

「でもその時……私はふとしたきっかけで、母の存在を知ったわ。私を救ってくれる唯一の人

が、まだこの世界に命あることを知ったのよ。それからというものは、あの人の目を盗んでは母の行方を捜しつづけた。あの人の仲間だった人や、その過去を知る人、あらゆる方面であの人に関係する人達を探り当てて、話を聞き、やつとのことのでついに母の……マリア・ロックの居場所をつきとめたの」

アムリタは跪いたままマリアの手をぎゅっと握った。

「え……?」

マリアは不思議そうな顔をしたが、アムリタは手を離さない。

「……えっと……どうしたの?お姉ちゃん……?」

「……」

おどおどとするマリアの瞳から目を逸らさないアムリタ。

「えっと……ダンス……かな?」

必死にアムリタの行動の意味を考え、言葉を捜すマリアは、アムリタが自分の手を握り一緒にダンスをしようと誘っているのだと考えた。

「……違うわ、ダンスじゃない」

アムリタの行動は、母親に対する敬愛のしるしに違いない。

しかし、それを察することのできない今のマリアは、母親と呼ぶに値する精神状態ではなかった。

アムリタはポツリと呟くように言った。

「……ダンスなんかじゃないのよ、母さん……」

跪く彼女の頬を伝う一筋の涙に、ぎくりとするネッコ。彼は気づいた。いつもそっけない態度で誰とも心を交わそうとせず、砂漠のように乾燥した心の持ち主だと、そう誰もが思い込んでいたアムリタという少女は、誰よりも、母の愛に飢えていてそれを渴望していることを。そしてそれはマリアがこうなった以上、永久に満たされぬことの無い感情であることを。

ネッコは思った。あの恐ろしい父親の元で地獄のような毎日を孤独に生きてきたアムリタと、母親がいらないなりにとも良き人々に囲まれ、なに不自由の無い人生を生きてきた自分。同じ母のいない者同士といえど、どれだけ自分は恵まれていたのだろう！だからこそアムリタにとって母という存在を失ったその途方も無い喪失感、きつと自分などとは比べ物にならないほど深いのだろう。

突然涙を流し始めたアムリタを見て、マリアがおろおろとする。

「え……どうしたの？お姉ちゃん」

マリアが言うと、アムリタはうつむき、力なく両手を膝の上に落とした。

「どこか痛いのか？」

マリアが不安そうに尋ねる。しかし、アムリタはやはりうつむいたままだ。

「……」

「……私のせい？」

マリアがおどおどと訊ねる。

「……いいえ、違う、違うわ」

アムリタが表情を和らげ、優しく言った。

「……ごめんさい……」

「なにを謝る必要があるの？あなたのせいじゃないわ！……マリア」

アムリタがそう言う。それでもマリアはやはり驚きを隠せずにいる。

（そう、あなたは誰よりも清い心で、他人の苦痛を憂い、自らの苦痛に飛び込んでいった。それがあの悪魔との生活であつても……その繊細な心に耐え切れぬ重圧と知りながらも、最後まで自分の意志に立ち向かった。そんなあなたを一体誰が責めるといふの？そう、悪いのは……全てあの男よ！）

アムリタは黙つたまま、ゆっくりと立ち上がった。マリアに背を向け、ネッコの方に向き直る。先ほどの優しい表情とは対照的に、彼女は赤い瞳にどろどろとした感情を乗せて、危うくぎらつかせていた。ネッコは背筋に空寒いものを感じ、思わずたじろいだ。

「……ルドヴィヒの孫、あなた、こうなつた母さんを責める？」

「まさか」

「だつたら……ゼム・ロツクを殺しましょう」

アムリタはネッコに向かつてぞつとする声で言った。そして、父親ゼムへの殺意の、初めての意思表示に、ネッコはそれを予期こそしていながらも、やはり驚きを隠せなかった。

「母親の無念は、私たち以外には晴らせない……いいえ、もう母さんには無念なんて残ってい

ないのかもしれない。母さんが全てを忘れたいのなら……それならこれは……私の感情だわ！私から母親を奪い取った、父への復讐。私はあの人を絶対に許さない……！」

「アムリタ……」

それから、しばらく沈黙が流れた。複雑な心境のアムリタとネッコをよそに、マリアは奮えた眼差しをキョロキョロとさせて、二人の顔色を窺っていた。

一方、アムリタと自分を兄妹として結びつける唯一の絆が、復讐であることが、ネッコは悲しい気がした。そしてまた、悲しい自分におどろいた。この修道院に来て、アムリタの母親への愛情を見て取って、ようやく彼女の事を自分の妹だと思えたからかもしれない。

だが、それなら……ネッコは思った。兄として、初めて妹の思いに答える時なんだ。それも、禁術で弱った彼女にとつて、最初で最後の期待になるのかもしれないのだから。

「マリア……ちゃん、でいいのかな」

ネッコは少し戸惑いながらそう呼んだ。マリアは不思議そうに彼の方を見る。

「そのクマネコ王子、僕にくれないか。きつと良いお守りになると思う」

ネッコがそういうと、マリアは一瞬だけ迷ったようだが、すぐにぬいぐるみを手にとつて彼に差し出した。

「……うん、いいよ。お兄ちゃんなら大事にしてくれそうだし……私もそろそろ、ぬいぐるみは卒業しなきゃ」

ネッコはそつとぬいぐるみを受け取る。

「別にいいのよ、マリア。作りたければ、作りつづけければ。誰もあなたを咎めたりはしないもの」

「ううん、いいの。お兄ちゃんに笑われちゃうから……」

「……そう。そうね」

アムリタは少し嬉しそうな顔でマリアを見た。

それからは、誰も何も喋ろうとはしなかった。ただ、陽だまりの中で優しく静謐な時間を過ごした。

……母親の永遠の不在。それでも、マリアとの再会はこれ以上のない至福となった。母親の役割を果たさずとも、愛すべき人物には変わりはない。また、なんとなく立ち入ることのできなかったアムリタの胸中を知り、ようやく彼女を妹と認めることができた。

愛すべき人物が二人も増えたのだから、これ以上素晴らしいことが他にあるだろうか？ ネットコは本心からそう思えたのだった。

帰路。静かな森の中を歩くアムリタとネットコの二人。そよぐ風が木の葉を揺ると、夏の夕日の木漏れ日がオレンジ色にちらつく。落ち着いたヒグラシの声がじわじわと身を焦がすように鳴いている。ネットコが足元に転がるセミの抜け殻をつま先で蹴ると、抜け殻はかさかさとうを立って転がっていき、茂みに隠れた。

「……体の調子は？」

ネッコが訊ねた。

「ゼムが拒絶反応を一時的に抑える薬を持っていたから、いまはなんとか」

そう言うアムリタは不愉快そうだ。ゼムの力で生かされている自分に、嫌気がさしているの
だろうか。つくづくプライドの高い子だな、とネッコは思う。

「いつまで持ちそう？」

「……分からないわ」

「君は死ぬんだよな？」

「ええ」

「怖くないのか？」

「死ぬのが怖いのは、未練があるからよ」

そう言うアムリタは立ち止まり、ネッコの方を見た。二、三步進んでからネッコも足を止
める。

「未練を残さないためにも、あなたの協力が必要な」

「……」

頼りにされても、ネッコは少しも嬉しい気持ちになれなかった。アムリタが死ぬことは、最
初から分かっていたことなのに、なぜ今更になってこれほど残念なのだろう？

(残念っていうか……なんとというか……ええ、くそっ)

ネッコは苦虫を噛み潰したような顔をして、返事もせずにもたまたま歩き始めた。アムリタもそれ

について行く。

めちやくちやに絡まった毛糸のようなもどかしい気持ち。それをゴミ箱に捨ててしまうように、ネッコは関係の無い話をしはじめた。

「……ゼム・ロックとも長い間離れていたわけだよな。突然帰って、何も訊かれなかったのかい?」

「訊かれなくてしないし、訊かれても正直に言うだけ。『ルドヴィヒの孫達と一緒に洞窟を抜けました、ミルチアの抗争に巻き込まれて帰還に手間取りました、用が無くなったので帰ってきました』……それだけよ」

「それじゃ怪しまれないか?だって、このことは……」
このこと、とはもちろん打倒ゼムの件である。

「もちろん秘密」

「じゃあ僕と接触していることを喋っても大丈夫なのか?」

「あの人はね、私が裏切るなんて、微塵も考えていないの」
アムリタは口元に意地の悪そうな笑みをたたえた。

「だって、自分の道具が裏切るだなんて、考えるだけ馬鹿らしいもの。でしょう?」

なるほど、とネッコは思った。ゼムがアムリタのことを本気で道具扱いしているなら、確かに彼女の言うとおりかもしれない。また、ずっとゼムの身近にいた彼女だからこそあの男が自分のことをどう思っているのか分かるのだろう。

「心配してくれているのなら、ありがとう、と言っておくれ。でも、あなたは自分の心配だけをして。あのゼム・ロックに勝つにはどうすればいいか……それだけを考えて」

「分かったよ」

「ルドヴィヒの孫……あなたがいればあの男に勝てる。私はそう確信しているのよ」

「サラブレッドだからかい？」

「そうじゃないわ。いい加減に血筋のことは忘れなさい。そういうことに捕らわれている内はなにも出来やしないのよ」

「……」

「もっと自分自身に自信を持って。たった一人の魔法使いとして」

「ふん、自信ならあるさ！君がルドヴィヒの孫なんて言うからじゃないか」

ネッコがいじけたように言った。

アムリタはそっけない表情で言葉を返さない。

(……なんだよ……ったく、自分に負い目があると黙るんだから……)

森を抜けると、見晴らしの良い道に出た。東西に延々と続く、長い時間を旅人達が踏み慣らした砂利道は、一日を灼熱の太陽に焼かれたためまだ熱気を感じさせている。

「ここでお別れね。もういよいよって時まで会えないかも知れないから……ここで言うておくれ。決戦は一週間後の夜中、ランカシャー町外れのガンドラの丘よ」

心の準備が出来ていないうちに突然聞かされ、ネッコは思わず緊張してしまう。

「一週間って……やけに近いんだな」

「私の命もいつまでもつか分からないし……きつといまが魔力のピークだわ。少しでも有利な状況で戦いを挑みたいの」

アムリタは自分が進むべき方向をじっと見つめて、もう一度ネツコの方を見た。

「あなたもそれまでできる限りのことをして。でないと、さっきみたいに甘えている暇なんてないわよ」

「あ、甘えてる!?!」

ネツコは思わず素っ頓狂な声を出してしまう。

「僕がいつ甘えたんだよ?」

「じゃあ、またね」

言うだけ言うとアムリタは、振り返りもせずすたと帰路を進んで行った。

(甘える……? さっきの血筋の話か……? さっぱり分からん)

ネツコはしばらく呆気にとられ、ぼんやりと彼女の後ろ姿を見ていたが、やがて自分のおかれた状況に気がつき急いで帰宅を始めた。たしかに時間は無いのだ、できることなど限られている。

(……だが、できることはある。あれを習得すれば、決戦もずっと有利になる! だが、僕にその資質があるのだろうか?)

アムリタの、自分自身に自信を持つと言う言葉を思い出す。いくらか勇気付けられはしたも

の、それでも、彼は決断を迷っていた。下手をすれば、決戦の前に死ぬかもしれない……：うなればただの馬鹿だ。

ネッコは小さく溜息をつき、それから何も考えず歩きつづけた。余計なことを考えないでいると、ヒグラシの声が自然と彼の心を落ち着かせた。

また足元にセミの抜け殻が落ちていた。ネッコはそれを踏み潰そうとしたが、急に気が咎めて、やめた。セミは孵化して一週間しか生きられないんだっけ、などと考える。

(一週間の命……？馬鹿馬鹿しい、僕は絶対に死ぬもんか)

ネッコはエドの町を目指して歩いた。随分とご無沙汰の我が家に向かって……。

——魔界、羅漢洞。

「くっそおおお、この左腕……：どんどん腐っていきやがる！」

ヴァジュラが洞窟内……：いや、それどころか周辺の地域一帯に轟くような大声で叫んだ。ペルセンの大隊と対戦したときに魔石の爆発に巻き込まれた片腕は、醜く焼け爛れ、指先から青黒く腐り落ちはじめている。

「使徒の回復力をもってしてこれか！」

恐らくは魔石の爆発に含まれた魔法放射線の影響だろう。その対象が例え使徒であろうと、生物である限り放射能の毒から逃れる術は無い。魔王を切ったエクスカリバーの刃に魔石に近

い素材が使われていると言われているのは、そのためである。

「ヴァジュラ、大丈夫か？」

大声を聞きつけた彼の使い魔、リリパットが飛んでくる。

「大丈夫じゃねえっ！畜生……」

ヴァジュラが憎々しげに黒焦げの左腕を睨みつけた。

「医者はず普通の治療法では治せないって……」

「何回も聞いた！ああ、畜生めえ！」

「おい……ヴァジュラ、落ち着けてばさ……」

「うるせえっ！」

ヴァジュラは狂ったように頭を掻き毟る。

なにかよからぬことが怒るのではないか……ヴァジュラと長年の付き合いであるリリパットは、彼の只ならぬ雰囲気嫌な予感を感じていた……そしてそれは的中し、現実となる。

「……」

ヴァジュラは正気を失った顔つきで幽鬼のように立ち上がると、自分の左腕の手首を、右手で掴んだ。

「……ヴァジュラ……?」

不安そうなりりパットの声。

なんと、ヴァジュラは渾身の力を振り絞って、自分の左手首を引っ張りはじめた。

「ぎ、ぎぎぎ、ぎぎ」

ぶちぶちと肉の切れる音。裂けた皮の間から鮮血が噴出す。筋肉、血管が無造作に断たれ、めきめきと骨が砕けた。失神してしまいそうな激痛がヴァジュラの左肩を襲う。

「……ぎっ！」

最後に気合を入れ、思いつきり引つ張ると、左手はぶつりと音を立てて肩からちぎれた。呆気にとられた表情のリリパットの前に、どさりと黒焦げの左手を放り投げる。

「……はあ、はあ……」

ヴァジュラの顔は真っ青で、額には脂汗が滲んでいた。左肩には不気味に突き出た骨と、流れ出る血。しかし、確かにこれで魔法放射能の毒は回らなくなったのだろう。人間なら命に関わる出血量でも、使徒のヴァジュラにとって放射能ほどの問題ではなかった。

自らの肩に無造作に包帯を巻きながら、ヴァジュラはゆっくりと立ち上がる。

「お、おい。ど、どこへ行く気だ？」

放心状態だったリリパットが、やっとのことで口を開く。

「……人間界にデーモンとの肉体融合を果たした魔法使いがいたな」

「ああ……ゼムとかいう……」

リリパットが言うのと、ヴァジュラは頷きもせずと言葉を続けた。

「そいつを捕まえて新しい腕をつけさせる。しばらく留守にするから、あとの事は任せたまぞ」
そう言うのとヴァジュラはリリパットの返事も待たず、羅漢洞から飛び出していった。

「あ、え？おい、こら！」

洞窟にぽつんと残されたリリパットは、自分の足元に転がる黒焦げの肉塊を眺めながら、使い魔を辞めようかと本気で考えた。使徒としての職務をすべて使い魔である自分に任せて、一度でも使徒らしき仕事をしたことがあるだろうか？

「……ちっ。大丈夫なのかよ、あいつ……」

それでも辞めないのは、やはりヴァジュラの力量に対する畏怖か、尊敬か、また、数百年来の腐れ縁か。あるいは良き兄のような存在なのかもしれない。

リリパットは彼の左腕を適当な布で包むと、土の中に埋めた。そして、ばんばんと二回手を打つと、静かに拜む。

（新しい腕が生えますように……）

——エドの町、ヴァンシユタイン家。

「……ただいま」

ネッコの声が狭い玄関に響いた。約一年半ぶりの帰宅である。壁や家具に染み付いた懐かしい匂いに、彼は思わずほっとした。

「……まあ、坊ちゃん！」

来客に気が付き、玄関にまで出迎えにきたのは女中のリタである。もう四十かそこらの丸々

と太った、いささか気弱そうだが人の良い顔つきの女で、ヴァンシュタイン家には二十年以上も住み込みで勤めている女中だ。彼女ともう一人の女中・貧乏娘ナターシアのたった二人だけでヴァンシュタイン家の家事全般を担当しているのだった。といつても、ルドヴィヒは自分の研究所に住み込みで研究を続けているし、ネッコは一年以上前にふらりと旅へ出たため、ほとんどリジョと三人暮らしと言つてもよかつた。リジョにとつて、リタとナターシアという二人の女中は第二の家族であつたに違いない。

しかし、ネッコもリタが好きだつた。幼い頃に母を亡くした彼にとつて、母親と言われてまづ思い浮かぶのはこのリタであろう。

「ただいまリタ。父さんは帰つてないのかい？」

「ええ、最近はお城の仕事が忙しいらしくて、いつも帰りが遅くて……ああ、坊ちゃん立派になつたもんですね！」

ネッコの帰りにまだ感動の止まないリタを、彼は苦笑いでやり過ぎす。それは、迷惑というよりきつと照れ隠しなのだろう。

「僕の部屋は空いてるか？」

「ええ、ええ、それはもう。週に一度はナターシアに掃除させて……」

「ナターシア？ ナターシアのやつ、まだここで働いてたのか。それにしちや僕が帰つてきても顔一つ見せないんだな」

「まだ帰つてきてないんですよ！ まつたく……」

リタが大げさに言い放ち、ちらりと掛け時計に目をやる。晩の七時。サンダルークの季節は夏と言えど、窓の外はすでに不気味な紺色の景色を湛え始めている。

「ははあ。まだどこかで立ち話だな。変わらないね、あいつも」

「ご主人の帰りを遅いのを良い事に、最近はいつもこうなんだから……すぐに夕食ですか？」
「そうだな。頼むよ」

ネッコの返事を聞くと、リタはばたばたとキッチンに飛んでいった。

ネッコはぎしぎしと軋む床を歩いて自分の部屋にまでくると、静かにドアを開いた。そして中には入らず、点検するように部屋を観察し始める。シーツのかかかっていない、木の骨が剥き出しのベッド、棚の中にぎしりとつまった魔法書。小さい頃の落書きが残ったままの木の机、ポロポロのソファア。そして壁にかかったサンダルークの紋章、マジックカレッジでの学内コンテストの表彰状。ネッコが出て行った時と同じく、家具らしいものは最低限しか置いてない殺風景な部屋だった。窓から差し込むほとんど沈みかけの夕日がそれらを照らす姿は、淡いノスタルジイをいつそう掻き立てる。

(一応、自分の仕事はしているらしいな。ナターシアの奴)

埃一つ無い綺麗な床を眺めて、ネッコは思った。やがて部屋に立ち入り、ソファアに腰掛けると、ソファアは軋んで壊れそうな音をさせる。

(さて……)

ネッコは両手を組んで自分の腹元におくと、ソファアに背中をもたれさせてぼんやりと天井を

眺めた。

(問題は、どうやってゼムを倒すかだ)

ネッコは以前、ゼムの前で一戦交えようとしたときの自分の姿が脳裏によぎった。あのときは相手の強大なオーラにたじろぎ、内心は戦うどころではなかったのではないか……そして、いまでも実力の差はあの時と変わらない。

しかし、今回はアムリタという強力なパートナーがいる。たった一人で戦うよりはるかに心強い仲間だ。魔法使いに対して絶大な威力を誇る「悪魔の瞳」は、それを植え付けた張本人が相手なのだからあまり効果を期待できないものの、魔力やその他の実力において、相当の信頼をおけることには間違いない。

(あのお利口さんは、策士としては僕なんかよりずっと優れてるだろうしね。ふん！)
ネッコは思った。再三に渡って彼女に釣られたためのいじけである。

(……それに……)

それに、アムリタが見ている前で、自分が尻込みなどできっこない。自分を頼りにする彼女の存在はネッコにとって一種の覚悟にもなりえた。

「……」

だが、それでもやはり不安だった。ゼムはあの大魔法使いルドヴィヒと互角に渡り合った男なのだ。例えばの話、自分とアムリタが一緒になって戦って、ルドヴィヒ・ヴァンシュタインに勝てるだろうか？ネッコは自分に問い掛けてみた。

（ふん、答えは決まっている。勝てるわけが無い！）

ルドヴィヒの力量は、孫である自分が一番よく知っている。自分が魔法使いを目指すきっかけになったのも、祖父の神々しい力に憧れてだったし、なにより、畏怖する祖父に魔法という同じカテゴリーで認めてもらいたかったというのもある。ネッコは、ルドヴィヒの最愛の孫にして、最愛のファンでもあった。

ネッコは反動をつけて体を起こすと、ソファに前かがみに座りなおした。両手を顔に押し付けて、深い溜息をつく。

（……やはり、LV5の魔法書を……そうだ、なにを迷うことがある！しよせんは、遅いか早いかの問題だ……いつかは通らなければならぬ門なんだ。そして、いまこそその力が本当に必要なときなんだ……そうだろう？ネッコ・マズルカ・ヴァンシユタイン……）

そう考えたところで、リビングからのしと床を軋ませながらリタが近づいてくる音が聞こえ、ネッコは顔を上げた。

しかし、開けっ放しだったドアからひよっこりと顔を出したのは、リタではなかった。気の強そうな目つきに、頬にそばかすをのせた、ブロンドというにはいささか貧乏臭い金髪の少女。もう一人の女中ナターシアである。

「……あら、ほんと！道楽息子のお帰りだわ」

ナターシアがネッコの顔を見て言った。

「ナターシア、今帰ったのか？いままでどこに行ってたんだ」

「なにさ、帰ってきたらさっそくお小言かい？」

ナターシアはうんざりした顔で言った。

「ふん、一年半もどこへかほっつき歩いてたのはどこの誰だろうねえ」

「僕のは修行だ。あまり勝手にリタを困らせるんじゃないよ」

「勝手に家を空けてあちこちほっつき歩いてるご主人に言われたかないよ。それも、親子三代揃ってだよ、まったく！」

「父さんの帰りが最近遅いってリタにきいたけど」

「そうさ。どこに行ってるのか知らないけど、もうこの家にいるのはほとんど私とリタだけなんだから。あんまり大きな顔させないよ」

ナターシアの冗談を交えた憎まれ口に、ネツコは肩をすくめるだけでなんとなく言い返す気がしなかった。実際、家の面倒を見ているのはこの二人の女中なのだから。

また、ナターシアは憎々しげな言葉の裏にも、久々の主人の息子の帰宅に隠しきれない喜びをちらちらと窺わせていた。変に丁寧に出迎えられて気恥ずかしい思いをするよりはいいかな、とネツコは考えた。ようするに、変わって無くてよかった、だった。

ばんばん、とナターシアが手を打つ。

「さ、夕飯の準備ができたよ！」

そう言い残すと、ナターシアはついと奥へひっこんだ。

ぼつんと部屋に残されたネツコ。ふと、中断された思考の続きが舞い戻ってくる。

(……LV5の魔法書は……ルドヴィヒ爺さんの研究所に一冊ある。僕が言ったところで、貸してはくれないだろうな……だったら……)

ネッコはぎゅっと拳を握ると、勢い良く立ち上がった。

(だったら迷うことは無い、盗み出すまでだ！)

ヴァンシユタイン家の夕食。リタが食べ物盛った皿を、ナターシアがテーブルへと運んでいく。テーブルについたネツコは彼女達の無駄の無い作業をぼんやりと眺めていた。

テーブルには、パン切れが数枚と、牛肉入りのスープ、そして皿に野菜を盛り合わせものが一つと、あとは紅茶があるだけだった。

「ずいぶん質素だね」

ネツコは料理を眺めて、呆れたように呟いた。

「すみません、せっかくなのにこんなものしか出せなくて……最近のサンダルクは貧しくて。魔王軍との戦争が始まる前までは魚のもう一つでもここに出せたのですが」

リタが申し訳なさそうに言った。

「そこまで厳しいのかい？」

「なに言ってるのさ。これでもパッセよりはマシだよ」

一通り食べ物を並べ終えたナターシアが、自分の椅子に腰掛けながら言う。

「あそこは国上げての戦争屋だもんだから、民衆の生活費を軍費にごっそりもってっちゃって

「たしかに……あの国は酷いらしいな」

「パッセじヤ夕食にパン切れなんて出ないんだよ。葉っぱが一枚乗った、水みたいなスープがひとつ出るだけなんだから」

ナターシアが肩をすくめて、言葉が続ける。

「で、貧乏を苦に亡命する先がここやレオデグランズってわけよ。こっちだって受け入れる余裕なんてないのにねえ」

「この世界的な貧困は魔王を倒すまで終わらないさ」

ネッコが一口だけ紅茶をすする。

「いまに見てろ……」

ネッコが呟くと、ナターシアは訝しげな顔をした。

「いまに見てろって……?」

「魔王はこの僕がやつつけるのさ。僕の今回の旅の目標だよ」

ネッコが言うのと、ナターシアは呆れた表情でリタの方を向いた。

「……なんだ、おかしいか?」

「……坊ちゃん、ほどほどになさった方がよろしいですよ」

リタが心配そうにそう言うと、ナターシアがきしきしと笑った。二人ともネッコの
 ぐっこ、程度にしか思っていないのだろう。 英雄

「ふん！やれやれ、信用ないな。僕が英雄になったってサインはお断りだぞ」

「いるもんですか」

「さあ、もう食べよう。冷めると不味くなっちゃうよ」

三人は食べ物の目の前で十字を切ると、軽く祈りを捧げた。

「いただきます」

ネッコが呟いたその時、どんとと玄関のドアが叩かれた。

「おや？」

ネッコがスープを口に運ぼうとして出鼻を挫かれた。

「……ふん、また来たね」

ナターシアがめんどくさそうに立ち上がり、玄関の方へ出向いていった。誰だろう、と思つてネッコがちらりとリタの方を見ると、リタは椅子からすでに腰を上げて、新しい皿にスープを盛っていた。

（父さんだろうか？）

しかし、ナターシアの前を歩いてリビングに現れたのは、リジヨではなかった。

年は十九から二十、黒いぼさぼさの髪にやや神経質そうな顔つき。しかし、その瞳に宿るのは気難しさばかりではなく、優しさもあった。

「アルフォンソ！」

ネッコが立ち上がって旧友を迎えた。アルフォンソと呼ばれた男も驚きを隠せない。

「ネッコじゃないか！久しぶりだなあ」

「最近、アルフォンソ君は毎日ここへ通っているんですよ。旦那様に、作品を見せるためにね」

リタがネッコに向かって言った。

「作品……そうかあ。執筆活動はまだ続けているのか」

「へへ。相変わらずどうしようもないものばかりだがね……リジョ先生にはお世話になってるよ。毎晩のようにアドバイスしてもらってさ……」

「それを口実に晩飯にありつこうって魂胆さ！」

「はっはっは！いや、違う。どうか許しておくれ」

ナターシアの皮肉にアルフォンソは大声を上げて笑った。気さくそうな笑い声だった。

「いや、しかし驚いたな……ネッコ、君に会うなんて何年ぶりだろう」

「二年もないよ」

「そうだったか。やけに長く感じるなあ」

やがて、アルフォンソは上着を脱いでナターシアに渡し、新しく用意された食べ物の前に腰をかけた。ナターシアは上着を離れたテーブルの椅子にかけると、自分も席につく。

やがて、食事が始まると、会話に一層拍車がかかった。当然のようにネッコの冒険が話題の中心で、彼は自分の失態をなるべく避けて話しを進めるのだが、ナターシアは話の節々でネッコがどんな失敗を犯すかを得意げに予想し、ずばり当てられたネッコは顔を赤くして、それで

も少しマシにした真実を語るのだった。リタは観客のように途切れることなく人の良い笑い声をたてて、ときおり疑問や心配を口にする。普段から口数のあまり多くないリタであったが、若々しい活力あふれる青年たちの会話に、ことさら感心を持って身をひいていたのだった。

ネッコの話が一番興味深そうにきいていたのはアルフォンソだった。特に、自分の創作に関するアイデアやヒントになりそうな話題が覗くと、食べるのも忘れて話しに夢中になり、自分の質問をしつこくネッコに浴びせたのだった。ネッコはそれに嫌な顔一つせず答える。それがこの旧友の癖だと、彼は知っているのだ。

また、魔法に関することとなれば、きっと自分も周りから見ると同じような感じなのだろう、とも考えた。ネッコとアルフォンソの似通った部分だ。また、それが気の合う理由とも言えよう。

やがて、そういう偏執的な性格をもつネッコとアルフォンソの話は自然と、創作についての思想や方向性といった、もっと根幹の部分にうつっていった。この頃になると、リタは一言も口を利かず、ただ黙って成り行きを見守っている。

「小説はね、所詮は作者のただの夢なんだよ」

アルフォンソが続ける。

「いいかい？夢さ。それ以外のなものでもないんだ」

「おいおい、物書きがそんな風に言ってしまうっていいのか？……しかしまあ、なんだ。夢でも結構じゃないか。人は夢の中からもまた学ぶ生き物だよ」

ネッコが言った。

「もちろん、小説が単なる、他人に夢を見せるためだけの道具、だとは言っていない。ただし、全ての人間がそこから何かを学ぶことができるわけでもない。人によってはその耽美な夢の世界に浸り、現実から逃避する手段以上のものにはなり得ないということさ。そもそも、本来から一方的に受身だからな、読者なんてやつは！そこで俺たち作家はなにを思い、なにを書くべきなのか？」

「面白いから読むんじゃダメなのかい？」

ナターシアがアルフォンソに意見した。あまり小難しいことを考えないナターシアにとって、アルフォンソの言葉は自分が馬鹿にされたように思えたのかもしれない。

「いや、小説が面白いのは俺のような人間も同じさ。生産性のある面白さ、酒のように体を蝕む面白さ、面白さにもいろいろだ」

アルフォンソがスプーンの先をナターシアに向けて言う。

「その、あなたの言う、蝕む、って言うのは、作品に溺れてしまう生産性の無いタイプの人間のことを言ってるのかい？」

「……うん、まあ、いろいろあるがね。もしそうだとしたら？」

ナターシアの反論を期待するアルフォンソは、あえてナターシアの言葉を否定しなかった。

相手に話の土壤を譲り、相手の思想や哲学を披露させて、それを吟味する。物書きとしての向上心が彼をそうさせるのだが、本人はそれを悪癖だと感じていた。逆に言えば、悪癖として諦

め、別段直そうともしていなかった。

ナターシアは意地の悪い笑みを浮かべた。

「もし私があんたの言う、生産性の無い読者、だとしても、私はそれが蝕みだなんて思ったことないね。だって、考えてもごらんよ？ ただの夢、だなんて言いきった作品の内容を掘り下げて、凝り固まって、ああでもないこうでもないって議論してるあんたたちのほうがよっぽど作品に蝕まれているじゃないのさ」

「それが現実を動かす原動力になることもあるだろう」

今度はネツコがナターシアに反論した。

「私にはそんな原動力、必要だったことなんてないわよ」

「お前はなにも考えずに生きてるだけさ」

「まあ！」

ネツコの言葉にナターシアはあからさまに熱くなる。

「そりゃあ私は教養も無いし、貧乏だし、バカだけど……でも、あんたたちの方がよっぽどバカじゃないの！ いや、ビョーキだわ。偏執病ってやつよ、あんたたちは！」

「病氣！ そりゃ結構じゃないか！」

ネツコは続けた。

「でもな、わかるか？ 人間は病んでるからなにかを、作るんだよ。ある人は小説を作るし、ある人は魔法という力を自分の中に作る。またある人は理想を持って国を作るし……自分の理

想と現実の間にぽっかりと空いた穴を、その作つたなにかで埋めるんだよ」

「ぽっかり空いた穴ってというのは、胃袋のことかい？」

「……なんだって？」

「空想のパンケーキで、現実の腹の減りを誤魔化してるんじゃないのかい」

ナターシアの言葉に、アルフォンソは大声を上げて笑った。

「はっはっは！そいつはいいや！こんど俺の小説に使わせてくれよ」

「ばっかばかしい」

それでもナターシアはいくらか得意そうに、食器の後片付けをし始めた。

「でもさ……おい、ナターシア、ちょっと聞けよ。手を止める。いいか？しかしな……腹が減っても食べるものがないんだぞ？空想のパンケーキの一体どこが悪いんだよ？」

ネッコはしつこくナターシアに食いつく。

「腹が減ってるのはみんな同じ」

「みんな同じ？だったら、そいつはもはや時代の病みだね！おこがましいかもしれないが、僕達はそれを代弁したり克服するためにも、また作るんだよ。誰かが荒れた田畑を耕すから、みんながパンケーキを食べられるようになるんだ」

「魔王を倒す、ってやつかい？」

ナターシアが意地悪そうに笑った。

「……うん。まあ、それも、ある」

「大嘘ばかり！」

ナターシアは呆れて大声をあげた。

「私は随分前から知ってるんだからね。あんたが自分のことしか考えてないのは！よくもまあ代弁だなんて、白々しいったらありやしない！」

ナターシアが言った。

ネッコはなにも言い返さない。ただ一瞬はつとしたかと思うと、硬く口を結んでナターシアを睨んだ。しかしそれも、ナターシアを得意にさせただけである。

「まあ、女将さん。それじゃあ俺達は、自分のために作るんだ。自分のために小説を書き、自分のために魔王を倒す。それでいいだろう？」

アルフォンソが言った。

「勝手におし。私にはなーんの関係もないんだからさ」

アルフォンソがネッコの顔を見てぎこちない笑みを浮かべる。自分よりもいくらか年下の女中に言い負かされ、内心、悔しいと言うよりは感心もしていた。こういう子には勝てないな、とアルフォンソは思った。

一通り食器を片付けると、ナターシアは他に用事があるのか、そそくさと部屋を出て行った。部屋に残ったネッコ、アルフォンソ、リタの三人。リタが食器を洗う後ろ姿を、ネッコとアルフォンソはぼんやりと眺めていた。

(……そうか、そうだよな……魔王を倒すのは、間違いなく自分一人のためだ。自分の名声の

ためなんだ」

ネッコがさっきの会話を思い出し、ふと考えをめぐらせる。

(そもそも、世界中の人間がどうなるうが知ったこっちゃない。そう言う人間だ、僕は)

『君が守りたいのは、しよせん自分自身だ。それはあまりに孤独だとは思わないかね?』
いつしかのライオネルの言葉を思い出す。

(でも……ゼムを倒すのは、自分のためだけじゃない。もつと血の通った絆がある)

ネッコは右手をギュツと握った。脳裏によぎる、アムリタとマリアの顔。

(そうだ。いいんだ……これは)

「しかしおそいなあ、リジヨ先生」

アルフォンソが呟くと、リタは彼の方を振り向いた。

「今日は帰ってこないかもしれないよ。昨日も朝帰りだったし……ミルチアからの亡命軍の件で色々大変みたいですよ」

「ああ、そうなんだ……」

アルフォンソはがっかりした。

「よければ僕が読もうか?」

ネッコが言う。

「もって来てるんだろ、原稿」

アルフォンソは首を横に振った。

「いや、ありがとう。でも、まだまだ書きかけだからね。お前に見せるのは、完成してからにするよ」

「そうかい」

ネッコは一息ついて、付け加えた。

「本屋で買うことにするよ」

ネッコが言うと、アルフォンソはけたけたと笑った。自嘲にすらならない、といった感じである。

洗い物を終えたリタが部屋を出て行くと、ネッコとアルフォンソは二人だけになった。久々の対面ということもあつて話が尽きることはないが、どんな話をしているときも絶えずネッコの脳裏から魔法書のこと離れなかった。

(どうする……一週間なんてあつという間だ……ルドヴィヒ祖父さんには悪いが……やはり、ちよいと黙って借りるしかないな。しかしどうやって……)

ふと思ひ立ち、ネッコはアルフォンソの顔をまじまじと見る。

(……そうだ、ここに良い助っ人がいるじゃないか！)

「どうしたんだよ。人の顔じろじろ見て」

ネッコの不自然な視線を見て、アルフォンソが言った。

「いやね、アルフォンソ。ちよっと手伝って欲しいことがあるんだ」

ネッコが言った。

「ただ、ちょっと頼み辛いことなんだよな……久しぶりに会った友人にする頼みごとじゃないんだ」

「……？よせよ、お前らしくも無いな。何でも言えばいいだろう」

「本当に？何でも？」

「もちろんさ！男に二言は無い」

アルフォンソが、どん、と胸を叩くと、ネッコは悪戯っぽく笑った。

——ルドヴィヒの魔法研究所。

ネッコの祖父が日夜研究に勤しんでいる施設、そこはヴァンシユタイン家から二里ほど行つたところにある全八階からなる高い塔である。

ネッコは、あれから抵抗するアルフォンソをなんとか説得し、引き連れて、すぐさま家を出ると、小一時間ほど馬を駆って研究所へたどり着いた。もともとあまり人の気配のしない場所に立つ塔であったが、日もとうに沈み、明かりらしい明かりは塔の内側からもれるランプぐらいのものだった。

ネッコは表門に立つと、ここに来るまでに立てた打ち合わせどおり、アルフォンソが塔の裏側に行くのを確認した。

(上手くやれよ、アルフォンソ……)

アルフォンソの姿が見えなくなると、ネッコは表門を力強くノックした。重い音があたりに響く。

(……そういうえば、ルドヴィヒ祖父さんに会うのも随分と久しぶりだな……二年以上も会ってないもんな)

改めてそう考えると、ネッコは少し緊張した。もっとも尊敬する魔法使いの一人として、ルドヴィヒはネッコにとって祖父以上の存在だからであろう。

しばらく沈黙が流れ、ネッコがもう一度ノックをしようと腕を上げたとき、木の門はゆっくりと開かれた。

「……!」

ネッコは思わずぎくりとする。

そこに立っていたのは、ルドヴィヒでも彼の助手達でもなく、自分の父親、リジョ・ヴァンシュタインだった。

「父さん……!」

「ん、ネッコ……か」

リジョは一瞬意外そうな顔をしたが、すぐに門をゆっくりと押し、ネッコが入れるように大きく開いた。

「……」

「……」

半ば家出という形で家を飛び出したネッコ。何となく気まずい気持ちで、開かれた門を見る。しかし、当のリジヨはそれほど気にした様子は無い。彼の中ではとくに整理のついた出来事の一つにすぎないのかもしれない。

「……ま、とりあえず入ったらどうだ。祖父さんもお前の顔が見たいだろうよ」

そういうとリジヨは、後ろをむいてゆっくりと階段を上っていた。ネッコも、黙ってそれに続いた。

上に続く螺旋の階段を、黙々と登りつづける二人。途中、何人かのルドヴィヒの助手とすれ違つて、リジヨも彼らもお互いに軽く会釈をしていた。

「一年間ぶらぶらして、何か見えたか」

階段を上りながら、リジヨがネッコに話し掛ける。

「……さあ。分かんないよ」

（ふん、僕が自信を持って「ずいぶんと成長したもんだよ！」なんて言つたつて、父さん、あんたは認めやしないくせに）

ネッコは心の中で毒づいた。

少し暗い場所。ランプの光が揺れ、リジヨの背中がおぼろげにしか見えない。

「いい友達が出来たそうじゃないか」

「ん……まあね」

「良い事だぞ。一人で学べることなんて、高が知れてるからな」

「……」

ネッコはふと、マリアのことを思い出した。父は母のことを知っているのだろうか……？もし知らないのなら、やはり本人に伝えるべきなのだろうか……あのアムリタが自分にそうしたように。ましてや、マリアはこのリジヨの妻なのだから。

「父さん」

ネッコはリジヨを呼んだ。気持ちの整理がついていない、成り行き任せな呼びかけ。

「ん？」

「母さんのこと、なにか分かった？」

少しの沈黙。

「……いや、相変わらずだ。お前の方でなにか手がかりは掴めたか？」

「……」

ネッコは思わず言葉に詰まった。やはり、訊くんじやなかった……後になって後悔する。不思議に思ったリジヨが、ちらりと後ろを振り返る。

「……どうした？」

「いや……」

やはりネッコは言えなかった。母がああなってしまった悲しみは、父にとって自分とは比べ物にならないものだろう。無責任に真実を伝えることが、全て正しいと言えるのだろうか？本

当の善意が、嘘、という形をとることもあるのではないだろうか？

「どうなんだ？」

「ネッコは苦しげに首を横に振った。」

「……そうか」

しばらくの沈黙。階段を上る二人の靴の音だけが、規則正しく塔の中に響いていた。

「……会ったんだな、母さんに」

「……！？」

ネッコは驚愕した。

「私のことを思って、言えなかった。違うか？」

「……まさか、父さん……父さんは母さんのこと知ってたのか！？」

階段を上っていた足を止め、ネッコは叫んだ。

「いつから知っていたんだよ！」

リジヨも立ち止まり、ネッコの方を振り向く。

「お前が怒る筋合いは無い」

「怒るよ！どうしてさ！」

「お前も父さんと同じで、父さんに母さんのことを黙っていようとした。だろ？」

「あ……」

バケツ一杯の水を被せられたように、ネッコの怒りはかき消された。同時に、申し訳の無い

感覚。騙されていたことを知って、初めて騙すことの罪悪感を知る。

「相手に傷ついて欲しくないからとった行動だ。恥じることは無い。でも……もし次があれば、教えて欲しいもんだな」

リジヨはそう言うのと、再び歩き出した。

「知りたがり屋だからなあ、父さんは」

「……ごめん、わかったよ」

ネッコはゆっくりとまた、リジヨについて行く。

「父さんもね」

「ん……ああ。もちろんだ」

それから間も無くして、二人は最上階……ルドヴィヒの部屋の前にたどり着いた。

リジヨはドアをノックする。

「リジヨです。入りますよ」

「待って、父さん」

リジヨを制止するネッコ。リジヨはノブに手をかけたまま動きを止める。

「……なんだ？」

「ルドヴィヒ祖父さんは……母さんのことを……」

「知らない」

リジヨがそういうと、ネッコは複雑な表情で足元に目をやった。

「……」

「いいか？」

リジヨが訊ね、ネッコは頷く。やがて、ゆっくりとドアが開かれた。

一方その頃……アルフォンソと言えば、ネッコの指図どおり合鍵を使って裏口から進入していた。目標は地下の倉庫である。

(つたく、ホント気の進む仕事だよ……)

階段を下りると、錠前のかかった鉄の扉を見つけた。ルドヴィヒ以外は、彼の助手ですら自由に立ち入ることの出来ない厳重な倉庫。万が一ルドヴィヒがなにかの用事で倉庫に下りて来たりしないようにネッコが気を引き、その間にアルフォンソが例の魔法書を盗む、というのが作戦であった。単純だが、落ち着いてやれば失敗しないだろうと彼らは踏んでいた。

アルフォンソは、やはりネッコの家から持ってきた合鍵を使って倉庫の錠前を外した。重い扉をそっと開いて、そしてするりと中に入り込む。助手に物音を聞きつけられる可能性のある、作業手順の中で一番危険と思われる瞬間だったが、それも難なく終えることができた。アルフォンソは、もはや成功を確信していた。

(たまには泥棒もいいもんだ……たままないね、この緊張感！近所の楽器屋でハーモニカ盗んだのを思い出すよ)

ポケットに入れていた口ウソクを取り出し、マッチをすって火をつける。すると真っ暗闇の

倉庫内に小さな明かりがともった。

(これぼっちの明かりじゃちっとも見えやしないぞ。こりや、探すのに骨が折れるな……)

アルフォンソは細心の注意を払って、ネッコの指定した魔法書の探索にとりかかった。伝説の魔法使いサンダルクが残した四冊のLV5の魔法書の一つ、怒りの書と呼ばれるものである。

(……これかな)

アルフォンソが積み上げられた荷物の上にある一冊の書物を手に取ると、表紙にはLV4の文字が書かれている。これだけでも一般魔法使いにとっては恐ろしく高価で貴重なもののだが、LV5になると賢者サンダルクの残した四冊以外は他にたったの三冊……つまり世界に七冊しか確認されていないのだった。

アルフォンソはLV4の魔法書を元の場所に置くと、ふと、鉄の宝箱のようなものを見つけた。箱には鍵穴がついている。

(……ん？ひよっとすると……)

アルフォンソが合鍵の束を順番に試していくと、何番目に試した鍵であっさりと宝箱は開いた。中に入っていたのは一冊の、それほど厚くもない魔法書である。

(これかな?)

表紙を確認しようと手にとった瞬間、アルフォンソはしびれるような魔力を本から感じ取った。そして、それがLV5の魔法書だと確信したのだった。

(これだ、間違いない!……本のくせに、やたらとすさまじい気配だな……きっと筆者の魔力が籠ってるんだ。誰だ?……古い筆記体だが……)

著者の名前を見て、アルフォンソは腰を抜かしそうになった。

(サンダルークだってえ!?)

創作のための向上心……という名の、いつもの悪い癖がアルフォンソを刺激した。それも、あの世界的英雄、賢者サンダルークの著書となれば、なおさらである。

(ちよっとだけなら……)

アルフォンソは、ロウソクで冒頭の文字を追った。

魂の修正と、その方法について。

(……魂の修正?なんだそりゃ)

自分の置かれた境遇も忘れて、つつい読み更けてしまうアルフォンソ。

……しかし、彼は気づいていなかった。倉庫のドアが、ほんの一、ニセンチの隙間を残して開いていたことを。そしてそこから漏れるロウソクの明かりは、まるで夜更けの蛍の光のように目立っていたことを。

——六階、ルドヴィヒの部屋。

丸いテーブルをちょうど正三角形で結ぶように、ネッコ、リジヨ、ルドヴィヒの三人は座っていた。

「……しばらくだったな」

ルドヴィヒがネッコの方を向いて、ぼそりと言った。

「はい。ごぶさたしてます」

そういうネッコはルドヴィヒを前にして緊張しながらも、嬉しそうな顔だった。ふと、アルフォンソのことが頭によぎり、上手くやっているだろうかと考える。そして、ルドヴィヒを騙さなければならぬ罪悪感を噛み締めた。

「……腕を上げたようだな。精悍な顔つきになった。正直に言うと、お前が旅に出たと聞いたとき、私は少し心配だったものだが……」

ルドヴィヒがそう言うと、ネッコはぼりぼりと頭を掻いた。

「ご心配どおりです、義父さん。世界中で揉め事を起こして、そいつをサンダルクに引っ張り込んで……やれやれ。それを解決するのは誰だか知っているのか？まったく、まだまだ親頼りだな」

リジヨは呆れた表情でネッコに言った。ネッコはなにも言い返せず、不満そうに溜息をついた。なにも祖父さんの前で言わなくともいいのに……といった感じである。

「無茶をするのは結構だ。だが、それには責任というものがある。子供の責任はいつも親が……」

「よさないカリジヨ。教育熱心なのは分かるが、せっかく残された家族三人が久々に揃ったんだ」

残された家族三人……そのルドヴィヒの言葉を聞いて、母マリアの顔を思い出す。ネッコはまた苦虫を噛み潰したような顔をした。

（あんなところに置いてないで……マリア母さんも我が家に呼ぶべきなんだ！）
テーブルの下でぎゅっと拳を握る。

（そうさ。そのためにもまずはゼムを倒して……）

「どうしたネッコ？」

何事かを考えている様子が傍目にも分かったのか、リジョとルドヴィヒは不思議そうにネッコの顔を見つめていた。

「え、いや、別になんでも……」

「しかし、お前が来てくれたのは、私は嬉しいぞ。お前は昔からこの研究所に来たがっていなかったからな」

「それは……恐れ多かったです。僕なんか立ち入ることの許される領域ではないと、子供心を感じて……」

まさか、魔法書を盗みに来た、なんて言うわけにはいかないネッコは、つい思いつくまま出任せに言った。しかし、完全な嘘と言うわけでもない。彼の心の中でこの研究所は王宮や神の住まう神殿の如く重厚な威厳を放っていたし、そもそも彼は、嘘をつくのがとても下手だった。生来、馬鹿正直で来たからだ。

「なにも恐れる必要などないよ。これからはいつでも来てくれればいい……歓迎しよう。もう

旅は続けんのだろう？」

ルドヴィヒが言った。

「いえ、僕にはやり残したことがあるんです。魔王を倒すって、自分にそう誓ったから……」
ネッコが言うと、リジヨは大声で笑った。

「はっはっは！目標は大きくもて、と小さい頃から教えていたが、いや、忠実なもんだなあ」
「父さん、いい加減に子供扱いはよしてくれないか？僕は本気だよ」

「だったら、私からも本気で言わせてもらおう」

リジヨが少し声色を落として言った。しかし、ネッコにたじろいだ様子はない。

ルドヴィヒは、やれやれ、と言った感じで目の前のカップを手に取り、静かに紅茶を啜った。
「いいか？無謀と勇敢とはまったく違う。それは散々教えたことだが……もしお前が本気で魔王に立ち向かおうというのなら、それはただ途方も無い課題に立ち向かう自分に酔っているだけだ。成長すらないぞ」

「魔王を倒した勇者アトロや賢者サンダルークたちも、僕たちと同じ人間だった」

「では、お前は自分にもその器があるか？」

「僕はルドヴィヒ・ヴァンシュタインの孫だ」

言って、ネッコはその言葉の残酷さに気づく。リジヨ・ヴァンシュタインの息子と言っても
らえない父親の心境とは、いったいどれほど寂しいものか。

しかしリジヨは表面にそう言った辛さを出したりする男ではなかった。あるいは、ネッコに

言われるまでもなく、彼は自分の力の無さを自分自身で悔やみ続け、すでに自分なりに割り切りのようなものを持っていたのかもしれない。自分の妻を自分の手で守れなかった苦しみ、ゼムを倒し家族を守る夢を我が息子に託すしかない苦しみ……それでも自棄になつて全てを打ち捨てるようなことをせず、目の前の状況に自分なりの力を発揮させることができるだけ、彼は本当の意味で強い人間なのだった。

リジヨは落ち着き、諭すように言葉を紡ぐ。

「……別に、お前に才能が無いと言っているわけじゃない。自分で考えたことを何もするなど言っているわけでもない。ただ、己の力をもてあそんで大事な時期を過ごして欲しくないだけなんだ」

「……分かつてるよ、そんなの」

「いや、お前には分からない。こればかりは、言葉の意味が分かった頃には、もう遅いんだ。だから親というものはこうして口うるさく……」

その時、誰かが勢い良く階段を駆け上り、三人の元へ向かつてくる音が聞こえた。何事かと思ひ、リジヨとネッコは立ち上がる。ルドヴィヒは驚いた様子もなく、もう一杯紅茶を啜った。

「大変です！」

ノックも無しにドアが開かれると、そこにはここの研究員の一人が立っていた。

「どうしたのかね」

「魔法書が盗まれました！そ、それも、あの怒りの書がです！」

研究員の言葉を聞き、さすがのルドヴィヒも立ち上がった。

「なに？」

（アルフォンソ、成功したな！）

ネッコは心の中で呟いた。

「犯人は？見たものはいないのですか？」

リジヨが訊ねる。

「いえ、見ましたとも！あの方は……リジヨ様と何度かここへいらした……そう、アルフォンソとか言う青年でした！」

（あの馬鹿、見られたのか！）

ネッコは小さく舌打ちをした。

「アルフォンソが？そんなまさか！見間違いでは……いや、まてよ……まさか……」

リジヨは言いながら、ふと、魔法書が喉から手が出るほど欲しい人物に思い当たった。おまけに、犯人と密接な関係を持っていて、普段は来ようもしないのに今日という日に限ってこの塔にいる、疑惑だらけの人物が。

リジヨはネッコの方に視線をやる。

「ネッコ。お前、まさか……」

ネッコはリジヨの言いたい事を察し、開き直って薄く笑った。

「父さん。僕には分からないから、何だい？」

「なんだ？なにを言っている？」

「さっきの言葉の続きだよ。いまの僕には分からない事だから？」

ネッコはそう言うのと、窓の方につかつかと歩み寄った。そして、両開きの窓を思いっきり開け放つ。

「だから、もう少し親の言う事を聞くんだ！」

「ごめんだね！」

ネッコは叫んだ。

「待つんだネッコ……！」

ルドヴィヒが静かに、それでも力をこめて言う。

「あの魔道書だけはいかん。あれは読むものの精神を……魂を、押しつぶす」

ネッコは、ルドヴィヒの重い口調、そして、魂を押しつぶす、という言葉の響きに、ゾクリとする。しかし、負けじと言葉を返す。

「ルドヴィヒ祖父さん。それは、あなたご自身が読まれたのですか？」

「いや……私はその器ではない」

「それだ！」

ネッコが窓の手すりに飛び乗ると、リジヨはゆっくりそちらに近づく。

「待つんだ、ネッコ！」

「待たない！僕が祖父さんを超える見込みは、そこなんだ！分かるかい？祖父さんには追われ

るものが無かった……力の必然性が無かったんだ。LV5の魔法書なんて、読む必要が無かった！ゼムという強敵が現れたときには、祖父さんはすでに完成していたもんな！強力な魔法が無かったって十分に戦えた！」

ネッコは言った。

「だから、父さんが僕のことを完成していない、未熟だと言うなら……いまこそやらねばならない試練なんだよ！」

「試練と称して、地獄に飛び込む馬鹿がいるものか！」

リジョがそう言うと、ネッコは躊躇わずに塔の窓から飛び降りた。リジョと研究員がそちらに走りよる。ルドヴィヒはゆっくりと自分の席に戻って、腰を下ろした。

ネッコは二十m近くもの高さから落ち行く途中で詠唱を唱え、地面に叩きつけられる直前に魔法のシールドを張った。それでももちろん衝撃が完全に防がれるわけではなく、右肩をもちろに強打し、続け様に顔面を打った。

「……っ！」

しかし、追手の研究員たちにつかまるわけにも行かず、彼はよろめく足腰と自分の意思に鞭打って走り出した。そして、先に出ていたアルフォンソが手引きした馬にしがみ付き、ままと逃れたのだった。

その一部始終を最上階の窓から見ていたリジョが、ゆっくりとルドヴィヒの方を振り返った。

「……ふう」

大きな溜息をつき、椅子に腰を下ろす。

「まったく、あの馬鹿……」

リジヨは呟くと、がしがしと頭を掻いた。そしてもう一度大きなため息をつき、ぼんやりと天井を眺めた。

「……私は別に、あの子に私を超えるような魔法使いになってもらいたいなんて思ったことは無かった」

ルドヴィヒが呟くように言う。

「ただもう、残された家族で静かに暮らしたかったのだよ」

「血がそうさせるのか、あるいは時代がそうさせるのか……」

リジヨが言った。

「もし、この乱世の時代が新たな賢者サンダルクを必要とするのなら……お前が命をかけてそれを目指すと言うのなら、ネッコ、私はもはや止めはせんよ」

ルドヴィヒは言い終えると、ゆっくりと紅茶を啜った。そしてカップをテーブルに置き、ハシカチで口元を拭う。

「……冷めているな」

ルドヴィヒは呟いた。

入れましょう、とささやくように言い、リジヨは立ち上がった。

もと来た道をそれぞれの馬で全速力で飛ばすネッコとアルフォンソ。

「いや、危なかった！」

アルフォンソが言う。

「どうも倉庫の扉が開けっ放しになってたみたいでさあ！ちよつと中身を確認したら、まんと見つかったよ。ほら、これが例の魔法書さ！」

「アホか！」

ネッコはアルフォンソからふんだくるように魔法書を受け取った。

「成功したんだからいいだろう？」

「ああ、ありがとうよ！お陰で父さんと祖父さんに全部バレバレだよ！」

「うう……はあ……俺もうリジヨ先生に作品見てもらえないかもなあ……」

そう言うのと、アルフォンソはがっくりと肩をうな垂れた。

「……でも、すごいなその本。ちらりと読んだが、賢者サンダルーク思想そのものが書かれてるみたいだ」

「魔法ってのは思想だからね」

「古代魔法（クラシック）だよな？」

「クラシックのLV5さ！」

ネッコは意気揚揚と答えた。

アルフォンソとネッコが言うクラシックとは、魔法技術が発達する前の魔法全般を指す。ル

ドヴィヒを始めとする現代魔法使い達が作成した複合魔法や変則魔法が現代魔法（モダン）と言われるのに対し、そのルーツにあたるのがクラシックだった。モダンはそれほど魔力の高くない魔法使いにも安定して強力な魔法を使うことができるが、本当に魔力がその威力に影響を及ぼすのはクラシックの方だった。それだけに魔力が暴れ、使いこなすのは難しい。

「凄いだらう？」

「文句無しに最高クラスの魔法だよ！もしこの魔法書を体得できれば、現存する人間でLV5の魔法を使えるのは恐らく僕だけだろう。いても二、三人、もしくは人間以外の……」

（そういえば以前、次元を超えて樹海を転送する魔法を見たな……あれも間違いなくLV5だ。きつと魔物か……下手をすれば使徒クラスの敵だったのかもな。くわばらくわばら）

「ネッコ、お前にそれほどの魔法が使えるのか？」

「やってみなきゃ分からないし、やらなきゃならない」

「お前をそこまで駆り立てるのはなんだ？旅先でできた恋人か？」

「妹だよ」

ネッコが言った。アルフォンソは驚く。

「妹！？お前に妹がいたのか？」

「みただよ。父さんの子じゃないけどね」

「……うーん、お前もまたややこしい境遇だな」

「まったくだ」

やがて二人はヴァンシユタイン家にたどり着いた。ネッコはアルフォンソに礼を言い、読み終わったらきつとそちらにも貸すという約束をして、そのまま別れた。アルフォンソも一人の創作者として、サンダルークの思想に興味をもったのだった。

家の玄関をくぐると、ネッコはまっすぐに自分の部屋に飛んでいった。リタとナターシアが何事かと驚く。

「ちよいと、なんなのさ！帰ってくるなり自分の部屋にすつとんで……」

ナターシアがネッコの部屋をノックして、ドアノブをがちゃがちゃと回した。しかしドアは開かない。

「鍵までかけてる！」

「なんでもないよ！」

ドア越しにネッコが叫んだ。

「ちよいと、まだベッドにシーツかけてないんだから、開けておくれ！」

「いい、いらぬ。集中したいから、三時間ほど静かにしてくれ」

「……私、もう寝るんだから。シーツとお布団、ここに置いてくからね」

「ああ、ありがとうナターシア。おやすみ！いい夢を！」

「なにがよい夢よ、全く……」

ぞんざいなネッコの態度に、ナターシアは不愉快そうにしながらその場を離れた。しかし、

それでもネッコの子供のようなはしゃぎっぷりが気になっていた。

（あんなに嬉しそうにしてさ……なにか面白い本でも手に入ったのかしら？……明日聞いてみようっと）

（さて！）

ネッコはソファァーに腰掛け、怒りの書の表紙を眺めた。数百年の年月を感じさせない質の良さは、恐らく魔法でコーティングがなされているお陰だろう。

表紙に手をかけたとき、ネッコは急に不安になった。

（祖父さんは……魂を押しつぶすとかなんとか言っていたな。もし僕に器が無ければ、僕は死ぬのだろうか……？）

必死で自分を止めようとしていたリジョとルドヴィヒの姿を思い出すと、空寒いものを感じる。ネッコは恐怖心を払うように、首を左右に振った。

（えい、畜生！僕は決めたんだ、なにをいままさら迷う必要がある！読むんだ！）

ネッコはそっと表紙をめくった。視界に飛び込む『魂の修正と、その方法について』という見出し。背中にぞくりと寒気が走る。

ネッコはとりつかれたように読み始めた。

魂の修正を行うにあたって、諸君らはまずその欠損を認識しなければならぬ。また、その修正目標である完全なる魂というものなど、この世に存在しないということも知りおく必要がある。人の魂にはそれぞれの色彩や形状が存在し、同じ物など一つも在り得ないのだが、普遍的という意味ではある一種の共通意識が存在する。その共通意識の更なる根源、つまり、人間という種を胎児の更前から形づくる雛型（私はそれを『アーキテクト』と呼んでいる）と言つて差し支え無いだろう。本書ではそのアーキテクトの中でも『怒り』という感情についてのフォーマツトを記述し、それを発展させ、魂の修正に助力を及ぼすことを目的とする。

魂の欠損とは、悲哀や孤独、不満と言つた心の苦痛を指す。人の心にはそれら苦痛を修正しようとする働きがあり、怒りという感情は外部に対し最も攻撃的かつ顕著に働く。

アーキテクトにおけるフォーマツトの一種にアイコンと呼ばれる感情のシンボルが存在する。アイコンは人の魂の最深層部に住み着き人の感情を刺激する。怒りのアイコンは『モディファイド・ベア』と呼ばれる熊のような形をしたものであり、普段は無意識の住人なのだが、稀に強い怒りを持った人間には夢の中などでその姿が感じられることもある。

ネッコはそこで、母マリアが編んだというぬいぐるみ、クマネコ王子の存在を思い出した。鞆の中から、そっと取り出す。

（ひよっとするとこれは……母さんのモディファイド・ベアだったのだろうか？……ゼムという人間に対する怒りのアイコン……そうかもしれない）

術者は魂の欠損を自覚した後、アーキテクトの領域にまで精神探求を深め、より純粋な怒りの存在を確認、続いて魔力に投影し、現実世界においての力へと変換する。その何よりも純粋な力のイメージは無双の破壊力を発揮するが、安定と維持が難しく、並み大抵の集中力ではイメージの具現化すら不可能であろう。

また、特に修正を必要としない魂（あるいはそれは幸いであるが）からは、何の力も得られない。力を追い求める必然性や、より大規模な魂の欠損こそが、例えば本書の場合、より強大なモディファイド・ベアを形成させ、力を呼び起こす。

……。

やがて、三時間が過ぎ、ネッコは怒りの書を読み終えた。ぼんやりとした頭の中に、奇妙な痺れが残っている。ぶっ続けで本を読んだ疲れとはまた違う。これも本の魔力だろうか？

ふらふらと立ち上がると、部屋のドアの鍵を開けて廊下に出た。まっすぐリビングの方へ向かい、桶から水をすくって顔を洗う。冷たい感触が顔の筋肉の疲れを癒す。

リタもナターシアも眠っているのか、家の中はしんとしており、物音一つしない。おまけに、

半開きのネツコの部屋から漏れる明かり以外はまったくの闇であった。時刻は夜中の二時。リジョのまだ帰っていないところを見ると、きっと今日は帰ってこないのかもしれない。

そして、強烈な睡魔。ネツコはおぼつかない足取りで幽霊のように自分の部屋へととってかえし、部屋の前に置いてある丁寧なたたまれたシートと布団に目をやった。しかし、今の彼にはそれをかける気力も無く、部屋に入るなりだらしなくソファーに寝転がると、二、三呼吸の間に夢の中へと吸い込まれていった。

……ここはどこだろう？

夜、何かの祭りのようだ。蛍のようにゆらゆらと揺れる赤い灯籠を飾った、不思議な印象の屋台がずうっと立ち並ぶ。目の前にはよく分からないガラスケースのようなものがずらりと立てかけてある。一mちよつとの高さの額縁にガラスをはめ込んだものだ。ネツコ少年（年齢にして六歳ぐらいの背格好）はゆっくりとガラスケースに近づくと、その中に蠢く奇妙な生き物に目をやった。ゼラチン質の、半透明で薄紫色をしたイカのような生き物が、やり場の無い足をうねうねとケースのなかで蠢かせているのだった。

（気持ち悪いなあ……）

何より不気味だったのは、イカの肉に薄っすらと浮かぶ細い血管と思われる筋が、人の顔を象っていたことである。いったい……これはどういったものなのだろう？ネツコ少年は隣のガ

ラスケースの前に立っている夫婦を見たが、彼らがガラスケースの前でなにをしているのかさっぱり分からない。何かを二、三言話しては、イカを指差して笑うのである。

(鑑賞するもののかな……それとも……)

突然、なんの前触れもなく、ネッコの右肩がずしりと重くなった。こけそうになるのを堪えて、二、三歩後ろによろめく。

見ると、なんと目の前のガラスケースに入っていたはずのイカが、自分の肩にべっとり張り付いているのである。彼は恐怖した。ネッコ少年は慌てて引き剥がそうとしたが、足がピツタリとからみ付いていて離れない。叫ぶことも忘れて壁際まで走ると、彼は何度も何度もイカを壁に叩きつけた。何度も何度も何度も何度も叩きつけているうちに、イカの体内から紫色の粘着性のある体液が噴出し、彼の体はべとべとになった。力尽きたイカが足の力を弱め、そのまま地面にぼとりと落ちる。

ネッコ少年が恐る恐るイカに近づくと、例の血管で構成された人の顔が、苦悶の表情を浮かべている。苦痛と、憎しみに歪んだ、地獄の亡者のような相。

「うわああああ！」

そこで、初めてネッコは叫んだ。イカはぶちぶちと泡を吐き、激しく痙攣し、いまにも死に瀕しようとしている。しかし、そのおぞましい目つきは、まるで少年も一緒に地獄へ引きずりこもうとしているかのようだった。たまらず屋台を駆けていくネッコ。

人ごみを掻き分け、信頼できる人間を探す。死に物狂いで走るネッコを、誰一人として気に

もとめない。

「父さあーん、母さあーん、どこーっ！」

涙が溢れた。二人は自分をこんな場所ではつたらかして、一体どこへ行ってしまったのだろうか？孤独と寂しさを感じながら、ネッコ少年は安息を求め、走りつづけるしかなかった。

やがて、祭りの離れにある波止場にたどり着くと、ネッコは自分の背筋に電流のような衝撃を感じ、自分の目を疑った。岩肌にはびっしりと張り付いている、さっきのイカと同じ種類の生き物たち。数十匹はいるだろうか？そのイカの群が、一匹残らずネッコ少年を睨みつけているのである。顔と言ってもしよせん血管が織り成すただの模様だと言うのに、その形相は同胞を殺された憤怒を湛えている様にもみえた。いや、今のネッコにはそうとしか思えなかった。

「ごめん、ごめんよ」

ネッコは謝った。

「ごめんなさい！」

謝りつづけるネッコ少年。

ぶちぶち、という音が聞こえる。

その瞬間、数十匹のイカは一匹残らず溶け始めた。炎天下に放置したチョコレートのように、どろどろどろどろと溶け始める。紫色の粘着質の液体が岩肌からべとべとと海に流れ落ちていくのが見える。真っ暗闇の海に色の変化は見受けられないが、朝になればこのイカの体液の色……グロテスクな紫色に変わっているのだろうか。

「ネッコは混乱した。ただもう恐ろしかった。自分が何かとんでもない事をしでかしてしまつたのではないだろうか。」

ふと、自分の肌が妙に浅黒いのに気づく。暗くてよく見えなかつたので、明かりのある屋台の方に近づくと、視界に光が戻って、その正体をようやく理解した。先ほどのイカの血管の顔が、自分の肌のありとあらゆる場所に張りついていたのである。ネッコは恐怖に顔を歪めた。そして叫んだ。狂わんばかりの絶叫を上げて、どうすることもできず、また走り出した。走って、走って、走りぬいて、たった一人で一体どこへ行くのだろうか？どこへ行こうと、恐怖は振り払えないことを知りながら、それでもただ走りつづけるのであつた。

「わああああつ！」

ソファーから飛び起きると、窓から朝日が差し込んでいた。起き上がった拍子に舞い上がった細かい埃が、日の光に照らされてきらきらと輝く。ネッコの目にはなぜかそれが、なんとも言えぬ悲愴な光景に写つた。いや、光景が悲愴のではなく、彼自身の心が悲しみに満ち満ちていたのである。

(なんだ、さっきの夢といいこの気分といい……最悪じゃないか……)

顔を洗おうとソファーから立ち上がろうとするが、足腰に力が入らない。開けっ放しのドアを眺めているうち、起こしている上半身ですら支えるのが困難になり、彼はまたソファーに沈

んだ。

(……おかしいな……なんだ?)

やがてのしのしと廊下を歩いてくる音。開けっ放しのドアの前をナターシアが通ると、彼女はちらりと部屋の中を覗いた。

「シーツをかけたときなさいって言ったでしょーがぁー?」

部屋の前に置いてあるシーツを見て、叱り付けるにしても冗談めいた、間延びした声でナターシアが言った。しかし、ネッコは仰向けにソファーに沈んだまま目を閉じ、ピクリとも動かない。

「ほら、起きなさいよ。グータラ!」

ナターシアがばんばんと手を叩くと、ネッコは目を少しだけ開けて天井を眺めた。しかし、視界に写る天井にすら重さを感じ、彼はもう一度目を瞑る。細い溜息。

「……どうしたのさ?気分でも悪いの?」

ナターシアの問いかけに、ネッコはうんうん、と何度か頷く。ナターシアはソファーの前まで来ると、そこで寝転んでいるネッコの額に掌を当てた。ひんやりとした感触が心地よい。

「熱は無いわね。朝ご飯もって来ようかしら?」

ナターシアの言葉に、ネッコは首を横に振る。

「いい」

ネッコは何とかそれだけ言うと、ごろりと寝返りを打ち、体勢を横にした。

「……困ったわね、リタは出かけてるし……」

どこへ？と問い掛けるようなネッコの目。

「ほら、町内会の公園掃除だよ」

「……こんな時間から？」

「なにがこんな時間さ。もうお昼前よ？いつまでもいつまでも牛みたいに寝てるんだから」

そう言うとナターシアは、昨日から部屋の外に置いてある布団をネッコの上に被せて、部屋を出て行った。

（風邪じゃない。これは……怒りの書の効果か……？魂の修正とか言う……どうだろうな）

ネッコはあまり暑いので、ナターシアがかけて行った布団を荒々しくめくり、下半身にだけかかるようにした。

（くそ、ホントにたまらないぞ……この気分！）

夏の陽気にむしむしとする部屋の中で、耳鳴りだけが高まっていく。体の皮膚が敏感になっているのか、衣服が擦れ合うだけでゾクゾクと嫌な寒気を感じる。しかし、気温は高く、煌々と輝く太陽を窓の外に感じ、あまりの暑さにそれだけで吐き気を催し、意識が朦朧とするほどだった。寒気はおそらく精神的な寒気である。ネッコは自分の息が荒くなっていくのを感じた。

（祖父さんが言ってた……魂を押しつぶすって言うのは、これのことか？これじゃまるでなにかタチの悪い呪いじゃないか！……もしかすると、あのとき案じた通りに僕には器が無かったというのか？冗談じゃない！LV5だろうがなんだろうが、たった一回だけ使えればいいん

だ！怒りのアイコン？そんなもの、腐るほどあるさ！僕には、燃え滾るような怒りがある！ゼムに
対する、母親の怒り……）

ネッコはぎくりとした。

（本当に？本当にそうなのか？……いや、嘘だ、嘘だよ、それは！母さんの件で本当に怒って
いるのは、僕じゃない。アムリタだ！僕だつてそりゃ怒ってはいるが……これを怒りなんて言
えばアムリタのは一体なんだ！？彼女はゼムのお陰で、生まれてからずっと本当の孤独を味
わってきたんだ……一人ぼっちとか、仲間外れとか、そんな次元の話じゃない。絶望つて名前
の断崖にたった一人で腰掛けて、誰かから暖かい手を差し伸べられるのをずっと待っていたん
だ……だから……）

ネッコは頭の中で鳴り響く自分の声にハッとすると、慌てて上半身を起こしてきよろきよろ
と辺りを見回した。

「……なんだ、今の声は？僕の声か！？なにを考えていたんだ僕は？」

思わず呟いて、現実の自分の声を確認する。

（おかしいぞ……僕の声と言うか……頭の中で考えが止まらない！畜生、それも、気分のせい
か、嫌なことばかり頭によぎる！……嫌なこと？……ふん、そりゃそうさ。僕の人生なんて、
嫌なことの連続だもんな。嫌なことだけがいつぞやのモグラの穴やくっだらな三文コンサー
トの行列みたいに延々と続いて、たまに良い事があったと思えば、それは更に僕を絶望のどん
底に突き落とすための前フリってだけで……）

「い、いけない！」

ネッコは首を左右に振る。

「いけない！考えるな！」

ネッコは自分のこめかみを両手でおさえた。ぎゅっと奥歯を噛み締める。

（自業自得だよ。興味本位でLV5の魔法書なんかは手を出すからさ。ルドヴィヒ祖父さんを超える？よくも恥ずかしげも無くそんなことが言えたもんだな！お前の行動は祖父さんと父さんを裏切ったんだ。アムリタのためと称して自分の力を求める欲望のために、祖父さんの元からこの魔法書を盗んだんだ！）

「ち、違う……あ、いや、いけないまただ！」

（力を追い求める必然性？馬鹿言っちゃいけないよ！そんなもの無いことぐらい、お前はとっくに知っていた。だろう？）

「くっ……！！」

（必然性なんて言葉を口実に、お前は魔法書の力を借りて、他人を出し抜こうとしているのさ。まったく、卑しい根性してるよ）

ネッコは頭を抱えてソファアーの上にうずくまった。そして、念仏のように同じ言葉を何度も唱え、気を紛らわせようとする。

「ええい、うるさい、なにも考えるな、うるさい、うるさい、うるさい……」

「なにブツブツ言ってるのさ。朝ご飯もってきたよ」

ドアの方からナターシアの声が聞こえる。しかし、ネッコは振り向く余裕などなかった。

「ほら、起きて。病気なんだったら、食べなきゃ体が参っちゃうよ」

「……」

「どうしたの？食べないの」

「……いい」

「またそんなこと言う……ほら、食べやすいお粥にしてきたからさ」

「いいから、ほっといてくれ」

「……でも……」

「たのむ……」

頑なに拒否するネッコを見て、ナターシアはお盆をテーブルに置いた。

「じゃあ、食べたくなったら、ここに置いておくからね。言ってくればもう一回火もおすし」

「いらないから、向こうに持って行ってくれ。胸がムカムカするんだ！」

ネッコの剣幕に、ナターシアは一瞬きよんとした顔つきをした。

「……やれやれ。そんなら勝手においし」

ナターシアは肩をすくめると、腹立ち紛れに文句をぶつぶつ言いながら部屋を出て行った。

しかし彼の言葉に反して、食べ物はずテーブルに置いたままであった。

部屋が静かになる。外から子供がなにか駄々をこねるような声が聞こえ、それをたしなめる

母親らしき人物の声も聞こえた。その無邪気なやり取りが、ネッコの孤独感を煽る。

(こりや、まずいぞ……)

ネッコは思った。

(畜生、まるで拷問だ！これに耐える事ができれば、僕はLV5の魔法を使えるのだろうか？……そうだ、精神探求って言ってたっけ……こういう精神状態で……僕の中の怒りのアイコンを……探すんだな)

ネッコは起き上がると、ソファーに腰掛けた。

(怒り？怒りだって？お前がなにに対して怒ってるってんだよネッコ。ゼムに対してか？違う！魔王？違う、違うぞ！僕が怒ってるのは……父さんか？僕のことを何一つ認めない、お前のためだと言いながら僕を否定しまくってる父さんだ！それで僕は……父さんを否認なしに認めさせるために、あるいはゼムを討とうと、あるいは魔王を討とうとしているんだ！そう、父さんの成せなかつた偉業を果たして……)

「違う！」

ネッコは思わず叫んだ。

(それでも父さんの言ってることは……もっともなんだ！父さんにそう言わせざるを得ない原因、つまり……僕がいけないんだ。僕が本当に怒りを感じているのは、僕自身なんだよ！臆病者で、卑怯で、なんの力も無い！そのくせ自分以外は誰も信用せず、自分は不幸だ、なんて思っくいやがる……)

「いや、でも、違うんだ！違うんだよ！」

ネッコは立ち上がると、拳を握り締め、胸の前にもってきた。誰かがいるというわけでもないのに、訴えかけるような語り口。

「今回のことで、僕は初めて自分のため以外の理由で力を望んだんだ！そう、アムリタを救う為に！」

（本当か？）

「本当さ！これが力の必然性でなくて、なんだというんだ！僕は兄として……」

（本当に？）

「本当さ！」

（本当に？）

「しつこいなあ！本当だよ！」

心の中から疑惑の声が聞こえる。

ネッコはおちつかないに部屋を一周すると、テーブルの前に立ち止まり、ナターシアの持ってきたお粥を眺めた。スプーンを手にとり、一口だけ口に放り込んだものの、到底食べる気など起こらずそのままスプーンを置いた。

自分を偽り、都合のいい解釈で自分を納得させようとしても、心の中の声は一段と増すばかり……蓋をすればするほど、出口の小さい水鉄砲のように、勢い良く飛び出す自らへの叱責。

「兄として、だって！？」

突然、ネッコは大声で叫んだ。

（僕はアムリタに……彼女に気に入ってもらうためだけに……彼女の言いなりになってるだけなんだ！本当にアムリタのことを思うなら、どうして彼女の死を目の前にして最後の悔いがあるのと言ってるんだ？敵を一緒に討つかどうか……彼女が死なない方法を死に物狂いで探すだろう、普通は！だのにどうしてこんなところで……お前はなにやってるんだ？つまらんことをクヨクヨよくよ……他人にばかり迷惑かけて……そう、自分の心配だけしてるんだ。アムリタが明日死んだら「どうして死んだんだ！」なんて言って感傷に浸って……運命を呪うんだろ！馬鹿馬鹿しい。運命を呪う前にお前は一体なにをした？）

「いや、違う！違う違う違う！違うんだよっ！」

どっさりと椅子に座り込む。椅子は壊れそうな軋みを上げた。

（それは全部、僕が無力だからだ！僕に力があれば……魔法書を盗む必要もなく、とつくにゼムを倒していた！アムリタも救ってやれた！でもそんなことできるわけがない！一人にいたいだけだけの力があると思ってるんだ！そうさ、僕だけじゃない、みんなだってなんにもできやしないんだから……ふふふ……そうさ。一生懸命やったふりをしてりゃいいんだ。ダメだったって、どうせ誰にもどうしようもないんだから……そのどこが悪いんだ？そもそも、誰かが力さえ与えてくれれば、僕だって一生懸命……）

ふと頭の声が止んで、シンとなる部屋。あれだけやかましいのに、この孤独は一体なんだろう？

ネッコは急に自分が衰れになった。

「……最低だな……」

苦しく言い捨てる、ネッコは椅子から立ち上がり、ドアを開けるとふらふらと廊下に出た。

「あら？」

廊下でネッコとすれ違ったナターシアが心配そうに彼の顔を見た。ネッコといえば、彼女の方を気にもとめない。

「どこに行くの？体はもういいの？」

ナターシアが声をかけてもネッコはなにも喋らず、ただ俯いたまま玄関へと向かう。

「ちよいと、夕食は……」

ナターシアの言葉を遮るように、ボタン、と閉じるドア。ナターシアは廊下に一人きりでと残された。

「な、な、なな、なにさ、あの態度！」

ネッコの不遜な態度に怒ったナターシアは、それでも彼のことが心配で仕方が無かった。傍から見ても、彼は明らかになにか性質の悪い病気に取り憑かれていた。引き止めるべきだったのではないか？そう考えるナターシアだが、容易にはそうはさせない雰囲気からネッコから漂っていた。彼女でなくても、あの幽鬼のようなネッコを引き止めるのは難しかった。

——町の広場。

「社会とは、政治とは！」

リンボーが大声を上げた。元老院議会の公開演説である。魔王関係で荒れる情勢を期に、元老院議員たちは政権の奪取に必死になっていた。もちろん、スイートピーを始めとする王制支持派は参加していない。

「そこに住む市民のためのものであり、一部の権力者が独占、牛耳るものではないのです！」
焼き付けるような太陽に照らされ、リンボーの丸々とした顔からは汗がぼとぼとしたり落ちる。しかし、そこに集まる民衆の大半は昼休みの座興程度にしか聞いていなかった。

一部の「先見の明」とやらを持ちたがる学生たちはリンボーの言葉を熱心に聞いていたが、どちらかというところの批判的な目は、政治家というエリートに対する粗探しに必死なだけだろう。自己満足的な優越感を求めている、身勝手な批判である。

そこへ、たまたまあのネツコが通りがかった。うかつに外に出たため、灼熱の太陽の光が、ただでさえ昏迷していた彼の精神を更に苛み、完全に判断力を奪っていた。

「正当な投票で選抜されたわれわれ元老院議員こそ、その市民達の代弁者たるにもっとも相応しい……！」

視界に醜いブタのようなリンボーの顔が飛び込む。ぎよつとしてネツコは足を止め、リンボーの言葉を耳にすると、煮えたぎるような怒りが下腹部から登ってくるのを感じた。あまり

の怒りに、彼は一瞬、その場で失神しかけたほどだった。

「冗談じゃないんだよ！」

ネッコがリンボーに向かって叫ぶ。そこに集まる民衆やリンボーは、ネッコの火のような怒声に思わずぎくりとした。

「……いろんな社会、いろんな政治……言い方は様々だが、結局どれも支配に過ぎないんだろ？ いや、僕はそれが嫌だと言ってるんじゃない。統率するもの、されるもの、それが集団生活というものの摂理なら……僕は自分の意思を一部の者に託しもしよう！ だが、ほんとうにお前たちに王としての任が務まるというのか？ ええっ？ 文句と揚げ足取りだけがとり得の三流議員たち！」

その場にいた全員の視線がネッコにあつまる。しかしそれは、面白そうな奴が現れたぞ！ という好奇の視線ばかりで、彼の言う事を真剣に聞こうというものは少なかった。学生連中はでしゃばりを不愉快に思い、やはりはなから批判的な目つきだ。

しかし、いまのネッコはそんな民衆の視線などかまいはしない。気づきもしないのかもしれない。言葉を続ける。

「僕たち市民が見ているのは、権力者が自分たちに有利かどうかなんてことばかりじゃない。個人の人間性だ！ 本当に民衆を纏め上げ、導いていく意志をもった王足るべく個人だよ！ 偽善と言うギトギト油の革張りをしたそんな醜い顔つきで、功利というエサをちらつかせて人々の欲を釣り上げようとしながら、よくも市民の代弁者などのたまうものだ！」

「違う！違いますぞ！」

「使いたくも無い敬語なんて使うな！」

「違います！支配が世の常だなんて、私達は思っておりません！これは一種の……そう、契約です！」

リンボーはネッコの方をみず、民衆に向かって訴えかけた。

「あなたがたは代弁者として私たちを認め、自らの意志と言う一票を投じる。私たちは集められた意志だけ……」

「ふん、契約ときたか。いい言葉だよな！」

ネッコは苦々しく言い捨てる。一層の人だかりが集まり、人々はネッコに注目していた。ネッコは構わず言葉を続ける。

「契約なんて言葉を使えば、もっともらしい。新しい感じがするもんなあ！しかしな、よろしいか思想家さん？契約の行く末は肩身の狭い束縛だよ！契約という足枷に足を引っ張られて、結局、誰も一步を踏み出せないぎこちの無い社会ができるだけだ！」

「それは安定です！」

負けじとリンボーが言い返す。

「安定を目指して、人類は進んでいくものです！」

「くだらない！出てくるのは安っぽい幻想だけだ！……社会は生き物だぞ？安定などするものか！そんな安定なんてもの、ガチガチに固められた肉団子が腐っていくのと同じじゃないか！」

社会だつて時には勇氣を振り絞つて、更なる一步を踏み出さなければいけないときがある。あるいはなにかを捨てなければならぬこともある。破壊なくして創造はありえないんだ！契約に固められた人間にそれができるのか？できはしまい！それにお前は……人類最後の敵、あの魔王とも契約しようつてのか！？」

「それではあなたは一体どうなさるというのです！」

リンボーはネットコに向かつて叫んだ。

「このまま王制という独裁が続いていく現状こそ、あなたの言う固められた肉団子に違いありませんじゃないですか！」

「王という絶対的な存在の独裁だからこそ、人間らしい血の通つた意志というものが介入する余地があるんだ！最後に王が選択をし、民衆がそれに従う。例えそれが危ない橋であろうと……ルールにしばられ、選択の出来ないままぐずぐずと腐っていくのとはわけが違う！ましてや魔王軍の迫り来る昨今だ。羊に頭を下げる羊飼いが、腹をすかせた狼から羊を守るつてのか！？」

「馬鹿げてますよ！馬鹿げてる」

リンボーは大げさに、わざとらしい笑い声をあげた。

「あなたのような人は、沈みゆく船に乗った船長をおだてているだけです。なーんにもなりやしない……」

「いや、僕は信じるぞ。ユング王の人間性に、この全生命を賭けたつていい。僕はそう言つて

るんだ！」

ネッコは握りこぶしを胸元にあてると、挑みかかるような目でリンポーを見た。

「そうさ。話をややこしくして誤魔化すわけにはいかないな。僕には、お前のような人間は信じられないし、信じたくもない。自分の利権だけを考えて、民衆を騙そうとする人間にはついて行きたくないと言ってるんだよ。ユング王やスイートピー様、父さんやシーグムンド將軍の人間性を信じると言っているだけの話だ」

「馬鹿げてる！人間性！」

リンポーはネッコをあざ笑った。その顔には、もはや政治家らしい体面の面影は無い。

「ぶふっ……汚いことを見ずには、政治なんてつとまりやせんよ」

「ズルするのは力の無さ、人の弱さがそうさせるだけさ。いや、もうこれ以上なにを言っても無駄か」

ネッコはさっと後ろを振り向くと、人だかりを掻き分けて外に出て行こうとした。サンダルークの貧民階級には受けの良い思想だったのか、はたまたネッコの真剣さに心を打たれたのか、リンポーという鼻持ちなら無い政治家を叩きのめすことができた爽快さからか、人々はまばらな、それでも好感触の声援をネッコに送った。あの皮肉だらけの学生連中も、あざ笑うような視線をネッコにやりながら、しかし、ある種の説得力が彼の言葉の中にあるのを認めていた。

しかし、ただ怒りや憎しみといった毒々しい気持ちに塗り固められたネッコの意識には、民

衆の声援など届いていないのかもしれない。

「馬鹿げてる！人間をなんだと思ってる！」

リンポーはそればかりを繰り返していた。

「動物とは違うんだぜ、小僧！」

やっこのことで人だかりの外に出るネッコ。よろよろとこけそうになるのを堪えて、リンポーの方を一瞬だけ振り返った。

「動物だよ！」

「違う、だんじて違う！」

馬鹿げてるのはそっちだ！とでも言いたげに、ネッコはいらついた顔つきでその場を離れた。

（外に出たと思ったら他人に八つ当たりか！）

ネッコは思った。もはや彼の目に写るもの、聞こえるもの、考えること全てが、彼にとって憎悪の対象となった。

（お前はどうかんだ、ネッコ・ヴァンシユタイン！他人に言っているのは、全部自分のことじゃないのか……？王を信じろ、なんて言ってるくせして、なにかあったら文句、文句、文句だ！他人に対しても、自分に対しても！本当は「いや、それでいいんだ、大丈夫さ」と声をかけてもらいたいのに、それを嘘だと身勝手に信じて、そして突っぱねる！お前は一体どうしたいんだ？一体……）

太陽の熱にやられた頭で、ふらふらと公園に向かう。備え付けのベンチにとっさり座ると、ネッコは前かがみになってうずくまった。

(……いったい、誰が僕を救ってくれるんだ?)

ぼんやりと頭をあげる。公園にはハトが二、三羽と、散歩にきた老夫婦が二人、そして親子連れがいた。彼らは転がり込むようにやってきたネッコに一瞬気を止めたものの、すぐさま自分達の日常に戻っていった。

(誰だ……アルフォンソか? ロアか? メルフィナ? アッド? ライオネル? 父さん? ルドヴィヒ祖父さん? ……マリア母さん……? 彼らが僕を救うのか? 違う、彼らは僕を救う存在なんかじゃない。彼らなんかは僕を救えるわけがない! そうさ、結局、僕以外には誰も僕自身を救う人間なんていないんだ。ふん、知っていたはずだよ、そんなこと! だったら、そんな僕が……そんな人間がどうして他人を……アムリタを救うことができるっていうんだ? できっこない、できるはずがない! ……だったら……いったい……)

そうしている間にも、ネッコの昏迷した精神状態は悪化の一方を辿っていった。顔の肌や手の先、足の先が痺れるような感覚、強烈な嘔吐感。ついには、瞼から涙まで滲んでくる始末である。

(いったい、誰がアムリタを救ってやるって言うんだ?)

ネッコは立ち上がるが、不安定な体勢はすぐに崩れ、近くの木の幹にもたれかかるような姿勢で倒れこんだ。その時に頭を酷くぶつけ、額に血が滲む。さすがに不気味に思ったのか、公

園にいた親子連れはその場を離れ、老人達も訝しげな目を彼に向けた。

ネッコは自分の額から垂れてきた鮮血を持っていたハンカチで拭うと、ふらふらと自分の家に向かつて歩き始めた。

(……もうやめよう。全部やめだ。めんどくさい。疲れた)

ドアの開く音をききつけ、台所にいたナターシアは不安げに玄関に向かった。

玄関で顔をあわせるネッコとナターシア。

「帰ってきた」

ナターシアがポツリと呟く。

ネッコは出て行ったときと同じように、俯いたままゆっくりと自分の部屋へ向かっていこうとした。そんな彼の肩をがしつと掴むと、ナターシアはネッコの顔を覗き込むように見た。

ネッコは嫌そうに顔をそらす。

「ちよつと、ほんとうに大丈夫……？お医者様呼ぼうか？」

ナターシアは問うたが、ネッコからの返事は無い。

ふと、ネッコの肩が小刻みに震えるのをナターシアは感じた。

(子ウサギみたいに震えて……なにかに脅えてるのかしら?)

「寒いのかい？」

「……いい」

ネッコが虫の羽音のような声で言う。

「え？」

「……もういい」

「でもあんた……それ、おでこ怪我してるじゃない」

ナターシアの手からすり抜け、ネッコは自分の部屋へ戻っていった。

「ちよっと！」

ボタン、とネッコの部屋が閉まる音が、廊下に響く。

「……どうしよう、旦那様に伝えるべきかしら……でも……」

ぼんやりと天井を眺めるネッコ。焦点が定まらず、視界がゆらゆらと揺れる。

(……ひよっとして……僕はとんでもない勘違いをしていたんじゃないか……?)

ネッコは思索を続ける。ほんとうは身も心もすっかり疲れきっていて、そのまま眠ってしまったかった。

(勘違い……)

ネッコはゆっくりとソファから立ち上がると、部屋の真ん中でじっと立ち尽くした。

(勘違い……ってなんだ?……なにを勘違いしてたんだろう?……くそ、分からない……ああ、もう、どうでもいいや、どうでも……)

そう言って、再びソファに座り込む。ベッドを見ると、露出させていた木肌に白いシートがかけられていた。彼が出払っている間に、ナターシアがかけたのだろう。

ネッコは億劫そうに立ち上がるとベッドにまで行き、ごろんと転がる。

(……勘違い!……そうさ、とんだ勘違いだよ。僕がアムリタを救うなんておこがましい……彼女に救われつづけていたのは、僕の方じゃないか?一騎打ちの殺し合いになった時もありつの打算で助かったし、モグラの穴から出られたのも、あいつの知識……そうだ、そもそもあいつは、僕を兄として迎えるために……僕にゼムを討たせようとしてるんだ。僕に兄としてのメソツを立ててやろうって魂胆さ!ふん、まるで姉か、母親きどりだな、畜生……!僕といいマリア母さんといいゼムといい……ロクな引き合わせがないんだ、あいつは……)

突然、ネッコは自分がアムリタという少女に巢食う寄生虫のように思えた。背中をなめるようなざらつとした感覚。舌打ちをし、絶望の溜息を漏らす。

(死んでしまえ、俺なんて!)

ネッコの魂の修正は、そのまま一日を延々と続いた。魂の欠損と呼ばれる心の苦痛を目の当たりにし、一日目にして彼は、すっかり生きる気力を無くしてしまっていた。しかし、これもLV5の魔法を習得する道のりの、ほんの始まりに過ぎない。彼の苦難は続く。

「……ふう」

ベッドに寝転がるネツコの前にリジヨが現れると、彼は溜息をついた。リタとナターシアがその後ろで不安そうにネツコを見守る。アルフォンソもいた。

「すみません、リジヨ先生。こんなことになったのも俺が……俺が止めてれば……」

「いや、アルフォンソ、君のせいではない。君を責めるつもりもない」

リジヨは黙ってネツコを見下ろす。ネツコはしばらくリジヨを睨み返すように見つめていたが、ごろんと転がると、彼に背を向けた。

「坊ちゃん……」

リタがうめくように言う。

「ふん……自業自得さ」

ナターシアが言った。本心からと言うわけではないが、他人に対して……特に、周りに誰かがいるとどうしてもこういう態度をとってしまう性格なのだろう。

「……いいか、部屋に鍵をかけるな。食事が必要なときはリタかナターシアを呼ぶんだ」

「……」

リジヨがそう言うと、ネツコは返事をせずに、布団を頭まで被った。

「これはお前が招いた災厄だ。誰も同情はしない。自分の力で解決するんだ」

「旦那様……」

言葉の厳しいリジヨに、リタが呟くように言った。

「さあ、我々はもう行こう」

リジヨは捨てるように言い残すと、ネッコの背中を一瞥し、さっさと部屋から出て行った。

「……とんだグータラだよ、まったく……」

ナターシアもそれに続く。

「ネッコ……すまない」

アルフォンソが呟くと、ネッコは布団から顔を出して彼の方を見た。

「……こつちのセリフだよ、アルフォンソ」

ネッコがそう言うのと、アルフォンソは悲しみに満ちていた表情に一瞬だけ光をともし、やが

て顔を伏せて部屋を出た。

「坊ちゃん……頑張つて下さい、どうか……」

最後、リタがランプを消して部屋を出ると、真つ暗闇になった。外はもうすっかり夜だった。ぼんやりとした意識の中、月明かりに照らされて、テーブルにおいてあるクマネコ王子の姿

がネッコの目に映った。

「……」

彼はのそのそと起き上がると、王子を手にとった。

すると王子は独りでに動き、鋭い爪のついた右手を彼の掌に添える。

「……え？」

ぎよっとするネッコ。しかし、改めて見てみると、やはり王子はぬいぐるみらしくその腕を

だらんとさせているのだった。数秒間あっけにとられていたものの、ネツコは馬鹿馬鹿しくなってもう一度ベッドにもぐった。すると、まるで手品にかかったようにストンと眠りに落ちた。いまのネツコにとって、眠りとはなによりも甘美なものであった。

——サンダルーク城・城下町。

煌びやかな朝日を受けながら、ユング、エレイン、クーフーリンの三人が歩いてきた。ユングの趣味、市街視察である。護衛が少なすぎるとぼやくスイートピーをよそに、ユングがつける護衛はいつもクーフーリン一人だけであった。(もちろん、抜け目の無いスイートピーは、影に数名の護衛を市民に紛れ込ませていて、急時にはいつでも彼を助けられるようにしているが)しかし、それでも彼はむしろ、できることならたった一人で町を歩き回りたいぐらいであった。

今日はその視察に、大切な客人であるエレインもつきそっている。そのため、影の護衛の数も普段よりずいぶんと多く、三人の中でクーフーリンだけがその護衛の視線に気づき、自分の責任の重大さにいつもより余計に緊張を強いられるのだった。

「僕はこうして町を歩くのが好きなんだ」

ユングがエレインに向かって言った。

「馬車も使わず、大げさな護衛もつけず……できれば誰の視線も浴びずにたった一人で歩きた

いけど、それはさすがに叶わない願いだ。だから、いつもこうしてクーフリーンに迷惑かけてる」

「いえ、そんな……当然のことですよ」

「本当、近衛隊でもないのに、すまないな。でも……あのお高く止まった近衛兵連中より、町を歩くときはクーみみたいな友達と一緒にの方がずっといいのさ」

「友達」

隣を歩くエレインがユングの言葉をなぞる。

「自分の部下を友達などと呼ぶのは、驕りじゃありませんこと？」

はつきり言う人だ、とユングは思った。

「友達は友達。部下も上司も関係ないさ……ただ、少し窮屈な付き合い方を強いられてるってだけで」

二人の王族のやり取りに、クーフリーンは居心地悪そうにもじもじするだけだった。

「さあ……では、あなたのお友達はどう思っているかしら？」

エレインの言葉にギクリとするクーフリーン。

「え？わ、私は……」

ユングもクーフリーンに視線を向ける。

「私は……それは……ユング様とお友達でいられるなら……でも……」

クーフリーンは思った。友達であることを否定すれば、ユングを傷つける。否定しなければ、

身の程知らず。他国の王女に、ユングがそんな部下をもつ王だと思われするのは、決して面白いものではない。エレインの質問はクーフリーンにとって、意外に難しいものだった。エレインがユングに対して「驕り」と言ったのは、このことを見越してだろうか？

「ふふ。冗談ですよ」

予想以上のクーフリーンの狼狽振りに、エレインは満足して言った。

「私も……私の立場からすると随分と身分の低いお友達がいますしね」

そう言つて、エレインはアムリタの顔を思い浮かべる。彼女がエレインの前から姿を消して、もう三日目であった。

三人は五番街を東に抜けて、そのまま真っ直ぐ四番街の方へ進んだ。そこは、魔法大国サンダルクの中でも魔法使いのためのアイテムや魔法書がよく集まる通りで知られており、世界中の魔法使いが一度は訪れたがる場所である。平日の朝ということもあり、通りはよく空いていたが、行き交う人々のほとんどはやはり魔法使い風の出で立ちをしていた。

三人はしばらく黙ったまま街を見回していたが、やがて思い出したようにユングがエレインに訪ねた。

「……その、あなたの言う「身分の低いお友達」というのは……どんな人？」

「素晴らしい人ですわ」

エレインは一言目を迷うことなくそう言った。

「理知的で、硬派で、無愛想だけど本当は他人思いで……常に他人をより良く導こうとする方

なんです。時には自分をも犠牲にしてもね。それでも、押し付けがましいなんて感じたことは一度もありませんわ。物事の見ることができる方ですもの」

自信と、実感の籠ったエレインの言葉。クーフリーンはなんとなく堅苦しいイメージを抱いた。ユングにはスイートピーやリジヨの顔が頭によぎる。

「剣が強いとか、魔法が凄いとかが……そんな能力がいくらあったって、誰も彼女にはかなわな
いんです」

「彼女？女の人の？」

「ええ、女性……というか、私より年下の……ちょうどユング王と同じぐらいですよ」

急に二人の顔色が変わり、クーフリーンとユングは互いに顔を見合わせた。世間知らずの女王の言う事だから、どこまでの信憑性があるかは疑わしいものの、それでも一人の人間にこれほど信頼されているその少女とやりに少なからずの興味を抱いた。ユングにとっては年が近いという親近感もあった。

「アムリタという名前です。私達と一緒にヴァルレーの石橋を渡ってきた一人だから、ひよつとしたらご存知かもしれません……そのアムリタと言う名前、これ、実は私がつけたんですよ……ふふ。私が出ったとき、あの人、名前が無かったんです」

そういうとエレインはくすくすと笑った。ユング達は彼女の言っていることが今一つ理解できていないようだった。

「よくわからない冗談だなあ……」

「あら、冗談なんかじゃありませんもの。彼女は少し親に恵まれなかっただけですよ」

「名前もつけてくれないような酷い親なのかい？」

「……ゼム・ロックという名前をご存知？」

「知らない」

「ゼムっていうと……悪魔との生体融合の第一人者でしたっけ……？」

クーフリーリンが言った。

「そう。一度だけ顔を見たことがあります。ぞっとする目をした魔法使いでしたわ……聞けば、自身の体をも悪魔のそれと挿げ替えたんですってね！全く、神への冒瀆もいとところだわ……で、まあ、そのゼム・ロックが、ルドヴィヒ・ヴァンシユタインを……この方は知ってますかね？」

エレインの言葉に、ユングはこくりと頷いた。

「うん。高名な方だし、しっかりした気のいいお爺さんだよ。よく夕食にも招待するし。パーティには来ない人だから」

「そのルドヴィヒ・ヴァンシユタインをゼムはどういうわけか酷く恨んでいて、彼に対して復讐をするそのために子をもうけて……その子供というのがアムリタなんです。だから彼女はゼムに道具扱いされていて、名前なんてつけてもらってないとか」

淡々と語るエレインの言葉に、言い知れぬ衝撃を感じるユング。復讐のために自分の子供を道具と化すその執念とは一体、どういった感情が曲がりくねって到達する境地なのだろうか？

自分の全く知り得ぬ世界の片鱗を覗いたような、強烈な違和感。隣で聞いていたクローフリーンも、あまり気持ちのいい感情を抱いていなかった。

「……ふ、ふん。心まで悪魔からの外注か？そのゼムっていうのは……」

ユングが憎々しげに言った。

「悪魔よりももっと醜く歪んでますわ」

「耐え難いよまったく」

「ちなみに、ルドヴィヒ氏の孫であるネツコとアムリタが、同じ母親から産まれたんです。だから、アムリタはまたヴァンシュタイン家の一人でもあるのですよ。これを知ったときは、私も驚きましたわ」

猿が袋を開けたような顔をするユング。驚いたというより、もはやなにがなにやら分からない。

「……ええと、じゃあ、リジヨ先生に奥さんがいないのは、ひよつとしてそのゼム・ロックに……」

こめかみに人差し指を当てながら、クローフリーンがぼつりと呟く。しかし、はっとしたかと思うとにわかに足を止め、視線を数件先の露店にやった。主に魔法関係の古書を雑多に取り扱う露店なのだが、そこには、難しい顔つきで本と睨めっこするリジヨ・ヴァンシュタイン本人の姿があった。

「ん。噂をすればなんとやら」

ユングが悪戯っぽく笑ってクーフリーンに言った。クーフリーンは苦笑いにも似たほほえみを返す。

「あの方は？」

「リジヨ・ヴァンシユタイン先生です。ルドヴィヒ氏の義息子で、ユング様の家庭教師をしてらっしゃいます」

三人はリジヨに近づいて行つた。しかし、彼は一向に気づく気配がない。

（リジヨ……この人がネツコのお父様……身なりのしつかりした方ね。あの息子と違って、随分と落ち着いた感じだし……こんなに夢中になって、やはり魔法に詳しいのかしら？）

エレインはそう思った。

徐々に距離をつめ、ついに三人はリジヨの真後ろから、彼の手に取る魔法書を覗き込めるほどの位置にまでたどり着いたが、彼は全く三人に気づく様子が無かつた。必死に本の背表紙を見比べては、パラパラと中をめくって内容を確認し、首を捻って本を元に戻す。その表情の真剣さに、ユングは声をかけるのを戸惑つた。そして彼が無理なのだから、クーフリーンがやろうとするはずも無かつた。

「……なんの本を探してるのかな」

ユングがこっそりとクーフリーンに耳打ちした。

「解呪とか、アンチ・マジック系の本を物色してるようですね……思うようなものがなかなか見つからないようですね」

「解呪……誰かが呪いにでもかかったのかな」

その露店に求めるものが無かったと分かったリジヨは、小さな溜息を一度だけついて、ふいに後ろを振り返り、別の店に行こうとした。そうなれば当然、真後ろにピツタリと引っ付いていたユングにもろにぶつかってしまった。がっしりとした大人の肩に、ユングの小さな体は弾き飛ばされた。

「わっ……!!」

ユングは二、三步よろけてこけそうになるが、クーフーリンが慌てて支える。

リジヨと言えば……。

「失礼」

と言ったきり、ユングには気づきもしないで、向かいの露店にまで歩を進めた。まさかこんなところに王がいるとは、普通は思わないだろうけれど、それにしても無関心が過ぎるのではないだろうか。呆気にとられる三人。

「……やれやれ、なにやら随分と熱中しているみたいだね。邪魔をしちゃ悪いし、放って置こう」

ユングは言った。

エレインは、やはり、ネツコのお父様だな、と思った。

「リジヨ先生!」

魔法書漁りをしているリジヨの元へ、アルフォンソが駆けつける。リジヨは手を止めて、彼の方を見た。アルフォンソはリジヨの傍にまで来ると、革の鞆から数冊の本を取り出してリジヨに渡した。やはりどれもアンチ・マジック系の魔法書である。

「図書館にはこんなのしか……それも、せいぜいLV4の魔法の解呪方法ばかりで、LV5となると名前すらでてこないんです」

アルフォンソが言うと、リジヨは彼の本を手にとって、ざっと目を通した。

「そうか……ありがとう、アルフォンソ」

「いえ、当然です。このことには俺にも責任が……」

「まだ言っているのか？ 君には責任はない。君は被害者ぶつてもいいぐらいさ」

「でも……力になれない自分が腹立たしいですよ」

「その気持ちは分かるがね、でも、力になれることはある。また、力になろうとするだけで十分なこともある。アルフォンソ、君はネッコにとって素晴らしい友人なんだ。どうかあいつを勇気付けてやってくれないか」

リジヨの言葉に、アルフォンソは強く頷いた。

（とは言いつつも、ネッコ……私にも親としての責任はある。しかし……今度ばかりは私にはどうすることもできそうにない……お前は自分にはやれると言った。その言葉は信じられるものなのか？ この際、これはお前自身を試すための機会でもあると言えよう。どうか、私に自負を持たせてくれ。自慢の息子を得たと言う自負を……！ いままで一度だって望まなかった親孝

行だ。これぐらい望んでバチはあたるまい。なあ、マリア……そうだろうか？

彼は、マリアの名前を出す自分が急に恥知らずに思えた。

(マリア……か。息子が死を賭して戦っている時に……まったく、私は逃げてばかりだな)

マリアと同居しない理由。それは、あんなったマリアの姿を義父に見せるのが気の毒だから。マリアを取り返そうといきりたつてやって来るゼムの逆襲の恐れがあるから。もはや、マリアには修道院での新しい人生があるから。どれも至極もつともな理由だが、問題は理由の良し悪しではなく、ただ理由に縛られて何も出来ない自分がリジヨにとって恨めしいのだった。無能な自分に慣れることは無いな、とつくづく思った。『それが現実』。そう割り切らないで自分の理想をがむしやらに追求するネツコに、もろくとも鋭い棘のような若さを見る。その若さこそが生きる道を開拓しようとする人の力だというのなら、確実さや無難さを選択し、理想と現実の妥協点ばかり追い求める自分を、随分と老いたものだと感じるリジヨであった。

ふとリジヨは、自分の見ていた古書を丹念に調べるアルフォンソの姿が目についた。

「……ありがとう、アルフォンソ。君もそれほど暇な身分ではないだろう。あとは私に任せて、学生は学生らしく学校に行けばよろしい。感謝しているよ」

「いえ、先生。今日は祝日ですよ。それに、心配はいりません。学生らしく、今日はしこたま飲むつもりですから」

「またあの馬鹿げた連中とか!」

リジヨは呆れた声で言った。

「物書きや音楽家の卵ばかり集まってるんです。馬鹿げもしますってば！ところで、場所は三番街の安酒場です。ほら、あの床屋の隣の……知ってるでしょ？歓迎しますよ」

「誰が行くものかね」

きっぱりと断るリジヨ。

「でも、先生の著書が好きな連中ばかりですし……」

「素直には喜べんね」

「いえいえ、あれで、優れたものには敏感な連中ですから！」

「優れたもの？ああいう連中が敏感なのは、自分達の言い訳に使う材料だよ！『誰かの思想は自分たちが酒を飲むのに使える』、『どこかの作家の言葉は自分たちがわざわざグソ真面目に働かずともすみそうだ』……別段、大して苦痛とも思っていない、何の役にも立たない悩みを、親の形見のように大事に取っておいて、さも大業そうに他人にひけらかして……！そんな連中に自分の著書を持ち上げられようとも、私は自分が恥ずかしいだけだ。青臭くてかなわん」

「なあに、先生もまだまだ若いってことですよ！」

リジヨはじろりとアルフォンソを睨む。上機嫌そうな顔つきだったアルフォンソから笑顔が消えた。

「……す、すみません……」

アルフォンソは肩を小さくして、頭を下げた。

あれからユング、エレイン、クーフリーンの三人は更に通りを東に抜け、三番街にたどり着いた。城下町の中でもひととき貧しい人間が多く、治安の悪い場所であった。クーフリーンはまた少し気をひきしめる。

と、その時、とある安酒場から二人の酔っ払いが飛び出した。一人はカーキ色のボロ雑巾のようなチャツキを着た、丸々と太った四十がらみの中年で、もう一人はげっそりとやせ細ったいかにも病弱そうな、まだ三十過ぎたか過ぎないかぐらいの青年だった。縮まらない口元から並びの悪い前歯が覗き、黄色く煤けたシャツの袖からは枯れ枝のような腕が見えていた。まだ昼前だというのに、二人ともすっかり出来上がっており、てらてらと光る鼻の額は真っ赤に染まっている。びっくりして、いかにも不愉快そうな顔をするエレイン。

ユングと酔っ払いの目が合った。

「……おい、その良いとこの！一杯飲んでくんよ！」

かつぜつの怪しい、太った方の酔っ払いの大声。忽ち通りを歩いていた民衆たちの視線が酔っ払いとユングの方に集まる。癪にさわったエレインは、完全に侮蔑の眼差しを酔っ払いに向けていた。彼女は王室育ちの典型らしく、低俗な態度や言葉使いが大嫌いであった。

「お前さんみたいなのがこんな汚ねえ街になんの用だいっ……！へっ、もうそろそろ、シルクのベッドでお昼寝の時間じゃねえのか？」

痩せた方の酔っ払いが、下品な声で言った。

ユングが立ち止まったので仕方なく立ち止まり、少し脅え気味にしていたクーフリーンだっ

だが、二人の酔っ払いがユングに対して不敬な態度をとったのを見ると、彼女はユングを庇うように酔っ払いとの間に立つ。決して蔑んだり脅しつけるようなものではない、彼女の意志の籠った論しつけるような目つきに、酔っ払い達はなんとなく気まずい思いをした。また、その優しく気丈なクーパーリンの美しさに少し照れていた。

「な、なんでえ姉ちゃん……へへ。ちよいとふざけただけさ。悪かったよ。一杯やってかねえか？」

太った方の酔っ払いがクーパーリンに言った。湧いたシラムの痒さに肩を揺する。

「いえ……結構です。こんな時間からお酒ばかり飲んでちゃ、体に毒ですよ」

「そんなことあ、おっかあに散々聞かされてるよ」

家族のいないクーパーリンは、その言葉にうっすらとした羨望を感じた。

「あんまり奥さんを困らせないことです」

「なにを言うもんかい。おっかあに迷惑かけないために飲んでんのさ。なあ！」

瘦せっぽちが太った酔っ払いに向かって同意を求めると、太った方は大声で笑い、何度も大きく頷いた。

「違えねえ！」

堪らず、エレインはクーパーリンを押しつけて、酔っ払いの前に立った。

「一体、どういう理屈です!？」

エレインがどやしつける。怒りの籠った拳をぎゅっと握り、わなわなと震えていた。

「こんな最低の生活でも、飲めば少しはおつかあに優しくできるってもんよ」

「そうそう。で、金が無くなつて、また生活が落っこんでいく」

「まるで貧乏の蟻地獄だ」

「失業手当だかなんだかしらねえが、王様はなーんにも分かつちやいねえよ！なけなしの金があったつて、全部酒に消えるつてだけでさ！」

ユングは酔っ払いの言葉を聞いて、思わずギクリとした。

「でも王様は……あなた達のことを思つて……」

クーフーリンの言葉を遮つて、酔っ払いが言う。

「へっ。この国の王様は子供なんだつてな！なーんもしらねえくせして、余計なことするもんじゃねえよ、まったく！虫けらに同情するぐらいなら、いっそ叩き潰してくれちまえばすつきりするぜ。へっ！そのほうが変なお節介より、よっぼど子供らしくて無邪気だぜ」

「違えねえ！」

酔っ払いの言葉を聞き、エレインは意地悪そうに笑みを浮かべる。

「ふーん、たまには良い事を言うものね。そっちがその気なら、ねえ、ユング？」

エレインが声をかけても、ユングはぼんやりとしていた。

「ユング……はて？」

酔っ払いは、ぼかんと口を開けた間の抜けた顔で、ユングの名前をなぞるが、彼らは王の名前もすつきり出てこないほど泥酔しているようだった。

「ふん、放っておきましょう。これ以上、関わることはありませんわ」

エレインはそういうと、そそくさと通りを歩き始めた。後ろ髪を引かれるような思いでじつと酔っ払いを見つめるユング。彼が歩き出すのをまつクーフリーンは、ユングと酔っ払いを交互に見つめ、そわそわしていた。

「ユング様、行きましょう」

痺れを切らしたクーフリーンの言葉に我に返り、ユングはやっと歩き始めた。それでも何度か酔っ払いの方を振り返り、なにか名残惜しい気持ちが続えづにいるようだった。

クーフリーンはというと、二、三歩歩いたところで、ちらりと酔っ払いの方を振り返り、ズボンのポケットから数枚の銅貨を取り出す。とととと、と酔っ払いの前に駆け寄ると、銅貨を握り締めた拳を、彼らの前にそつと差し出した。

「あの……これを」

二人の酔っ払いは互いに顔を見合わせた後、しばらくじつと彼女の握り締めた拳を見つめていたが、結局それを受け取るうとはしなかった。彼らの言う通り、これは同情に違いない。同情の良し悪しはともかく、こんな形でしか同情に報いることができない自分を、クーフリーンは恥じた。

三人はさっさと三番街を抜けて、帰路に向けて歩き始めた。その最中、すっかり気分を害したエレインはぶちぶちと酔っ払いの文句を言っていたが、クーフリーンは「根は悪い人じゃな

いけど、貧困が人を自棄にさせることもありますよ」というような意味の言葉を、やんわりとエレインに対して言った。

「でしたら、貧困こそが罪ですわ」

エレインはカッコをつけてか、人差し指を立てて言った。

「貧しいと言う事は、罪なんです。人は自らの糧を正々堂々と勝ち取らないと！」

エレインはそう言って、自分の定義付けにいくらかの満足を覚えていたようだった。クー

フリーンはなにも言わず、彼女の傲慢な態度に、困ったような笑みを浮かべるばかりであった。

(……アムリタならなんて言うかしら？……ああ、あの人！どうして私に挨拶もなしに消えた

の？体も壊しているんでしょうに……すぐに戻ってくればいいのだけれど……)

「ねえ、クー」

しばらくの間にも喋らず、何事かを考えていたユングだが、思いがけずに口を開いた。

「はい？」

「……今日の晩、こっそり三番街の酒場に連れてってくれないか？」

「……へ？」

「あの、さっきの酔っ払いが出てきた店だ」

ユングの言葉に、エレインとクーフリーンは絶句する。

「……だ、ダメですよそんなの！いけません！」

「お願いだ。これは王としての仕事だ。責任なんだ」

ユングの意志のみなぎった紺碧の瞳に、思わずはっとするクーフリーンだが、それでも彼の注文はあまりに難しく、危ないものだった。少なくとも、自分なんかが責任をもてる範疇の相談ではない。

「……スイートピー様に相談しないと……」

「良いって言うと思う？」

「うう……」

ユングはぎゅっとクーフリーンの右手を掴み、握手した。

「お願いだよ、僕には君しか頼る人がいないんだ」

しばらく辛そうな顔をしていたクーフリーンだが、ユングの真っ向から向けられた射るような視線に、やがて根負けし、小さな溜息をつく。それが承諾の合図だと分かったユングは、握手をしていた右手に左手も添えて、力強く握った。

その一部始終を見ていたエレインはふと、言い知れぬ寂しさを感じた。産まれた時から大勢の信頼できる人間に囲まれて、なに不自由なく暮らしてきた自分が、いまは右も左も知らぬ国でたった一人。それでもライオネルやロア、メルフィナ、アムリタ達と旅をしていたときは、こんな気持ちにはならなかった。

(元氣かしら、ライオネル……一人って、なんて退屈なのかしら)

今晚の打ち合わせをするユングとクーフリーンを後に、エレインはとぼとぼと自室へと足を運んだ。

——サンダルク城、シーグムンドの部屋。

「むう……」

難しい顔をするシーグムンド将軍。

「お願いします。どうか私めに、軍を率いるという事の極意をお教えてください」

シーグムンドに必死に頭を下げるのは、あのガウエインであった。主であるロットがエーデルリッターのエメラルド軍を任されることになり、意見を参考にするため、軍の指揮というものの真髄までも知りうる人間……すなわちシーグムンド将軍のもとに参ったのだが……。

「そんなこと言われても、わし、困る」

「いいえ、困りません。私程度に言葉を惜しむ気持ちはご察しますが、なにとぞ……」

「そう言われても……」

「後生でございます」

(面倒なやつに捕まったのう……)

ぼりぼりとあごを搔くシーグムンド。

「……うーむ、じゃあ、こうしよう」

「はいっ」

「お主がわしに酒をおごる。そうすればわしがいつも部下にするお小言の一つでも、酒の勢い

で出てくるというものだ」

ガウエインの顔に輝きがともる。

「いや、それは願っても無い！では今晚さっそく……」

「よしよし。では、三番街の安酒屋でいいか？わしの行きつけじゃ」

「三番街ですね、承知しました。どうぞ、ご指導よろしく願います」

ぺこりと頭を下げるガウエイン。そして、すぐに踵を返し、早歩きで城の図書室へと向かった。ルーシィと手分けして、歴戦の將軍達が残した兵法書を片っ端から読んでいる最中であつた。

「やれやれ……英雄騎士ロット。ここに来たときは、英雄と言うほどの氣迫を感じなかつたというのが正直なところであつたが……」

シーグムンドは白い顎鬚を擦りながら呟いた。

「なかなかいい部下をもっているものだ。わしのところにもああいう上司思いの部下が欲しいもんじやのう……」

そつと図書館の扉を開くガウエイン。サンダルクの王宮魔法使いや、上流階級の貴族たちに混じって、眼鏡をかけたルーシィがどつきりと積んだ兵法書を読んでいた。クリーム色のカーテンに陽光が当たり、透けた光がルーシィの退屈そうな顔を同じ色に染めている。ルーシィの向かいに座ると、ガウエインは嬉しそうな表情で彼女に訊ねた。

「どうだ、捗っているか？」

「……ええ、言われたとおりによってますよ」

ルーシイは本を開いたまま、ガウエインの方を見ず無愛想に言った。ガウエインは、彼女の脇に置かれたノート（重要そうな部分をメモしておくための）を開いてばらばらとめくったが、ほとんど白紙で、大した書き込みはされていない。

「なんだ、気の無い返事だな。魔法使いのお前には退屈な本かもしれないが、これもロット殿のためだ」

「退屈どころか、苦痛ですよこんなの……！」

ルーシイはいまにも泣きだしそうな顔でそう言うと、本をぱたんと閉じて、椅子の背もたれにもたれ掛かった。小さな溜息をつき、汗で張り付いたローブの胸元をぱたぱたとはためかせる。よほどストレスがたまっているのか、その動作の機敏さに、思わずガウエインから笑みが零れる。

「はあ……それにこの暑さときたら！サンダルクの夏が暑いとは聞いてましたけど、正直、これほどとは思ってもよらなかったし……もう、おまけに、へんな虫が朝っぱらからジリジリじりじり煩いし……」

「セミだな。私もここにきて初めて耳にした」

「さっき子供に庭で捕まえたものを見せてもらっただけ……ああ、思い出しただけで気持ちが悪い！私、抜け殻踏んじやっただけですから！」

大げさに身をすくませるルーシイ。

「はは。まあ、そうぼやくな。なかなか良いところじゃないか」

「レオデグランスに帰りたいです」

「ふむ。お前にはいろいろと慣れない苦労をかけているようだな……どうだ。今晚、一杯やらないか？私のおごりだ」

ガウエインの言葉に、ルーシイは喜ぶ。

「え、ホントですか！？喜んで！」

はっとして、ルーシイは腕を組み、難しい顔をした。

「ああ、うーん……でも、あまり飲みすぎないように注意しなきゃ……」

「構わないさ」

「いえ、お金のことじゃなくて……」

「酒癖が悪いとか？」

「その……私、田舎の学生の頃、ちよっとした弾みで……」

「……」

「あ……」

そこで、ルーシイははっとすると、言葉を止めて、しばらく何事かを考えていた。しかし、結局言葉が続ける様子は無く、読みかけだった本を開き、もう一度読書を再開しはじめたのだった。

「……」

訪ねようか訪ねまいか迷ったガウエインだったが、彼女の話の先になにか触れてはいけない過去が潜んでいるような気がして、結局、自分もその場にあった本を適当に手に取り読書をはじめた。ジワジワと鳴くセミの音が、やけに白々しく感じる夏の午後であった。

——一方、ネッコは、一日をベッドの上で過ごしていた。

はじめじめと湿った空気が漂う森の中、洪水に浸かった古い家屋が廃墟として佇んでいる。壁や天井一面に蔦が這い、苔がむし、まるで自然が大口を開けて完全に家屋を食らっているようだ。家屋の中は、水を吸ってぶよぶよに腐敗し、衝撃を与えればいまにも崩れ落ちてしまいうな柱や家具で埋まっていた。そして、元はリビングらしきだった場所に、三人の男女がいた。一人は水に沈んだ窓の外の景色をぼんやりと眺め、一人は腐った椅子に腰掛けて、もう一人は対面に座っている。

「ずるいよ」

椅子に腰掛けた青年……ネッコ・ヴァンシユタインは、テーブルに突っ伏しながら呟いた。

「みんなずるいんだ」

「なんの話かしら」

ネッコの対面に座っているのは、あのエレイン王女である。彼女はネッコに聞き返した。

「父さんは自分でゼムと戦わず、僕に役目を回した。自分が敵わないからって、息子の僕に押し付けたんだ。ゼムと同じさ」

「だから？」

「マリア母さんもだ。戦うのをやめて、自分の殻に閉じこもった」

「だから？」

「アムリタはいまさらのこのこ出てきて、自分が妹だなんて言っただけを利用してしようとしている。おまけに、一言も僕を兄だなんて呼ばない」

「だから？」

「だから僕ばかり責められる筋合いはないんだよっ！」

ネッコが激しくテーブルを叩くと、もろい軋みを立ててテーブルは不安定に傾いた。

「みんなだって僕と同じなんだ。僕と同じように間違いを犯してるんじゃないか」

窓の傍に立っていたアムリタがネッコの傍にゆっくりと近づくと、足首まで浸かった水が音を立てた。そうして彼女はネッコのすぐ後ろに立つと、そっと彼の肩に手を置く。

「そうよ。人はみんな間違いを犯してる」

アムリタは付け加えた。

「だから、助けあうのよ」

「違う、利用しあってるんだ。足を引っ張りあってる」

「醜い感情は己を滅ぼすわ」

「でも、事実だろ？」

「全ては捕らえ方の違いだというのに……どうして美しい感情を選ばないの？」

「そんなの偽善だからさ」

「世の中が汚いものだと思い込んで、自分を正当化する」

「ああ、そうだろ。世の中なんて汚い！」

「そうやって自分だけを正当化するのは、ただの自己満足よ」

「不満だらけなんだ、こんなことでしか満足できないんだ。俺はその程度の人間なんだよ！そんなことお前なんかには説教されなくて分かってるんだよ！だからもうほっといてくれよ！」

「そうして他人を突っぱねて、一人になって、また孤独に不満を覚える」

「ほっときましょう。アムリタ」

エレインは椅子から立ち上がると、俯いたままのネッコを見下ろした。

「救い様がないわ、この人」

つららで胸を突き刺すような冷ややかな言葉を残し、エレインは水に浸かった床をざぶざぶと進んで、部屋から出て行った。出て行く瞬間にちらりとネッコの方を見たが、やはりそれは完全な侮蔑の目であった。

アムリタもネッコの肩から手を離し、部屋の出口へと歩いていく。

「そうだ！そうやって、やっぱりお前も僕を救ってくれないんだ！」

ネッコは立ち上がり、アムリタの背中に向けて叫んだ。

「誰かが誰かを救う。誰かが誰かに救われる……そんな単純なものじゃないの。一方通行じゃないのよ、人付き合いつて」

エレインとは正反対に、まるで子供を諭す母親のような声でそう言うと、アムリタは振り向きもせずに部屋から出て行った。

たった一人で立ち尽くすネッコ。倒れこむように椅子に座ると、その震動に不安定だったテーブルが更に傾き、ついに崩れ落ちた。床の洪水の表面を、複雑な波紋が広がっていく。やがて波紋が落ち着くと、じっと頭を抱えるネッコを一人残し、部屋の中は何も動かず、何の物音もしなくなった。

目を覚ますと、外はすでに暗かった。時計を見る。時刻は七時過ぎ。夕食の途中だろうか、それとも後だろうか、リビングからは数名の談笑が聞こえる。

ゆっくりとベッドがら起き上がる。ネッコは相変わらず気分が優れなかった。が、それでも一時期に比べると随分とマシになっているように思えた。頭はふらふらするものの、渦のようなネガティブ思考はやってこないし、吐き気や体の痺れも無い。彼は、丸二日ロクになにも食べていないことを思い出すと、気分の悪さが空腹のせいだという気がして、なんでもいから無性に腹に入れたくなった。立ち上がって、部屋を出て、リビングに向かう。その場にいたアルフォンソ、ナターシア、リタの三人の視線が、ふらりと現れた病人の方へと向けられた。リ

ジヨは今日も帰っていないようだ。

「坊ちゃん！お体の方は？」

リタが心配そうに訊ねる。

「いまはいいよ」

ネッコがそう言うと、リタはほっとしたようだ。

「すまない、ネッコ。俺とリジヨ先生で解呪の方法を調べたんだが、どうもな……」

そういうとアルフォンソは、脇に積んである解呪の魔法書を指差した。

「魔法LV5っていうのは、そう簡単にどうこうできるものじゃないらしい」

「いや、いいんだ」

ネッコはそういうと、ふらつく足でテーブルの方に近づいた。慌ててナターシアが立ち上がり、空いている椅子を引っ張りだす。ネッコはそれにそっと腰掛けた。

「お腹空いてない？ちゃんとあんたの分残ってるよ」

「ああ、うん。もらうよ」

ネッコがそう言うと、リタが立ち上がるようにしたが、ナターシアがそれを制し、いそいそと台所に向かった。

「あとはもう大丈夫なのですか？」

心配そうに訊ねるリタ。

「さあ。わからないよ」

「まったく。俺が読んでも何とも無かったのにな……と言ってもほんのさわりだけなんだが」
アルフォンソが言った。

「読者の魔力に感応する仕組みなのかもしれない」

ネッコはべとつく首筋を気色悪そうにこすった。日中のうだるような暑さにしこたま汗をかいて、もう二日も風呂呂に入っていないのだから、気持ち悪いのも当然だろう。

「まるで小説や音楽と同じだな。素晴らしい作品を理解するには、最低限の器量もまた必要ってことか」

「アルフォンソ。君は怒りの書においては、君自身がこき下ろした。生産性の無いただひたすら受動的な読者。だったわけだ」

「ちえっ！憎まれ口は回復の証拠だぜ、畜生」

アルフォンソは吐き捨てるようにそう言った。だが自身の言葉通りネッコの回復の兆候を見られて、どこか嬉しそうな顔つきである。

しばらくして、ナターシアが冷めたスープとパンを運んできた。ネッコはエサを与えられた野良猫のように、それを黙々と食べ始める。アルフォンソ、リタ、ナターシアの三人は、その様子を黙って見ていた。

しばしの沈黙。ネッコが夕食を食べる食器の音だけが部屋に響く。

やがてネッコはそれらを全て平らげると、顔を上げて、病弱な目つきで三人を眺めた。

「……おいしかった？」

ナターシアが訊ねる。

「……」

しかし、ネッコは答えない。ただ不安そうな目を、ナターシアの方に向けていた。

「どうしたのさ？口になかなかつたなら、正直にそう言えば……」

「すまない、みんな」

ネッコは落ち着かなげに三人を交互に見回す。

「こんなつまらないことで迷惑かけて……それなのに、こんなおいしいもの食べさせてもらって……」

「まったくさ！」

気にするな、と言いかけたアルフォンソを遮って、腹立たしげなナターシアの言葉がネッコに浴びせられる。

「あんたは昔から無鉄砲で、他人の言う事を無視して、とんでもないことをして……
いっつも最後に誰かに助けられてるんだから！」

「おいおい、ナターシア……」

なだめ様とするアルフォンソ。しかし、ナターシアは構わず言葉を続ける。

「どんくさいのよ、生まれつき！めそめそしないで、たまには最後までやり遂げたらどうなの！？」

ナターシアは荒々しく立ち上がると、ネッコの顔に指をつきつけた。

「私は放っておかないんだからね。次に情けないこと抜かしてみなさい！その時は……」
ナターシアは一瞬苦々しい顔を見ると、振り返ってリビングを飛び出していった。ネッコは椅子から立ち上がるが、追いかけてようとはしなかった。

「……まったく」

アルフォンソは一度溜息をついて、付け加えた。

「気にするなよネッコ。あれは応援してるんだぜ？不器用な娘だよ、あいつも」

アルフォンソがそう言うと、ネッコは不可解そうに彼の顔を見た。アルフォンソはほお杖をついたまま、ナターシアの駆けて行った後をぼんやりと眺めている。

「……あの子を許してやってくださいな、坊ちゃん。私から言っておきますから」
リタが言った。

「いや、いいんだ。僕は別に……」

ネッコはそう言うと、もう一度だけ椅子に腰をかけた。しばらく何事かを思索していたが、またすぐに立ち上がる。

「ごちそうさん。もう少し眠るよ。アルフォンソ、せっかく来てくれたのに悪いな」

「ああ、いや、そんなことはいいんだ。養生するといい」

「すまない」

そして、ナターシアと同じように、ネッコはそそくさとリビングを出て行った。

後に残された、アルフォンソとリタ。時計の針だけがしばらく時を刻む。

「……」

「……」

しばらくの沈黙の後、アルフォンソは値踏みするような視線をリタに向けた。

「……ところで、リタ、きみはまだ結婚しないのかい？まだまだいけるぜ」

アルフォンソの言葉も全くのお世辞というわけではなかった。丸々と太っていても、愛嬌があるし、健康そうな肌をしている。それに、彼女は生まれつき図々しいところが一つも無い、見る人の気分の良くする顔つきだった。

「急になにを言いだすかと思えば、まったく……」

「誰か思う人の一人ぐらいいるんだろう？」

「からかわないで下さいな」

冗談めいて言うリタだが、一瞬の悲しげな表情を、アルフォンソは見逃さない。

「ふふん……叶わぬ恋だね」

「……」

とうに気持ちの整理がついたことなのか、リタは諦めた表情で首を左右に振った。

「大方リジヨ先生ってとこだろうが、そこまで踏み込むのはルール違反だ。あえて聞かないことにするよ！へへ、ま、大体の人間の恋なんて、大概は叶わないものだな。自分の好きな人間だって、誰かを好きなんだから。数学的に言わせてもらえば、何万分の一の確立がそうそう相互に働くもんじゃない、なんて。ふん、こりゃ詭弁だね。とにかく、俺も同じだよ。狙った

的は見事にハズレさ」

アルフォンソが言った。

「あら、アルフォンソったら……あなたみたいな人がどうして自分を卑下するんです？」
「卑下してるわけじゃないけど……相手にもまた別に思う人がいてね……でも……へへ、リタにそう言われると、ちよつと自信でてきたかな」

「そうよ。恋愛は一回きりの当たりハズレじゃないわ。人生ある限り」

リタは優しげな微笑を湛える。アルフォンソはゆっくりと立ち上がった。

「ごちそうさん。そろそろ行くよ。今日は三番街の店で飲む約束してるんだ」

「またおいで」

「ああ。ネッコとリジヨ先生によろしく」

「ナターシアにも、でしょ？」

思わずきよんとするアルフォンソ。

「……ああ、うん、そうだな。頼むよ」

アルフォンソがそういうと、リタは見透かしたような瞳を彼に向けて、にっこりと笑った。

「ん？……あっ！」

アルフォンソは思わず顔を赤く染め、壁にかけていた煤けた帽子をふんだくるようにして被り、最後に一度だけリタの方を振り向いて、そそくさと部屋を後にした。

(……やれやれ。のんびりした顔で……鋭いもんだな！)

ネッコは自分の部屋の前で立ち止まって、ナターシアの叱咤を思い出した。

(……めめめしないで、最後までやり遂げろ……か)

ぼりぼりと頭を掻く。

(お前に言われなくて、やるさ。やってやるさ。見てろ!)

がちやり、と部屋のドアを開く。真っ暗で静かな部屋に足を踏み入れ、ほとんど無意識にソファーまで足を運ぶと、彼はその視界の端に奇妙な黒いかたまりがあるのに気づいた。違和感と不安を胸中にたたえながら、ゆっくりと躊躇いがちにそちらに視線を移す。

そこにいた黒いかたまりとは、全長は1mほど、気味の悪い緑色の鱗が体表を覆い、手の五本の指の股に薄いヒレがついている。ネッコの存在に気が付いているのか、それとも気が付いていないのか、その半魚人風の生き物は彼に背を向けたままじっとうずくまっていた。ネッコはぎよっとして、危うく肝を潰しかけた。

「げげげ、幻覚か!？」

ネッコは頭を振り、よく目を凝らす。しかし、そこにいる生き物のリアルな質量感を見るにつけ、幻覚などとは到底思えなかった。

「おい、こら、お前!どこから入り込んだんだ!？」

「……うるさいヨ」

ダミがかった、醜い声。

ネッコはまず、相手の半魚人が人の言葉を喋ったということに驚いたが、それなら自分の行動にもきちんとした理解があるのだろうと思ひ、無礼な相手の態度に腹が立った。

「うるさいだつて？ 勝手に人の家に入っておいて！ 今すぐ出て行かないと……」

「出て行かないと？」

半魚人はちらりとネッコの方を振り返つた。真つ黒の理性を感じさせない瞳、目と目の感覚が普通の人間のそれより倍ほど離れている。分厚い唇に退化した低い鼻。魚類特有のあのエラから、彼が呼吸をする度にぶくぶくと泡を吹いている。ネッコはあまりの不気味さに鳥肌が立った。さっきの夕食を吐きかけてやれば、どれだけすつきりするだろう、なんて考えがちらりと脳裏をよぎる。

「お前は、ど、ドウなんだ？」

半魚人はどもりながら言つた。

「ふざけるな、ここは僕が生まれ育つた家だ！」

「僕だつてそうさ。ウン」

「なに？」

半魚人はゆっくり立ち上がると、ネッコの方に近づいた。ネッコは後ろのテーブルまで後ずさりをし、後が無いことが分かれると、呪文の詠唱の心積もりをした。しかし、部屋を黒焦げにはしたくないし、できれば穩便に物事を片付けたかつた。

「僕は、お、お前の頭のなかでそだ、育った。ウン」

「……なに？」

「ソレで、邪魔だから、おいだされた」

「なにを言ってるんだ、よく分からない……おい、それ以上近寄るな！」

「お前は俺のことを、見て見ぬフリしようと決め込んでるんだな」

「分からないな！消えろ！」

「おまえ自身も邪魔には違いないのにネ」

「やめないか！」

「自分が他人に巢食う、き、キセイチュウに思えたんだろ？」

ネッコははつとすると、テーブルの隣に立ってかけてあった自分の杖を手にとった。

「僕ともドモここから消える。さあ、支度しなよ。ウン」

「僕はどこにもいかない、どこにも逃げるものか！近寄るんじゃない！」

「に、逃げようとしなないんじゃないの？」

「黙れ化け物！」

「どどどちがバケモンだか」

「……この……」

ネッコが杖を振りかざすと、半魚人は頭を抱えてうずくまった。しかし、半魚人の無抵抗の姿勢は、むしろネッコの神経を逆撫でした。ぞわぞわと、体中の毛が逆立つような感覚。

息を止め、両手で杖を強く握り締め、相手の頭上めがけて思い切り振り下ろす。杖を通して、頭蓋骨を叩く生々しい感触が伝わった。続けざまに二度、三度と半魚人の腕、後頭部を強打する。強打する度、鶏の首をしめたような悲鳴が聞こえた。しかし、ネッコはやめない。相手が血反吐を吐き、苦痛に意識を失い我が身を庇おうとすらしなくなっても、何度も何度も杖を叩きつけた。ゴムの塊を殴ったような鈍い音だけが部屋に響きわたる。

半魚人のぼつかりと開いた口から、赤いどろどろとした血が流れ出した。肉は黒々と腫れ上がり、骨も粉々に砕けている。もううめき声すらあげない。

ふと冷静な気持ちに蘇り、我に返る。

「……僕の頭の中で育った、だって？」

ネッコは、叩きのめした半魚人のぼろぼろの体軀を見下ろしながら、呟いた。

「こいつが僕の頭の中に？こんな化け物が？」

ネッコは、部屋の隅に奇妙な煙が立ち上がっているのに気づいた。もくもくと伸び、一mかそこらの高さにもまで広がると、やがてそれは先ほどと同じような半魚人の姿に変わっていく。煙がだんだんと色や質量感を帯びて、緑色のてらてらとした肉に変化していく。

「こんな化け物が俺の頭の中から湧いてるってのか！？」

煙の半魚人が実体化するにつれ、叩きのめしたはずの半魚人までもがゆっくりと起き上がるうとしていた。ネッコがうろたえている間にもどんどん半魚人の数は増えていく。

「う……うわ……」

慌てて部屋から逃げ出そうと、ネッコはドアに手をかける。慌てふためいて、うまくドアノブを掴めずにながやがやと音を立てる。同時に、半魚人の一人が彼の足を掴んだ。最初に叩きのめしたやつである。

「俺達も、連れて行って。ネッコさん」

「わあああああああああー！」

ネッコは自分の足を掴む半魚人を数回踏みつけ、ドアをぶち破るように開き、その場から逃げ出した。

わき目も振らずに廊下を駆け、玄関を飛び出す。あまりの騒がしさにびっくりしたリタやナターシアが、自分たちのいた部屋からあわてて顔を出したが、その時にはネッコの姿は無かった。

リタとナターシアは顔を見合わせる。

「……まだ全快には程遠いみたいだね、やっぱり」

ナターシアが言うと、リタはネッコの部屋にまで足を運び、中を覗いてみたが、そこにはなにもいなかった。心配そうな目つきをナターシアに向ける。

「大丈夫よりタ。あれだって、ヴァンシユタイン家の一人なんだからさ。旦那様の息子だよ。それにさ……」

ナターシアは何事かを言おうとしたが、口を噤み、リタを一瞥するとすぐに自分の部屋に引っ込んだ。リタもしばらく玄関を眺めた後、自分の部屋へと戻っていった。

——夜も更けて、サンダルク城下町。

緊張と期待の入り混じった面持ちのガウエインが、ルーシイを連れだって歩いていった。三番街の安酒場で飲むというシーグムンドとの約束のためだ。

「ガウエインさん……あのおじいさんにどうしてそこまで？」

ルーシイが不満げに言った。おじいさん、とはもちろん、シーグムンド將軍のことである。

「ふふ。田舎育ちの魔法使いである君には分からないかもしれないかもしれんが、われわれ戦士にとって猛将シーグムンドは憧れの的なんだよ」

ガウエインが言う。

「エメラルド隊の隊長という大任を任されたロット殿なら、きっとなおさらだ。シーグムンド將軍の言葉を誰よりも欲しがっているだろう。將軍のように頼りになるアドバイザーは他にはおらんからな」

「はあ、そうなんですか」

しかし、ルーシイはまだどこか不満そうだった。

「……ルーシィ、どうしたんだ。嫌なのか？」

ガウエインが訊ねる。

「いえ、そういうわけじゃ……ただ、どうしてわざわざ安酒場なんかで飲むのかな……って」
ルーシィは自分の肩にかかる髪をくるくると弄りながら、言葉が続けた。

「將軍様なんでしたら、もったいい場所……例えば来る途中に一番街で見たあの小奇麗なレストランとか、それでなくともせめて普通のバーとか……」

「そこがシーグムンド將軍のいいところじゃないか。気取らない、豪放磊落なところがね」
「分からないわけじゃないんです。でも……」

「ルーシィ、これは私の用事なんだ。無理してついて来てくれなくともいいのだよ」
すると、ルーシィはびっくりしたような顔つきで猛烈に反論した。

「ガウエインさんが奢ってくれるっていうから来たんじゃないですかあ！」

「いや、それはそうだが……」

頬を膨らませ、子供のようにそっぽを向いてしまうルーシィ。

「やれやれ……」

ガウエインは居心地悪そうに、頬をぼりぼりと搔いて、小さな溜息を一つつく。

「……ん？」

その時ガウエインは、町の向こう側から一人の知った顔が近づいてくるのを見つけた。

「あれは……ネツコ殿ではないか？」

ガウエインが眩くと、ルーシイが彼の視線の先にいるネッコに目を向ける。ネッコは不必要に周りを気にして、そわそわとおちつかないに歩いてきた。着ているものは綿のズボンとグリーの薄手シャツだけで、上にも下にも中途半端な位置までしかボタンをかけておらず、髪はぼさぼさに乱れて、下流階級の貧乏学生にもこんな出で立ちの人間を探すのは難しかった。

「いや、たしかにネッコ殿だ。しかし、様子がおかしいな……」

「ガウエインはそれほど彼に面識があったわけでもない。しかし彼はネッコが誰と接する時にもいつも堂々とした態度で、一応は礼儀正しく、こんな風に無神経に衣服や髪を乱れさせて外を出歩くような人間ではないことぐらいは知っていた。ネッコ本人も、普段からそういった身だしなみの面では随分と気を使っている。それどころか、会う人々に潔癖と言っているほどの清潔な印象を与えていた。」

ガウエインとルーシイの二人が往来で立ち止まると、ネッコは俯いたまま歩きつづけ、彼らの存在に気づかないまま彼らの元へと近づいていった。あと一歩か二歩でぶつかるといふところでやっと二人に気がつくのと、ネッコは足を止め、ガウエインとルーシイの顔を交互に見た。そして、またおちつかない気に見回しては、なにかを探しているようだった。

「あの……こんばんわネッコさん。どうかしましたか？」
ルーシイが訊ねる。

「いや……」

「人でも探しているのかね？」

ガウエインが続く。

「ああ……うん……ちよっと……」

ネツコは戸惑い気味にガウエインに向かって言った。

「やつらが……」

ネツコは夜風の囁きのように小さな声で言った。言っただけで首を捻り、街並や行人の姿を窺う。

「やつら」

ルーシイが言葉をなぞり、自分の記憶を探るように呟く。しかし、やつらで思いあたるネツコと共通項の対象など、一つも思い浮かばない。

「……やつらとは？」

ガウエインが訊き返す。

「半魚人の連中」

ガウエインとルーシイは、ぽかんと口を開けて、互いに顔を見合わせた。

「半魚人……??」

「追われてるんだ。見かけなかったか？」

「……さあ。心当たりないな」

そういうとガウエインとルーシイは、ネツコがやったように辺りをきよろきよろと見回した。いるのは酔っ払い、乞食同然の身なりをした商売女、不快な顔をしながら馬車に乗って通りを

抜ける貴族、俯いてふらふらと歩く老人など……つまり、三番街らしい人々ばかりであった。

「半魚人がどうしてネッコさんを追いかけるのですか？」

ルーシイが丁寧に訊ねると、ネッコは血走った瞳を彼女に向けた。まるで神経病患者のような目つきに、思わずぎよつとするルーシイ。

大きな溜息をつき、ネッコは掌で自分の目元を覆った。

「ふう……」

「……」

「……」

三人の間に沈黙が流れる。

「その……ほら、疲れてるみたい。ネッコさん、顔色悪いですよ」

ルーシイは気を使って、ネッコにそう言った。自分でもなんとなく白々しいような気はしたが、このヒリヒリした沈黙に身を晒すよりはマシだった。

「疲れている……？僕が……？」

ネッコが顔を上げて言った。

「ああ、そうだ。確かに疲れているようだ」

ガウエインが機械的に頷く。訝しげな表情。

「どうする？衛兵隊にかけあってみるか？その……半魚人とやらが大勢で攻めて来るなら、町にとってもゆゆしき事態であろう」

「……いや……」

ネッコは腕を組み、俯いた。

「わからない。僕の気のせいかもしれない……」

「でも、追われてきたんでしょ？」

「……うん。そうかもしれないし……あるいは……」

そういうとネッコは、気が気でないように後ろを振り向き、じつと来た道を眺めていた。ガウエインとルーシイは、やはり彼は相当疲れているのだろうと思った。

「……まあ、帰ってゆっくり休むことだな」

「いやだ！」

ネッコの大声に、ガウエインとルーシイはぎくりとする。

「あの家には帰りたくない！」

火のついたような彼の叫び声に、ルーシイは思わず腰を抜かしそうになった。

「どど、どうしてですか？」

「……」

さきほどの一瞬の感情の昂ぶりがまるで嘘のように、ネッコはまた沈鬱な顔に戻っていた。ルーシイの問いかけにも答えなかった。

「……そうか……なら、ネッコ殿。どうだ、一緒に酒でも飲まないか？」

「酒？」

「なにか悩み事でもあるなら、一杯引つ掛けてすつきり話してしまえば、意外と気楽になるぞ。君とは一度話がしてみたかったんだ……まあ、その気がないなら、やはり帰って眠るか……」

突然、ネツコは掌をぼん、と叩き、輝いた目でガウエインを見る。

「そうか、酒か……！それは思いつかなかった。うん、悪く無いな。きつと気が紛れる。一杯もらうよ！場所は決まってる？どこだい？三番街？そこなら知ってる！いや、酒なんて久々だな……よし、行こう！」

鬱屈した状態から、まるで打って返すように躁状態になるネツコを見て、ガウエインはうすうす彼がまともな精神状態でない事に気づき始めた。ルーシイはといえば、急に明るく振舞うネツコを見て落ち着きを取り戻し、「まあこの人も随分とお酒が好きなのね」などと無邪気に考えているのだった。彼女は、根本的に他人を悪いように疑ったりしない、田舎者特有の愚鈍な人の良さを持っていた。

三人はあれから通りを何軒も歩かないうちに、例の酒場を見つけた。一階は普通の酒屋だが、脇に地下に降りる階段があつて、その下が酒場になっていた。ネツコたちは、彼を先頭にしてレンガ張りの壁に挟まれた狭い階段をゆっくりと降りると、部屋と階段の境にある小さな木戸に辿り着いた。なんとなく緊張するルーシイ。ネツコといえどここには何度か来た事がある風で、躊躇することなく真っ先に木戸を押し開けた。急にどつという湧き上がるような談笑と、オイルランプの薄暗い明かりがドアの隙間から漏れた。

酒場にいた客は、勤めから開放されて体中をアルコールで清める若輩から中年の飲んだくれ達ばかりで、日々の愚痴こぼしや猥談に花を咲かせていた。

そんな連中に混じって妙に気の引かれる客がいた。カウンターの席に二名……一人は背丈の低い、山高帽を被ったブロンド髪の、青年というにも若々しい、ほとんど少年と言ってもいいぐらいの人物で、その隣に連れ合いとして座るもう一人はローブをまとい姿を完全に隠しているのだった。彼の身長は隣の少年よりいくらか高かったが、その割りに体つきは細く、ひよつとすると女性かもしれないなかった。二人はそれだけでも妙な格好だというのに、揃って分厚い黒縁眼鏡をかけて、まるで自分たちの素性が他人にばれないように変装でもしているかのようにだった。おかしな連中だな……と、ネッコは一瞬だけ彼らに気を止めたものの、すぐそばのテーブル席のとある団体に気が付くなり、二人のことは忘れてしまった。

団体は、みな十代後半から二十代の青年で、制服を着ている者がいれば流行の服を着ているもの、あるいは軍服姿のもの、また、それしかないから仕方なく着ているような、ぼろぼろのつぎだらけのシャツの者もいる。そのうちの何人かは、ネッコにも見覚えがあった。

「……ん、あれ……」

青年達の一人が、ネッコを指差す。

「おや、ネッコじゃないか！戻っていたのか！」

青年達のうちの二、三人が立ち上がると、他の連中も彼の方に振り向いた。

「ほら、お前ら。彼がリジョ・ヴァンシュタインの息子だよ！」

「リジヨ・ヴァンシュタイン？新魔法序説の筆者の？」

「へーっ！」

青年の内の一人がリジヨの名前を出すと、彼らは急に沸きあがり、親しみをもった表情でネッコを迎えた。ルドヴィヒ・ヴァンシュタインの孫と紹介されることには慣れっこだったが、リジヨ・ヴァンシュタインの息子として紹介されることは珍しく、ネッコは新鮮な気がした。彼らのような年代の者には、もはや神格化されたルドヴィヒよりも、普段携わっている学問や思想の關係で、リジヨのような人間の方がより親近感があるのかもしれない。まあ、どちらかといえば、悪く無い気持ちだった。

青年の一人……元々ネッコの知り合いだった人物が席を立ち、ネッコの前にまでやってくる。軽く握手を交わす。

「ネッコ、いや、久しぶりだな。いつもどってきただ？」

「ん……三日前」

「旅は終わったのか？いや、そんな話は座ってゆっくり聞こうじゃないか！さあ、かけたまえ！」

「すまない、今日は友達がいるんだ」

そう言つて、ネッコはちらりと入り口を振り返る。そこには、ぼつんと取り残されたガウエインとルーシィの姿。彼は別にこの青年たちに加わって飲んでもよかったのだが、どちらかという今日は静かに飲みたい気分だった。それに、彼らとはとりたてて仲のよい間柄というわ

けでもなかった。アルフォンソ繋がり、せいぜい顔見知り以上、友人未満の連中ばかりである。

青年と更に二、三言話すと、ネッコはガウエインたちの元へ戻ってきた。

「ネッコさん、お友達でしょ？ 私たちに気を使わなくてもいいんですよ」

「別にそういうわけじゃないさ。顔見知りだよ」

ネッコはそういうと、青年達とは真逆の壁に備え付けてあるテーブルに座った。ルーシイはきよろきよろと店内を見回すと、慣れない環境に戸惑いを隠せないようだった。ガウエインといえば、むしろこういった安酒場は彼の領分だったようで、上機嫌そうに手もみをしていた。やがて二人は、ネッコと同じテーブルに座る。

三人のもとにビールがやってくる、ここまでの旅の無事、そしてロットの新たな戦いの成功を祈って乾杯した。そこで初めてネッコは、ロットがエメラルド隊の隊長として勤めていることを知るが、すぐにどうでも良い気持ちになった。アルコールのせいではなく、怒りの書や先ほどの半魚人の一件が尾を引いているようで、他人の身边に気を回すような気分になど到底なれそうにもなかった。

「前から言おうと思ってたんですけど、私、ネッコさんのことを同じ魔法使いとして尊敬してるんですよ」

ルーシイがネッコに言った。

「へえ……そりゃあ光栄だ」

しかしネッコは、酒の席で出てくるお世辞ほど白々しいものはないと、はなから真面目に聞く気は無い様子だった。

ルーシイは彼の胸中など露知らず、話を続ける。

「ネッコさんは根っから魔法使い向きの性格ですよね！ほら、よく言うじゃないですか？魔法使いの人って、基本的に変わり気で、神経質で気難しい人が多いし……」

やや無神経ともとれるルーシイの言葉だが、ネッコは別に腹をたてなかつた。と言つても、好感触だったわけでもない。ただ単純に興味が持てなかつたし、先ほどの半魚人がひょっこり酒場に現れやしないだろうかという懸念が絶えず彼の意識の片隅を支配し、苛んでいたのだつた。当然、酒の進みも悪かつた。

ルーシイは言葉が続けた。

「私なんてダメですよ……いつもみんなの足ばかり引つ張つて、旅をしている時だつて、ロツト様にもお小言ばかり言われてる気が……」

途中でそのお小言を思い出したのか、言葉の最後の方は溜息が混じっていた。ネッコはどうでも良さそうに、うんうん、と小さく頷く。

「マスター！ゲソはあるか？」

ガウエインが後ろを振り返り、大声でカウンターに向かって言ったが、マスターは首を横に振る。やはり、魔王関係で魚介類は全てアウトらしい。これだけ戦争が続けば、倉庫にあった分も底をつきかけているため、そう簡単に出すわけにはいかないのだろう。

「む……仕方ない。ピスタチオだ」

ガウエインが体勢を元に戻すと、ルーシイのぼやきは続いた。

「ネッコさん、ヒール何日で習得しました？へ？一週間！？天才じゃないですか！私なんて、学校でも最低の成績で、ヒール一つに半年かけたんですよ……うう」

「ヒールは難しいよ。きちんとした師匠をつけずに、独学で頑張ると一年だって二年だってかかる人もいる」

「でも私、これでも回復魔法専攻だったんです。それなのに、魔法学校の三年間で先生に褒められたのは持久走と床磨きだけ……」

「サンダルクと違って、レオデグランスは誰でも学校で魔法を学ぶわけじゃない。ルーシイ、お前だって、見込みがあったから魔法学校に進んだのだろう？」

ガウエインが言った。

「うう……粘着魔法は得意でした」

ウエイターがやってきて、ことりと、とテーブルに皿が置かれる。皿に乗っているのはピスタチオとチョコレート、それとパン切れが三枚だけだった。ガウエインはピスタチオの殻を片手で器用に剥くと、口に放り込んだ。ネッコはぼんやりと皿の上の食べ物を見つめていたが、手をつけようとはしなかった。

「粘着魔法だって、あれで便利なんだよ。地震のときとかね」

どこことなく投げやりなネッコの言葉だが、ルーシイは気にする様子も無い。案外、そんな言

葉でも気休めになったのかもしれない。

ルーシイはおぼろげな瞳で宙を眺めながら、こう言った。

「所詮、私なんてそんなもんです。でも、ネッコさんは凄いなあ……なんたって、ロット様に一目置かれてるんだから」

さすがのネッコもこれには頭にきた。ロットを崇拜した上での間接的な尊敬など、侮辱以外のなにものでもない。ロットが一言彼のことを馬鹿にすれば、きっとルーシイは心の中で無条件に彼に追従し、ネッコに冷ややかな皮肉の一つでも浴びせたに違いない。『これだから従者は！』『そんなことだろうと思った！』ネッコは心のなかで怒り任せに毒づいた。

ネッコは少しルーシイをからかってみたい気持ちになった。

「ふん、ロットねえ……そんなにロットが好きかい」

ネッコの言葉に、ガウエインがぴくりと反応する。

「はい。心の底から尊敬しています」

「じゃあ、例えばの話……」

ネッコは意地の悪い笑みを浮かべると、ビールを一口喉に通す。ルーシイに加え、ガウエインも真剣な表情でネッコの話を待った。彼は二人の様子に満足し、言葉を続けた。

「例えばだよ？例えば、とある英雄がいたとする。そして、その英雄を尊敬し、一切を投げ出して、彼につき従う従者がいる……ふん、従うってのは楽なものでね！英雄が生きるか死ぬかの死線をくぐり抜け続けて、やっとこさ築いた主体性を、従者達はまるで子供がお駄賃もらう

みたいに頂戴するんだ。彼の主体性にひびが入れば、従者たちも始めは必死に庇って、修繕しようとするものの、それも結局自分自身を守るためにすぎない。従者の連中は、ダメだと分かった瞬間には崇拜していたはずの彼……即ち、その英雄様をまるでトカゲの尻尾みたいに切り捨ててしまい、あまつさえ『自分は成長した』『先の英雄を超越した』などのたまうんだ。結局、一切を投げ出して、なんてのは上っ面だけなんだよ。正真正銘の詐欺師ばかりさ！勘違いもいいところだ」

ルーシイもガウエインも、黙って彼の話を聞いていた。完全にビールを飲む手は止まり、皿の食べ物にも手をつけず、じつとネツコの目を見つめ、彼の話の続きを待つ。

「従者に裏切られた英雄は、いや、元・英雄は踏絵と化し、元・従者たちに寄ってたかって貶され、唾を吐きかけられ、蹂躪され……新たな英雄の誕生とその栄光に花を添えるんだ。惨めだろ？哀れだろ？英雄だった彼がすっかり廃人となり、ボロ衣一枚で人生のどん底に落ちたとき、その従者だった連中はちゃっかりと違う大木に目をつけ、その果実からまたたつぷりと栄養満点の甘い蜜をすすってわけてさ。そして歴史は繰り返す。いや、便利だね。英雄ってやつは！」

「見くびってもらっては困る！」

ガウエインはネツコに怒鳴りつける。あまりに失礼なネツコの言葉に、彼は当然のように頭に来ていた。

「たしかに不貞の輩は、いつの時代のどんな大木にも毛虫のように蔓延る……それは知っている

る。それは知っているが……しかし、そやつらは本物の従者などではない！従者のフリをした、君の言う通り単なる詐欺師だよ！」

「ではガウエイン、君はロットにとっての本物の従者であるか？」

「違うない！」

ガウエインはジョッキに半分ほど残っていたビールをぐいっと飲み干すと、間髪いれずに言葉が続けた。

「私は盲目だ！ロット・ステイルバンという男の人間性に全身全霊を委ねた！彼が剣を持つとき私は剣を持ち、彼が勝利するとき私は勝利し、彼が死するとき私は死ぬ。そして、彼が世に必要とされなくなったとき、私もまた無用の人となるのだ！」

「無用の人！」

ネッコはガウエインの言葉に衝撃を受けた。

「それがどれほど残酷な言葉か、あなたは知っているのか？」

「それが来るべき結末だというのなら、私は運命を甘受しよう」

ガウエインはこう付け足した。

「それではまだ足りぬかね？」

ネッコは自分の口元を掌で覆い、しばらく深刻な目つきで何事かを思索していたが、やがてガウエインがやったようにジョッキに残ったビールを一気に飲み干すと、二、三度むせて、手の甲で口元を拭いた。

ネッコがカウンターに向かって片手をあげると、しばらくして、空っぽになったジョッキ二つの換わりに新しいビールがやってきた。

「よし。めくらの従者に乾杯だ！」

ネッコがジョッキを掲げると、ガウエインも同じようにジョッキを掲げた。ジョッキ同士が砕けそうな音でぶつかると、なみなみ注がれていたビールは零れ、すぐ下に置いてあったパン切れに染み込んだ。パンのスポンジの部分が、液体に濡れじわじわと変色していく様を、ルーシイはぼんやりと見つめていた。

「あの、わ、私は……」

ふいに、弁解するような口調で、ルーシイがネッコとガウエインに言う。

「……私には、そこまでの勇氣も覚悟もありません……だから……私は……その、大木に群がる毛虫なのかもしれない……」

「なに、ルーシイよ。お前がロット殿を踏絵にすることはないさ」

ガウエインが言う。

「恋もまた盲目。あるいは、私よりもずっと忠実な従者かもしれないな」

ガウエインはそう言うのと、自分でケタケタと笑った。ネッコも笑った。

「そんなんじゃないやありませんよお！」

顔を真っ赤にして怒ったルーシイは、目の前にあった自分のジョッキを引っつかんで、一氣に中身を飲み干した。苦しそうにむせ返ると、ガウエインは彼女の背中をとんとんと叩く。

その時、入り口の木戸がゆっくりと開かれた。最初、ネッコ達の席からは角度の関係で誰が入ってきたのか分からなかったが、例の青年達の軍服を着たものや、その他の酔っ払いの軍服達がこぞって立ち上がって敬礼をしたので、まず軍の士官であることは間違いないかった。敬礼をする軍服の中には尉官クラスの間人も見受けられたから、きっと相当な身分なのだろう。

ネッコは気になり、身を乗り出して来客を覗くと、士官は立派な雲のように白いひげを蓄えた初老の男だった。ネッコは彼に見覚えがあった。それもそのはず。名前だけで言えば、サンダルークの国民で知らぬものはいないほどの人物だったからだ。

「あれは……あの人はシーグムンド將軍じゃないか」

ネッコが呟くと、ガウエインは慌てて立ち上がり、彼の方へ飛んでいった。ルーシイも別の椅子をテーブルにまで運んできて、彼のために新しい席を用意する。

つづいて、もう一人の新しい客が、まだ閉じきっていない扉を押し開けて入ってきた。むしろネッコとしては、こっちの客の方が驚いたかもしれない……いや、彼がここに来ることぐらい、最初、彼に絡んだ青年達を見たときに予想できたはずだった。やはりネッコの神経は、研ぎ澄まされているようで鈍っていた。

客人……すなわち、アルフォンソ・エヴァンスは、自分の友人たちに挨拶をした。遅れたことに対する詫びをいれながら、口々に声をかけてくる青年たちの対応をしているうち、ある青年がネッコのほうを指差した。その青年にとっては、アルフォンソに彼自身の親友が来ていることを、好意をもって紹介したのであるが、アルフォンソがネッコの方を見るなり、彼の顔

からは笑顔が消え、呆れたような表情にかわる。

「おい」

アルフォンソの口調は重々しい。

「なにやっつてんだ、こんなところで……お前は……酒を飲んでいるのか？」

ネッコは、しまったな、と思った。病気で寝込む自分のために一日中駆けずり回ってくれたアルフォンソに、こんなところを見られたのでは申し訳が立たない。しかし、反省の気持ちはすぐに失せた。というより彼は自分で思うよりもずっと疲れていた。反省の気持ちは分厚い疲労の雲に覆われて、心が真っ暗に覆われたとき、次に姿を現した感情は「どこでなにをしようが俺の勝手だ」であった。

「そうさ。酒を飲んでいる」

「……！」

「なにか問題でも？」

「問題でも、だって……!?!？」

アルフォンソはネッコの方に歩み寄った。彼の一言で、完全に火がついたようである。

「君は病人なんだぞ！」

「……」

にらみ合うネッコとアルフォンソ。青年達はお互いに顔を見合わせ、不安そうに状況の仔細を訪ねあう。しかし、いがみ合う理由など見当たらず、見当もつかなかった。

「さあ、襟首引つつかまれたくなけりや、自分の足でいまずぐ家に戻るんだ」

「あんな家に誰が帰るもんか！」

「あんな家？お前は、ナターシアとリタが心配してるって言うのに……」

「関係ないよ」

ネッコはそう言うと、ジョッキを掴んでぐいっとビールを一口あおった。隣ではらはらしているルーシイト、険悪な雰囲気になかなか席に戻れないでいるガウエイン。シーグムンドと言えば、来た早々面白い見世物が展開されているのを、どこか楽しい目つきで見ている。アルフォンソの友人連中は彼をなだめるが、一向に聞く様子は無い。

「いいか？もしいまのような言葉をもう一度言ってみる。その時はお前の……」

アルフォンソは唾を飲み込んで、言葉を続けようとした。しかし、次に口を開いたのはネッコの方だった。

「何度でも言ってみよう、ナターシアなんて、僕の人生には全然、一切、まったく関係が……」

言葉が終わる前に、ネッコの視界は暗転した。目の前に小さな星のような物がちらつく。頬を支配する張り付くような痛み。血の香り。ネッコは自分が椅子から転げ落ちていることに気が付くのに、数秒間の時間を要した。

「やった！はじまったぞ！」

どこかの飲んだくれがはやしたてると、酒場は急に湧き上がった。口の端を服の袖で拭う

ネッコ。ゆっくり立ち上がる。

ふと、ネッコは気づいた。カウンターに座っていた、あの妙なローブの二人が、やけに不安そうにしているのだ。片方の少年よりもわずかに身長の高い細身のほうは、やはり女性だった。立ち上がって、こちらを警戒している。安酒場でよくある乱闘騒ぎだが、やはりそういった場には慣れない客なのだろうか？

「さあ、ネッコ！これ以上ぶん殴られたくなけりや、大人しく家に帰って……」

よそ見をしていたネッコから、唐突に飛んできた拳。アルフォンソは頬の一発を何とか堪えたものの、続けざまに飛んできたもう一発には、椅子を派手に散らかして転がる結果となった。
「くっ……」

アルフォンソは頭を振り、慌てて身を起こす。

「こ、こんのやろお！」

アルフォンソの友人の一人が、脇からネッコを殴りつける。それは、自分の友人を殴られた報復だったのだろうか……

「……おい！貴様、誰に断ってネッコに手を出す気だ！」

なんと、こんどはその青年をアルフォンソが殴りつけ、ネッコを含んだ青年達全員を巻き込んだ、乱闘騒ぎに発展した。

最初は、数人对二人の状況にアルフォンソとネッコは不利だったが、エスカレートするうち、血の気をあおられた他の客たちもその乱闘に参加し、事体は混沌を極めた。もはや、誰が誰を

殴る、というものではなく、彼らは相手を問わずに拳という拳をぶつけていった。とにかく人の形をしたものを殴り倒す。闘争本能についた火を、所構わず吐き出す青年達とよっぱらい達。店の中はめちやくちやになり、マスターは必死に警察にあてる言い訳を考えていた。

隅っこの席にちょこんと座るガウエイン、ルーシィ、シーグムンド。

「す、すみません、こんなことになるなんて……」

ガウエインが申し訳無さそうにシーグムンドに言った。

「まあ気にすることはないよ。マスター、ビールだ！」

「ええっ、場所変えないんですか？」

そう言うルーシィはもはや一分一秒でも早く立ち去りたかった。いつ自分にとぼっちりがくるんじゃないかとオドオドしていた。

そのとき、殴り飛ばされた青年の体がガウエインに直撃した。ものすごい騒音を立てて、大げさに転がる青年とガウエイン。

「いたた……へへへ、騎士さん、わる……」

青年が謝ろうとした瞬間、彼の体躯は来た方向へ数m吹き飛んだ。ガウエインのアップパーが彼のあごに炸裂したのである。もみ合う青年やよっぱらいの集団に放りこまれる形になったが、その青年だけは完全に気を失って、もはやピクリとも動かない。

「……我慢にも限度というものがある！」

ガウエインが大声で怒鳴りつける。ガウエインさん！というルーシィの声は、蚊の羽の音程

にも彼の耳に届かない。ガウエインが右手を振り上げて三人の男を吹っ飛ばす。まるで大津波のような強烈なラリアート。今度の乱入者はさすがに手ごわそうと見え、幾人かの男たちは怖気づいたが、逆に滾る血を一層掻きたてられた者もいた。

「こいつあ大物だぞ！みんな、かかれ！」

殴られては殴り返し、蹴ってくる相手の脚をふん掴み、そのまま片手で投げ飛ばす。椅子を振り上げて襲い掛かってくれば、それを頭突きで叩き割り、渾身のビンタで相手を張り倒した。暴れ馬のようなガウエインと殴り合いで対等に相手をするには、並みの男が十人かかっても全く歯が立たなかった。

「無邪気なもんだ……羨ましいのう」

シーグムンドがビールをぐいっとあおる。

「ひい……ロット様、大変ですよ、助けて……」

ルーシイは頭を抱えて、ぎゅっと目を瞑り、がたがたと震えていた。

「やめてください！」

泥沼化した酒場にうぐいすのような透き通った声が響き、男達は徐々に静まっていった。声の主は、カウンターに座っていた、ローブと分厚い眼鏡の妙な二人組み、そのうちの一人である。

「女……か？」

鼻血を抑えながら、アルフォンソがぼつりと呟いた。ウエイトレス以外にこんな酒場に女が

いるのはめずらしいことである。

「こんなの……酷すぎます！」

ローブの女性が続ける。賛成！と、ルーシイが心の中で叫んだ。

「おい姉ちゃん、あんた、誰だかしらねえが、邪魔するなら……」

誰かが言いかけると、女性はローブのフードを取り、眼鏡も外した。酒場の男達全員が静まりかえった。女性は、あのサンダルーク有数の騎士クーフリーンだったからである。

「……お願いです、やめてください」

中でも驚いたのはシーグムンドだった。クーフリーンがこんな場所にくるはずの無いことは、数年の付き合いで重々承知している。それなのに、こんな場所へわざわざ赴く理由があるとすれば……頭の中で、すぐにユングの頼みだと結びついた。事実、彼女の隣に座っている少年は、ユングの背恰好とほぼ同じである。恐らく本人に間違いないだろう。

クーフリーンはちらりとシーグムンドの方を見た。恐怖を堪えた、真っ直ぐな眼差し。

(……やれやれ。助けてくれってことかの……ま、こやつがこの連中を静まらせることが出来ただけでも、上等だわい)

シーグムンドはジョッキをテーブルに置くと、大げさな咳払いをして全員の目を集めた。そして、この地に住まうものなら誰でも知る、とある歌を口ずさみ始めた。歌声と言うにはいささか豪快な、野太く力強い響き渡る声だった。

「おおう、熱い血潮、母なる大地から譲り受け」

一瞬、きよんとする客達だったが、すぐさま彼の歌に続いて合唱を始めたのは、彼の部下でもある軍服達だった。

「奮える闘志を焚きつけて、いま声張り上げ、魔物撃つ」

「剣を振るうは人の技、術を振るうは人の知恵」

「大いなるサンダルク、栄光あれ」

軍服以外の客達も一人、二人と歌に加わり、滾った血を音楽の震えへと流し込む。脈々とながれる血流は、やがて酒場中に伝布し、酒場の外にまで届く巨大な大合唱の波となった。

アルフォンソと彼の友人である青年達も肩を組み、大きく揺れながら声を張り上げる。

ほっとしたクーパーリンだが、彼女には上手く理解できない事件だった。さっきまで殴りあっていた人々がどうしてこんな風に歌を歌えるのだろうか？彼女の知らない世界、知らない作法（ルール）、知らない状況。そんな気持ちを理解したいような気もしたが、殴りあうのだけは絶対にイヤだった。

そして、お忍びで酒場にいたユング。今日という一日は、この国において別段特別な日ではない。三番街のどこかで毎日のように起こる事が、たまたまこの酒場で起こっただけのことである。それでも、今日という一日がユング少年の心に残した衝撃は、言葉では言い表せないほど深く、そして新鮮な感情だった。罵りあい、殴り合い、下品な歌。汚らわしいと教え込まれてきた野蛮な行為の数々。そして、皮肉にもそれらがもたらした一体感。王室と最低階級層との隔たり？しかし、シーグムンドはそれを知っている。どうして誰も教えてくれないのだから

う？スイートピーも知っているのだろうか？自分は、やはり鳥かごでさえずる一羽の雛鳥に過ぎなかったのだ。大人たちは、身分と言う巨大な隔たりを知っていながらそれと向き合うのにはとほど疲れ、妥協し、お互いを見ないようになっているのではないのか？ユングは混乱した。

自分は一体どうしたいのか？自分は一体どうするべきなのかを考えると、彼の心の奥底に一瞬、巨大で真つ暗な深遠がふつと浮かんで、すぐに消えた。途方も無い、絶望すら感じるほど巨大な巨大な深遠だった。

「おお、輝く陽日、父なる空から照り付けて」

「奮える闘志が燃え滾り、いま声張り上げ、いま魔物撃つ」

「命を奪うは人の罪、命を救うは人の徳」

「大なるサンダルク、栄光あれ」

ガウエインが壁にもたれ掛かってぐったりとしているネッコを抱える。

「大丈夫か、ネッコ殿？さあ、家まで送ろう」

ガウエインとネッコの前にアルフォンソが立った。

「ありがとう、騎士さん。ネッコは俺が……」

「……頼む」

アルフォンソがネッコの体を抱えて、酒場の出口に向かった。ガウエインがドアをあけてい、その脇を抜ける際、アルフォンソはちらりと酒場の中を覗いた。一つの歌を中心に、巨大な波のうねりのようなものがみえた。決しておぼろげではなく、ありありと見え、手を伸ばせ

ば届きそうな存在感を放つうねりだった。さっきまで殴り合っていた者同士の奇妙なまでの一体感。拳も歌も、同じ源泉から湧き出たものなのだろうか？人の本能という、熱い源泉。そこに、創作というものが人を救うための、一つの可能性が埋もれているような気がする。罵りあっても、殴りあっても、殺し合いも、抗争も、戦争も、紛争も、全てを浄化して一つに纏める、決定的ななにかが。アルフォンソは、心の奥底で熱く滾る思いを、その胸にしっかりと刻み付けるのであった。

ネッコとアルフォンソはふらついた足で路地を歩いた。お互いに顔中に膨れた青痣をつくり、喋るのもままならなかった。だが、回復魔法は使わなかった。二人ともシングルーク人らしくヒールぐらい当たり前のように使えたが、今日はどうしてかそのまま痛みに酔いしれたい気分だった。

静かな夜風が頬を撫で、傷を癒す。スズムシの鳴き声がガーゼのように、ズタボロの身と心を包み込む。空にはぽっかりと満月が浮かんでいた。橙色の、大きな、見ているだけで何かを掻きたてられるような、そんな月だった。

「……」

アルフォンソがちらりとネッコの方を見る。ネッコは目線を遠くにやり、ぼーっと月を眺めているようだった。

「その……すまなかつたな、殴ったりして」

アルフォンソが言った。ネッコは何も言わず、相変わらずの表情で遠くを眺めている。たまに歩く震動が傷に響くのか、わずかに目元をしかめる。

「別に本当に殴りたかったわけじゃないんだ。なんか、つい、体が勝手に……」

「相変わらず馬鹿だな、お前は」

ネッコが言った。アルフォンソは少しむっとしたが、すぐにそのとおりだと思い、しゅんとする。

「謝るのはどう考えても僕の方だろう」

アルフォンソは意外そうにネッコの顔を見た。ネッコは小さな溜息をつき、足元に転がっていた石ころを蹴り飛ばした。どこかの家の塀に当たって、それっきりである。

「ふう……」

「……」

「今日は疲れた」

「俺もだ」

「……」

「……」

二人は黙って歩きつづけた。本当に疲れていたし、喋りたいことなんて何も無かった。おまけに喋るといふ行為は、ずたずたに傷つけられた口内に優しくくない。アルフォンソは口の中に

堪った血を道端に吐き捨てた。黒い染みが土に混じって泥となる。

上品な酒場から、馬鹿笑いをして出てくる数名の貴族。真っ赤なドレスを着た化粧の濃い婦人、口の上になちよこんとヒゲを乗せた吸血鬼のような伯爵、丸々と太ったリンボーの出来そこないのような中年。彼らはボロぎぬのようなネッコとアルフォンソの方を見るなり、引きつった笑いを浮かべたが、すぐに自分たちには関係のない世界としてその存在を忘れた。彼らが自分たちの前を過ぎ去っても、アルフォンソは気にいらぬ様子で彼らの背中を睨みつけた。

「ナターシアは、貧乏だけどいい子だよ」

ふと、思いついたようにアルフォンソが言った。

「あの子はお前のことを心配してるんだ。関係ないなんて言うもんじゃないぜ」

「言ったっけ」

「ああ、言ったとも。『僕の人生には全然、一切、まったく関係がない』って」

「言ったかな」

「言ったさ」

アルフォンソは溜息をついて、言葉が続けた。

「彼女もリタみたいに、何十年もお前の家に住み込んで、ずっと世話をしてくれるつもりかもしれんぞ。関係ないなんて言うもんじゃない」

アルフォンソの言葉に、ネッコは首を振った。

「いや、あいつだっぴいつかは結婚するし、そうすればどこへでも出て行くさ。リタはさ……ほら、彼女はなにせ、未亡人だからね。旦那を戦争でなくしたんだとき」

アルフォンソは驚いた。同時に、リタの思う人がリジョだと思ひ込んでいたため、どうしようもなく恥ずかしくなつた。未亡人とは！それは全くもつて叶わぬ恋に違ひない。

「でも……例えば……もしだよ」

アルフォンソは顔を赤らめながら言つた。

「……？」

不思議に思うネツコ。アルフォンソは続けた。

「もしナターシアが、お前と結婚するようなことがあれば……」

「……」

「……」

「……ぷっ」

「……！」

「はっはっは！」

ネツコは笑つた。アルフォンソの言葉の裏には、相当面白い意味合いが含まれているような気がしたが、なにがそこまで可笑しいのかはネツコ自身にも良く分からなかつた。困惑するアルフォンソ。

「なにが可笑しいんだよ」

「なんだろうな、くくく……」

「やめてくれよ、こっちは真面目に話してるのに……」

「ああ、すまない。すまないね」

「……」

「……」

「……だからもう少し彼女に」

「ぶふっ」

もう堪えきれない、と言った感じで思い切り噴出してしまふネッコ。アルフォンソはむっとして、それから別れ際まで一言も口を利かなかった。アルフォンソが最後に言った言葉は「俺だって人並みにナイーブなんだぞ」だった。今度はネッコも笑うのを我慢したが、口元からその名残は消えてなかった。

アルフォンソと別れたネッコは、一人ふらふらと帰宅した。今日と言う日に起こったいろんな出来事が泡のように浮かんでは弾け、その度に彼は首を横に振って、何も考えまいとつとめた。何も考えたくないし、さっさと帰って眠って、いまのズタボロの状態をリセットしてしまいたかった。

ヴァンシユタイン家に辿り着くと、彼はふと、嫌な予感がした。家の中の明かりが消えていないのである。ただ単にリジヨが帰宅した、というだけならいいのだが、ひょっとしてナター

シアの奴が、アルフォンソの言った通り本当に自分の心配をして眠らずに待っていてくれるのだろうか？あるいはリタが？もしそうだとした場合、この体中の痣を消して入るのがせめてもの思いやりというものだろうか。ネッコは迷った挙句、自分に回復魔法をかけた。厄介な怪我、例えば複雑な骨折などは無かったため、たちどころに傷口は元通りに修復し、彼は全身を覆っていた苦痛から開放された。ふと、いままで痛みに耐えていた自分がバカバカしく思えたが、人はたまにはバカバカしくあるべきだと思い直し、すぐに納得した。そして自分の家の扉を叩く。

「すまない、僕だ。遅くなった」

どたどたと誰かが走ってくる物音。やがて家の扉が開かれる。その慌てっぷりに、例の嫌な予感³が別の形をもって彼の頭上に浮かび上がる。

出てきたのはナターシアだった。

「おい……一体なにを慌てているんだ？」

「さっき、女の子が訪ねてきて……」

「こんな時間に？女の子？」

ネッコは玄関から覗く時計に目をやった。深夜の三時である。

「いったい誰が？」

「分からないけど、普通の子じゃなかったわ。私たちよりも三つか四つぐらい年下で、ネコかへびみたいな冷たい目つきで……おまけに片方は眼帯をして……随分慌ててたわ」

「アムリタだ！とネツコは思った。

「……で、これをあんたにとって」

ナターシアが差し出す二つ折りの紙切れを、ネツコはふんだくるように取って、中を開いた。そこには、乱れた筆跡でこう書かれていた。

「事体は急を要す。事情が変わったため、 Gandrola の丘では無く、東のサタ岬へ。私たちの目標が、いままさに死に瀕そうとしている。」

「ねえ、その目標って……」

ネツコは読み終えるなり、紙きれとナターシアをほっぽって駆け出した。杖も取らず、魔法使いの服も取らず、体中に堪った疲労をずっしりと引きずって、一心不乱に東のサタ岬を目指した。

（ゼムが……ゼム・ロックが死ぬ？僕達との対決の前に？なんてこった！あいつは人を馬鹿にしているのか！？死ぬな、死んでくれるな！僕が、アムリタがお前を殺さなくちゃ、母さんは救われたいんだよ！頼むから死んでくれるなっ！他の誰がお前を殺しても、まして勝手に死んでしまったってダメなんだよおっ！絶対に許さんぞ、そんなこと！）

ネツコは手の甲で自分の額の汗を拭いた。それが走って火照った体が流した汗なのか、もしゼムが死んでしまったら……という懸念が流させた冷や汗なのか、それは分からない。ただ、彼の心を真つ暗に支配しているのは、明らかに後者の方だった。

途中、路上に剥き出しになつていた拳大の岩が、ネツコの足を引っ掛けた。彼はおもいつき

り前のめりにこけて、腕と足を擦りむいたが、回復魔法をかける時間すら惜しい……というよりそんなことは考えもつかない様子で、慌てて立ち上がり、死に物狂いで走りつづけた。

それほど遠いわけでもないサタ岬への道のりは、ネッコにとって、空に浮かぶあの不気味な満月よりも遠く長いものを感じた。

ゼム・ロックという人間に表立った地位は無い。彼が一体どこでなにをしているのかなど、近隣の人間には知る由も無かったが、だからこそ彼が、まるで大地主のような立派な邸宅に住んでいるのを怪しみ疑らない者は無かった。ある者は好奇心にかられ、またある者は欲望にかられてゼムに近づこうとしたが、大抵は門前払いだった。それでもなお深く立ち入ろうとすれば、それ相応の「処置」を受けることとなる。また、そういった闇の仕事を請け負う人間こそ、ゼムにとつてはまだ近い存在だと言えよう。人々に忌み嫌われる禁術を専門とする彼にとつては、同じ穴のムジナといったところだ。

しかし、基本的に彼は孤独だった。必要の無い人付き合いは極力避け、友人と呼べる人間は指折り数えられる程度。巨大な屋敷の中には、機械のような使用人と、機械のような執事、そして、機械のような娘だけ……もちろん、機械的に振舞うことを強いているのは、ゼム・ロック本人であるが。

——数時間前、ロック邸。

アマリタはカラスアゲハのような真つ黒のドレスを身にまとい、同じく真つ黒に光る良く手入れの施されたグランドピアノの前について、ゆっくりと蓋を開いた。規則正しくならぶ白と黒の鍵盤が美しい。

彼女の後ろに立っていた一人の初老の女性が、自らの鞆から一枚の楽譜を取り出し、ピアノの楽譜たてに備える。女性はそっと身を引き、アマリタが演奏を始めるのを待った。

……アマリタが十歳の誕生日を迎えたとき、ゼム・ロックは彼女に初めて自由時間というものを与えた。それが褒美だったのか、それとも単なる気まぐれだったのかはわからない。とにかく、生まれて初めて自由時間というものを与えられたアマリタは、嬉しいと言うよりもむしろ困惑した。自分の時間のもてることなど期待していなかったし、自分という人間が一体なにをすればいいのか、なにができるのかなど見当もつかなかった。

町を歩いてみた。森を歩いてみた。浜辺を歩いてみた。時間の関係で山は諦めざるをえなかったが、ちよつとした丘ぐらいなら歩いてみた。どこかの城の城壁を沿って歩いてみたし、自分と同じぐらいの子供達が通う学校の通学路も歩いてみた。しかし、彼女は特になにに対して感動するわけでもなく、ただ歩いてみただけだった。そこには、なにもなかった。彼女の中にはなにも無かったのだ。魔法の種類なら一万は知っていたが、花の名前となると十も知らなかった。

アマリタは理解した。自由時間を与えられたからといって、自分のなにかが変わるわけではない。これから毎日二十四時間のうちの一時間を無駄に生きるようになっただけ。でも、それ

ならそれでいいと思つたし、別になんとも感じなかつた。生き急ごうと、急ぐまいと、彼女の目標や運命といったものはすでに決まっているのだから。

そんなある日のこと。いつもと同じように無駄に町を歩いていると、突然頭の中に、青い水たまりのようなものが飛び込んできた。あるいは、肌と肌の間ミルクが零れた、のかもしれないし、道に歩いていて空気に濡れかけた、のかもしれない。とにかく、アムリタ自身は初めてピアノというものを聴いた瞬間を、そんな風に形容し、心に止めているのだった。新種の衝撃だった。もちろん、彼女自身それまでの人生で音楽というものを何度か聴いたことはあつたが、しかし、それは言わばピアノという音、クラリネットという音が耳に届いただけで、生きた音楽というものを味わつたのはその時が最初だった。アムリタは感動した。音楽そのものと、そして、自分に少しでも人間らしい感情があつたことに。

ピアノが欲しくて、アムリタは初めてあの憎らしく恐ろしい父親に頼みごとをした。ゼムが「特に反対する理由はない」と一言口にする、次の日には屋敷に大きなグランドピアノがやつてきた。一般市民には手の届かない、上流貴族のための高級品で、アムリタがいま目の前に座つて奏でようとしているこれがそうである。このピアノが届いたその日から、彼女の一時間は全てこのピアノの前で過ぎていった。楽譜を、理論書を買ひ漁り、時間を見つけては手当たり次第に読んでいった。魔法の修行の時以外、たとえば食事中、どこか遠い修行地への道中などに、絶えず頭の中で演奏を続けた。そうすると、すっかり指の動かし方というものを掴むことができたので、いざピアノの前に座つてみると自然に指が動くのだった。

「弾いてみせてもらなさい」

女性がアムリタに言った。この女性こそ、アムリタにはじめて、生きた音楽、を味あわせた張本人で、名をジヴニーという。アムリタはあの日（頭に水溜りが飛び込んできた日）から暇を見つけては毎日のように手紙を書き、彼女の音楽の美しさを褒め称えとともに、自分のピアノの教師になって欲しいと懇願した。ジヴニーは自分の教室に訪れる生徒たち以外は基本的に師事しないことにしていたが、アムリタの異常なまでの熱心さ（と、文筆の美しさ）に心打たれ、彼女の教師となることを承諾した。それは、アムリタがピアノを手に入れた約一月後の出来事だった。

ある時、ジヴニーはロック家の執事であるセグマールにこう漏らした。

「私が来たときには、彼女は理論というものをほぼ完璧に習得していました。基本的な運指やテクニクなどはまだおぼつかないところがあるけれど、それは練習時間の少なさからまだ肉体が追いついていないだけで、彼女の頭の中にはとうに、どういう風に指を動かせばいいか？ といういわゆる、コツ、のようなものがすでに存在していたようです。たったひと月の間に恐ろしい集中力で全てを学んだのでしょうか。そして単なる鵜呑みではなく、彼女なりの応用力も感じさせます。理解力と意欲、想像力、そして熱意が卓越している証拠でしょう。なにより私が感心したのは、彼女がすでに自分の中にある音楽的スタンス、独創性のようなものを、おぼ

ろげながらにイメージし、感じ取っていたことです。幾多と存在する演奏家には、結局自分の音楽というものを掴めずに消えていく者、また、そんなことは考えもせず、ただ愚にもつかない演奏で観客からお金を集める者たちもたくさんいますから、これは驚異的なことです。たまたまに拙い技術ながら、人の心を大きくゆり動かす演奏家がありますが、そういった人たちはみな決まって自分の演奏というものをしていきます。案外、天性の資質とはそういうものなのかも知れませんね」

「ジヴニー先生」

アマリタが呟く。

「私はあなた付きの演奏家じゃないわ」

アマリタは眉をひそめて、ちらりと後ろを振り返る。ジヴニーと、その横にいた執事のセグマールは互いに顔を見合わせた。

「ノクターンの2番だなんて、あなたの趣味はわかっているのよ。てっきり頼んでいた楽譜をもつて来てくれたのかと思ったのに……」

「ほほほ……頼んでいた楽譜、頼んでいた楽譜……さて、なんだったかしら？」

ジヴニーは照れ隠しに笑った。年老いていても、その笑顔には育ちの上品さが際立つ。

「エルメスの、魔王の闇、かと」

アマリタの代わりにセグマールが答えた。

「そうそう、フォンベルト・グレイ・エルメス。神童エルメス」

ジヴニーはにっこりと微笑んで、言葉続ける。

「さすがのあなたも、同じルーキーとして彼のが気になるのね」

「私は彼をライバルだなんて思っていないわ。向こうは神も微笑む天才少年、私は、名も無き、ピアノ奏者だもの」

名も無き、というのは、彼女なりの冗談ないし皮肉なのだろう。アムリタという名前はあくまでネッコたちとの間だけのもので、この館には存在しない。

「ふふ、負けず嫌いが謙遜したってバレバレですから」

ジヴニーが言った。セグマールが含み笑いをする。

「……」

アムリタは肩をすくめて、ピアノに向き直った。

アムリタがなんの気なしにEフラット・メジャーのコードを鳴らすと、さっと部屋の雰囲気が変わった。まるで、壁や天井、空気にいたるまで、Eフラット・メジャーという色に一瞬にして塗り替えたようだった。

「ふう……今日はあなたのリクエストに答えるから、次回は必ず忘れないでね。約束よ」
「ええ、もちろんですよ」

と言いながら、頷くジヴニー。

アムリタがそっと鍵盤に指を添えると、ジヴニーとセグマールは気を引き締めた。

やがて、アムリタの演奏が始まる。静かに、優雅に、穏やかに、それでいて気丈に、ピアノの音一つ一つを丁寧に打ち鳴らす。その途端、いまは夜のはずなのに、窓の外から明るい陽日が差し込むような錯覚。魂の揺らぎ、普遍的な幸福、永遠のノスタルジイ、生命の快活さ、白いシルクのカーテンのはためき、白い壁の輝き、白いランプのぬくもり、白い吐息のざわめき、白い胎動、白い祝福……それら言葉では表し様も無い真っ白な感情が、ダイナミックなフォルティシモに重なって波紋のように宙を広がっていく。それに呼応してジヴニーとセグマールの背筋に寒気のようなものが走った。芸術特有の、肌で感じる感動、というものである。二人は思わず感嘆の溜息を漏らした。

ゆりかごの上で眠る赤ん坊、大空の下で眠る山羊、熱気に温まった大地からそそり立つ背高いひまわりの花々、神々の住まう煌びやかな神殿、水のゆらめき、川のせせらぎ、海のうねり、そしてそれらに反射し、乱れ、きらきらと輝く無数の白い光……

しばらくして、曲が終わって、二人の聴き手が拍手をしようとしたとき、アムリタは続けざまにノクターンの三番を演奏し始めた。観客に対する彼女なりのサーブスなのか、あるいは、沸きあがった情熱、音楽的悦楽に今しばらく身を寄せて居たかったのか。

「……！」

しかし、アムリタの演奏は続こうとはしなかった。彼女の指は止まり、まるで斧で断ち切られたかのようにピタリとやんでしまう。いぶかしむ後ろの二人。

アムリタは立ち上がり、部屋の出口の方を見た。ジヴニーとセグマールが彼女の視線の先を

追う。すると、彼女が手を止めた原因が理解できた。

「おや……これはこれは、マスター」

セグマールが丁寧なおじぎをする。

「……」

そこには、無言のゼム・ロックがたっていた。アムリタの演奏で白いもやに包み込まれていた部屋に、まるでどす黒い死の塊のようなものが投げ込まれる錯覚。ジヴニーは鳥肌がたった。感動などではなく、純粋な恐怖である。同じ皮膚のあわ立ちだというのに、この不愉快さはなんだらう。

アムリタは魔法の修行の心積もりをした。たしかにいまは彼女に与えられた自由時間だったが、それは絶対ではなかった。ゼムが一声「終わりだ」と言えば自由時間はそこで中断される。この家では彼が絶対のルールだったし、誰も彼の言葉に逆らうことなどできはしなかった。

アムリタが静かにピアノの蓋を閉じようとする、ゼムは片手を前に伸ばして、それを静止した。

ピタリ、と止まるアムリタの動作。

「……いまはお前の時間だ」

ゼムの意外な言葉に（傍目には分からないでも）アムリタは驚いた。ようするに「ピアノを弾いて見せろ」ということらしい。執事のセグマールも驚いた。いままでゼムがアムリタのピアノに対して、なんの感心ももっていないことを彼はよく知っていた。

ややあって、ノクターンの三番がもう一度頭から演奏される。しかし、さっきの優雅で耽美な演奏とは違い、奏者の気持ち掻き乱れているのが分かる演奏だった。いろんな色の絵の具を混ぜた灰色のような演奏。ジヴニーは思わず顔をしかめた。セグマールは姿勢を正し、黙って直立している。

「……」

ゼムは微動だりせず、腕を組み、じっとアムリタの演奏を聴き入っていた。彼がなにを考えているのかは、外からは窺い知れない。音楽を堪能しているようにも見えず、乱れた演奏に不愉快そうにしているようにも見えず。あるいは、なにも感じていないし、なにも考えていないのかもしれない。ただ演奏という行為が視界に入っているだけで、からっぽの気持ちに身を任せているだけかもしれない。いつの日かからっぽの気持ちで、あちこちを歩き回ったアムリタのように。

アムリタは、最初こそ戸惑いを隠せなかったものの、やがて落ち着きを取り戻し、そうすると徐々に演奏にも艶が戻っていった。萎びた花はその花弁に張りを湛え、やせ衰えた茎に血を通わせる。曇り空から差し込むおぼろげな陽日がきらめいて、また部屋中を白く染め始める。ジヴニーは微笑んだ。それでこそアムリタだと。ちらりとゼムの方を見たが、彼は相変わらず人形のように、筋肉一つ、細胞一つ動かしていないようだった。

演奏が終わる。ジヴニー、セグマールが大きな拍手をする。アムリタが小さな溜息をついた。「いい演奏だった」

ゼムが言った。アムリタの心臓が高く脈打つ。ゼム・ロックが魔法以外のことで自分を褒めることなど、たとえばあの月と太陽が砕け散ろうともありえない。いったい、どういった心境の変化なのだろうか。

(……)

嬉しい？いや、違う。悲しい？それも違う。相手が誰であろうが、聴き手が自分の演奏を褒めたのだ、悲しいわけが無い。

「……ルドヴィヒを倒した暁、お前に名前を与えようと思う」

ゼムが言うと、セグマールは思わず唖った。

「おお、マスター……！」

ゼムがついに自分を娘として認める日が近づいている。さっきピアノを褒められたのと同じように、アムリタは嬉しいわけでも悲しいわけでもなかった。そんな単純な感情では、片付けられない想い。そして、その理由をおぼろげながらに理解した。

どこか嬉しい自分が、悲しいのだ。

なぜこの期に及んでゼムは父親面するのだろうか？どうしていまさら大切に隠していた財宝のように親子の絆をちらつかせるのだろうか？そして自分は、どうしてこんな父親との絆に、やはり、かけがえの無いものを感じているのだろうか？彼女は、ゼムはもとより、自分自身のあいまいさに腹がたった。

(私の母はマリア・ヴァンシュタイン。私の兄はネッコ・ヴァンシュタイン。私のお爺様はル

ドヴィヒ・ヴァンシュタイン。でも、ゼム・ロック……あなたは私の父親じゃないわ。あなたが私を娘と認めるその前に、私達兄妹の手で殺される運命なのだから……！どんな心境の変化かは知らないけど、いまさら独り善がりに父親面したって……)

「マスター！」

ぎくりとするアムリタ。

残酷な考えにのめりこんでいたアムリタの神経をたたき起こしたのは、セグマールが自らの主人を呼ぶ声だった。アムリタはそれまで自分の父親が堅い床に突っ伏していることに気づかなかった。どさりと倒れた音も耳に入っていたはずなのに、彼女は全く気づいていなかった。

「セグマール、医者を！」

とっさにアムリタが叫ぶと、セグマールは頷き、部屋を飛び出した。

アムリタがゼムの首を腕に抱え、上半身を起こす。ジヴニーはとつぜんの事体に判断力を失い、部屋の真ん中で慌てふためいていた。彼女はこういった事態には無縁な人だった。むしろ対極に位置すると言ってもいい。ジヴニーは血一つ見て失神してしまう、窓際のお嬢様育ちだった。

「……無駄だ、医者など……」

ゼムが掠れた声で言う。

「ぐう……痛む……全身が疼く……天命だ。四肢に飼った悪魔どもが目を覚まし、のたうち回っているのだ……！」

アムリタがゼムの服の袖を捲ると、強烈な腐敗臭が部屋に漂った。思わず鼻を覆い、顔をしかめるアムリタとジヴニー。ゼムの腕は紫色に変色し、まるでいまにも腐り落ちようとしている。

アムリタは禁術についてそれほど詳しい教育を受けていなかったものの、このゼムの症状の原因がそれであることぐらいは分かった……そして、もはや末期症状で、手の施し様がないことも。もってあと数時間といった所だろう。おそらくは朝も迎えないうちにゼム・ロックという人間は、この世からいなくなってしまう。

アムリタは両手で自分の顔を覆い、絶望に体を振るわせた。

(よりによって……私よりも先に禁術の末期症状があらわれるなんて……全てを終わらせる前に、勝手に死んでいってしまうなんて、この男は……つくづく……！)

「ま、魔力安定剤を……」

ゼムが言った。

「私の魔力が……デーモンの瘴気と体内で競合を起こしているのだ。私の魔力を押さえ込めば、競合は収まり、すこしはもつ」

「ジヴニー先生、セグマールに魔力安定剤を持って来るように頼んで。急いで！」

アムリタがジヴニーに言うと、放心状態だったジヴニーははっとして、頷き、慌てて部屋から出て行った。

アムリタとゼム、たった二人だけの部屋に、ゼムの瀕死の吐息が響く。そのざらついた一呼

吸、一呼吸が、ゼムの体を削り、死の縁へと落ち込んでいくような感じがした。全てが終わるまでなにかもが止まっていればいいのに。アムリタは珍しく理不尽なことを考える自分が気がつき、自分は動揺しているのだな、と思った。

「……殺しましょう」

アムリタは言った。

「せめて……せめて、あなたが生きているうちに、宿敵ルドヴィヒ・ヴァンシユタインを殺してみせます」

ゼムはおぼろげな顔つきでアムリタをじっと見つめていた。なんとという目だろう。うつろで、生の輝きというものが全く感じられず、その視界だけ先に地獄を見つめているようだった。

「……やってくれるか」

ゼムは言った。

「いや、そうだな。やらねばならない。そのためにお前はいるのだ。そのために……分かってるな？」

アムリタはそつと首をうな垂れ、顔を落とした。

残酷な笑みに歪んだ顔を、ゼムに悟られまいと……

それからアムリタは、ネッコが酒場にいる間に彼の家に飛んでいき、例の書置きをナターシアに渡すと、すぐさま屋敷に戻った。

ゼムはリビングで椅子に深く腰を落とすし、目を瞑ってじっとしていた。魔力安定剤が効いて多少は体の苦痛もマシになっているのだろう。息遣いは落ち着き、表情もどこか安らかだ。しかし、まるで死人のような形相だった。じっと見ていると、生きているのか死んでいるのかすら分からなくなる。

その脇ではセグマールや使用人たちが心配そうに彼を見守っていた。ジヴニーはどうに家に帰っていた。

「決戦の場所は、サタ岬です。あそこなら人目につかないし、そう遠くはありません」
アムリタが言った。

「あそこで全てに決着を」
ゼムは目を瞑ったままゆっくり頷いた。

「さあ、急ぎましょう」
「ええ？お、お嬢様、い、いまからですか！？その……今日は安静になさった方が……」

使用人の一人が言ったが、全ての事情を知るセグマールが、彼女を静止した。

(……もはやマスターに明日は無いのだよ)

セグマールが自分を静止する意味がわからず、使用人は困惑した。昨日まで病氣一つしなかった主人が、まさか絶対に避けられぬ死を目前に控えているなど、露ほどにも思わぬ様子だった。

ゼムは目を開くと、渾身の力で起き上がろうとした。しかし、体中が痺れて、ちっとも起き

上がれそうに無い。肉体は崩壊寸前で、おまけに人間のもう一つの生命力と言われる魔力が抑えられているのだから、無理もなかった。

アムリタは自分の肩にゼムの腕をかけ、彼の背中に手をやり、無理矢理ゼムを立たせた。彼が一人ではとても歩けそうにないと分かると、躊躇うことなく自分の背中に彼を負ぶった。悪魔の肉体は人間のそれよりも随分と重い。痩せても太ってもいけないゼムの体だが見た目よりはずっと重かった。しかし、アムリタは体力に自信があったし、サタ岬までそれほど距離があるわけではないから、なんとかこれで行けるかな、と思った。

セグマールは思わず胸を打たれた。きつとこれが、最初で最後の「親子」の助け合う光景だろう。そしてもしアムリタがルドヴィヒに返り討ちにされるようなことがあれば（彼はアムリタの計画など知らず、ルドヴィヒと決着をつけに行こうとしていると純粹に信じている）自分たちはいったいどうすればいいのだろうか？

「お、お嬢様！」

セグマールの声に、アムリタはびたりと足を止める。

「必ず……必ず生きて帰ってらっしゃいませ」

彼の言葉はアムリタの罪悪感を刺激した。

生きて帰る？アムリタは思わず、笑ってしまいたくなくなった。アムリタは思った。私が戦う相手はルドヴィヒではない。リジョでもないし、ネッコでもない。この、ふとした瞬間にでも死んでしまいうような、虫けらのようなゼム・ロックが相手なのだ……負けろというほうが、無理

である。

……そもそも、生きて帰ったところで、なんだというのだろうか？ 私の寿命はいくらも残されて無いというのに。

「……分かったわ」

アムリタはセグマールにそれだけ言って、屋敷をあとにした。

一方、ネツコはサタ岬に通じるヴァルハラの森を駆けていた。たまりにたまった疲労が体中にのしかかる。踏み出す一步一步が、まるで水中の動作のように重く、辛い。

「もう少し……もう少しなんだ……もう少し……」

サタ岬まであと数百mといったところで、異変は起こった。ふと、彼は身体中にゾクリとする悪寒を感じた。

「う……!?!?」

それはまるで、空気が脳味噌を浸食していくような感覚。月が肌という肌を舐めまわすような感覚。木々が体中に絡まって、雑草が眼球を撫で、砂が臓物をかき回し、虫どもが舌の上を這いずりまわり、恐怖が鼓膜を貫き、不快感が首根っこを掴み、絶望が脊髄を真っ直ぐに削っていくような、地獄のどんぞりに落とされ、真っ暗闇にレイプされるような感覚。

例の怒りの書の病状だった。それも、いままでになく強烈なものである。

「う、う、う、う、うわああああ！」

堪らずネッコはその場に転がって、うずくまった。白い丸模様には黒い穴が三つ開いたような顔つきの亡霊どもが、視界に纏わりつき、哀れなうめき声を上げている。振り払おうにも、身体が痺れて動かない。強烈な金縛り。指一本思うように動かなかった。

「あ、ああ……ああ、わ、わあああ、うわああああああ！」

恐怖の絶叫が森に木霊する。それに呼応するように野犬が遠吠えを上げるが、ネッコには聞こえない。

徐々に遠のいていく意識。致命的なんじゃないか？とネッコは思った。これはさすがに、このまま狂い死ぬんじゃないのか？いや、いつそ死んでしまいたい。その方がずっとラクだろう。これからどんな楽しいことがあるうと、どんな気持ちのいいことがあるうと、どんな見返りがあるうと、どんな幸福があるうと、どんな奇跡が自分のために用意されていようと、どんな生活があるうと、どんな人間が自分を待っていていようと、もはやなにもかも捨てさって死んでしまいたかった。さっさとぶち壊してゼロの闇に放り込んでしまいたかった。辛すぎる。彼がいま味わっている恐怖は、人間に生きるか死ぬかの選択肢を残させるような、そんな生易しい次元のものではなかった。

彼は人間の精神のタフさを呪った。肉体ならば、頭にハンマーを振り下ろせばそこで完結するということに、精神はありとあらゆる苦痛に耐え、心臓を打ち鳴らし続けようとする。自分がさっさと狂い死なないことが忌々しい。もしこれに耐え切って生き延びたら、これからは自殺

用の短剣を携帯しよう。ネッコはこの瞬間、本気でそんなふう考えたのだった。

森の向こう側に見える巨大な地平線。それを口惜しげに睨みつけたとき、ネッコは気を失った。なにか囁き声が聞こえたような気がしたが、もはやどうでもいいことだった。

アムリタとゼムが屋敷を出発したのは午前一時ぐらいで、その一時間後にはサタ岬に到着していた。ネッコが酒場から帰ったのが午前三時だったから、少なくとももう一時間は彼を待っていた。

アムリタは柄にも無くいらついた。細く短いロウソクに灯るゼムの命の灯火は、蝶の羽ばたきによって沸き起こるそよ風一つで消し飛んでしまいそうなのだから。

「……ルドヴィヒは本当に来るのか？」

大きな岩にもたれかかって、ゼムは言った。アムリタは彼に背を向けて、じっとネッコがやってくるはずのヴァルハラの方角を眺めていた。

「来ます」

「勝てるか」

「はい」

「……」

ゼムはゆっくりと息を吸い込み、吐き出す。

海の方から生暖かい潮風が吹き、ばたばたと全身を撫でていく。追い風に髪をかき乱されても、アムリタは少しも気にしなかった。ただひたすらヴァルハラの森をじっと眺めて、全てにケリをつけることだけを考えていた。

じりじりと時が磨り減っていく。こうやって、じっと黙ったまましていると、アムリタは不安になる。ふとした拍子に振り返ると、ゼム・ロックが死んでいた、なんてことになってはいやしないだろうか？

「……お前の母は、私を好きになろうとはしなかった」

ゼムは言った。まるで自分の生命を確かめるように。アムリタも、心のどこかでほっとする。「……だから私はさる悪魔と契約を結んで、マリアの心を奪おうとしたんだ。しかし、悪魔がマリアから奪えたのは精神だけだった。心は奪えなかったのだ……ふん、馬鹿な女だよ。マリアは自分の人格を破棄してまで、私を拒んだのだ……く……！ 抜け殻となった肉体に、心なんぞ何の役に立つというのだ？ 愚かだよ、まったく……ヴァンシュタイン家というものは、誰一人として救いようが無い……」

アムリタはやはり彼に背を向けたまま、しかし、その瞳に冷たい輝きを灯した。マリアが……自分の母がああなったのは、やはりこの男の仕業だったのだ。さっきは（おそらく、ゼムが死を目の前にした不安から）アムリタに父親らしく振舞ったため、彼女もゼムに父としての絆と一瞬の躊躇を感じた。おそらく、それこそがゼム・ロックとアムリタの間の最後の可能性だったのだろう。だがそれも結局はゼム自身の言葉があっけなく踏み潰してしまったのであっ

た。

全てはあるべきところにおさまる。アムリタは思った。近道をしようと遠回りをしようと、結局はそういう道理なのだろう。運命は、ルーレットではないのだ。たった一つの白星に止まるなんてことはない。止まるとすれば、それは、偶然に見えるようで実は止まらなくして止まったまでのこと。

「全てはあるべきところにおさまる」

アムリタは口に出して言った。

「母の心はリジョ・ヴァンシュタインの元にあるのです」

「そうだ」

ゼムが言った。

「……それをこの私が全てを奪い去ったのだ。しかし、本当の意味で私のものにはならなかった。それは理解している。理解しているが……」

ゼムはアムリタの背中に矢のような視線を向けた。その強烈な眼差しを、アムリタは直感で感じ取り、思わずギクリとする。

「しかし……それならどうしてお前が私のものにならない？」

ゼムはゆっくりと立ち上がり、アムリタの方へと歩を進めた。

「どうしてお前が……娘のお前が……父親の私を殺そうとするのだ？ どうしてヴァンシュタイン家を選択するのだ……！？」

ゼムは憎々しげな声で言った。ざらついた、悪魔のような声。

ゼムはとつくに気づいていたのだ。自分の命をアムリタが狙っていることを、それも恐らくあのネッコ・ヴァンシユタインと結託して。

「……」

しかし、アムリタは動じなかった。ゼムと同じく、また、アムリタも気づいていたのだ。ゼムが自分の魂胆ぐらい見通せぬ男ではないと。自分を四六時中支配してきた人間が、それぐらい気づかぬわけがない。あの時、修道院を出てからネッコに言った言葉も、彼を納得させるための口車に過ぎなかった。

ではなぜゼムはいままでアムリタを殺そうとしなかったのか？自分の手に噛みつこうとする飼い犬を、どうして処分しようとしなかったのか？アムリタは？どうしてアムリタはゼムに気づかれていながら、自分の計画を曲げることなく実行しようとしているのか？

簡単なことだった。

ゼムは、最後の瞬間にはアムリタが自分の方になびくと信じていたからである。一時の気の迷いだ、いつかは自分のしてやった恩に気が付くはず。彼は本気でそう信じていた。あるいはあの時、アムリタがネッコに言った言葉も、あながち間違いではなかったのだ。彼はアムリタを道具以上の、心ある存在とおもっていなかった。

そして、アムリタはそのゼムの心境を見抜いていた。最後の瞬間まで、ゼムは自分には手を出さないだろうと知っていたのだ。怖いのはその最後の瞬間だけだった。決してなびかないと

分かったゼムが、一体自分をどうするだろう？

……しかし今となつては、ゼムがこの状態ではそれも取り越し苦労に過ぎない。もはや、全
ての決着はついていたのだ。

体中の苦痛を堪え、じりじりとアムリタに迫り寄るゼム。

「忌々しい……」

ゼムが言った。

「ヴァンシュタイン家の連中は……何代に渡つて私から全てを奪い去れば気が済むのだ……」

……！

アムリタがぐるりと振り返ると、もう目の前にまでゼムは迫つていた。アムリタはギクリとした。そして、脅えた。もはや赤ん坊程度の力ももたないであろうこの男に、彼女は生まれて初めてと言つても良いほどの底なしの恐怖を感じた。

それは、ゼムの目だった。ゼムの全てを憎んだ目。自分の娘も、妻も、その血縁者も、自分をとりまくありとあらゆる命をもつたものを、また、もたないものまでをも憎んでしまった人ならぬ目。人として堕ち尽した狂人の目。無力なこの男に対してではなく、その悪魔の目に、アムリタは恐怖したのだ。

両手でアムリタの両頬をはさみ、その恐怖に歪んだ顔を覗き込むゼム。アムリタの奥歯ががちがちと打ち鳴らされ、瞼には涙が滲む。

「臆病者のお前に私は殺せん。殺せるはずがない」

ゼムは言った。

「しかし、その臆病者のお前を焚きつけたバカがいる。ネッコ・ヴァンシュタイン。いまとなつては奴こそが私の新たな障害だったのだ……貴様は奴と出会い、新しい人生を見つけてしまった」

「ち、違う……」

アマリタが震える声で言った。

「自分の新しい可能性に気づいてしまったんだ」

「違うわ……!」

「レールの敷かれた行き止まりの運命にひよっこりと救済が現れて、愚かなお前は涎を垂らしてそれに飛びつき、すがった」

「違う!私は、母の復讐に、あなたを……」

「復讐ではない。お前は私を生贄にしようとしているのだよ」

はっとするアマリタ。

「私を切り捨て、新しい人生に逃げだそうとしているのだ。お前がそれを認めようとしなひは運命に後ろ髪を引かれるのが怖いからだ!お前の短い寿命では、新しい人生など歩めるはずもないからな。だからお前は運命を正視し、全てを諦めようとした。だが、諦めきれなかつた!新たな人生はお前にとって、あまりに甘美すぎたからだ!」

「はっ……!」

アムリタの頬に涙が伝う。

「お前は自分を偽っているのだ！運命を認めて全てを諦め振りをして、諦めきれず、かといって新しい希望にもすがりきれず、ただ自暴自棄に一つの目的しか見ていない！復讐というもつともらしい義を振りかざして！」

「……っ！」

「くくく……はっはっは！残念だったな！いまとなつてはその運命の枷こそが、悪魔の瞳の本当の価値だったようだ。迷える子羊！お前はしよせん、牧場の中の迷える子羊だ！家畜なのだよ！身の程を知れい！」

アムリタはがっくりとうな垂れると、膝を付き、自分の腹を抱えてうずくまった。それを冷徹に見下ろすゼム・ロック。

「貴様の王子様はまだか？くく……ネッコ・ヴァンシュタイン！私が細切れにして、いつそ全ての望みを断ち切つてやる！こい！私の障害となる全てのものは、骨一本この世に残しておかぬ！ネッコ・ヴァンシュタイン、リジヨ、ルドヴィヒ、全員だ！それまでは私は死なない、死ぬるものか！」

大声が岬に木霊した。

「そんなに死にたくないのか」

若い、野太い男の声。森の奥に、木の陰というにはあまりにどす黒い闇の瘴気が漂っている。そのとてつもなく禍々しく強いオーラに、ゼムは身構えた。

「……なにものだ？」

闇からつかつかと歩いてくる。男には左腕が無かった。しかし、鍛えぬかれた筋肉が、まるで血に飢えた獣のような臭気を発している。只者ではない。ゼムは一目でこの男が生まれつきの戦闘家であることがわかった。自分の足元でうずくまるアムリタをちらりと見て、すぐに男に視線を戻し、ゼムは自分の杖を構えた。

「まあ、そう殺気立つなって」

男が言った。

「お前がゼム・ロックだな？」

「……」

ゼムはじつと男を睨みつける。

「率直に言う。取引をしよう。俺の左腕をこいつと付け替えてくれ」

そう言って、どこからかちぎってきた太い腕を（恐らく部下のものだろう）目の前に放り投げた。無造作に転がり、ゼムの足元でとまる。

「引き換えにお前とお前の娘の命を与える。どうだ？ 悪くない話だと思うが？」

うずくまるアムリタの肩がびくついた。

「……どういふことだ？」

「お前たちは悪魔の瘴気に体を侵され、そして死んでいくのだろうか？ だったら簡単な話だ。お前達自身が悪魔になればいい」

男が笑みを浮かべる。

「俺は使徒ヴァジュラ。お前達二人を我が同士に迎えよう、というのだ」

「……ほう。たしかに悪く無い話だ」

ゼムが言った。

そのとき、ずつとうずくまっていたアムリタがふらふらと立ち上がった。

「この期に及んで……」

アムリタがか細い声で呟く。ゼムとヴァジュラは彼女の言葉に耳を済ませた。

「この期に及んで、まだ人間性をかなぐり捨てるといふの？あなたは……」

「……」

「そんな人生に……いったいどれだけの価値があるというの!？」

「お嬢ちゃん」

ヴァジュラがアムリタを睨みつける。

「そんな風に思うのは人間の間だけだ。ちっほけな、クヨクヨとした下らない感情だぜ」

「だからこそ私は人間でいたいんだよ」

「そうかい。だったら勝手に死にな」

「ええ、死ぬわ。それが私の定めだもの。ただ、ゼム・ロックを生かしたまま死ぬわけにはい

かない」

「ほう。それで？」

「だからあなたにも死んでもらうしかないわね」

「お嬢ちゃんにできるかな？」

「やるわ」

アマリタは顔を上げ、きつとヴァジュラを睨みつける。ゾクリと彼の背筋に寒気が走った。殺気だと？ヴァジュラは思った。こんな年端もいかない人間の娘から、本当の殺気が！この娘は紛れも無く、純粹に自分を殺そうとしている。魔王の第一の僕である、十三人の使徒の一人であると知って、俺を殺そうとしている。身を焼き肉を削ぎ、はらわたを引きずりだそうとしている。この娘は、本気でそれができると思っている！

「はっはっは！面白い奴だな」

ヴァジュラの体から殺戮の鬨気が沸き立ち、ぶすぶすと空気を焦がす。無抵抗な人間なら、その圧力だけで精神を押し潰され、立つ事もできなかったに違いない。しかし、アマリタが気にするのは、さっさとこの使徒を倒してしまうこと。それだけだった。

それが例え相討ちでも構わない。あとはきつとネツコがやってくれる。

ゼムは、二人のやり取りをじつと見つめていた。バカな娘だ。なんとという失敗作だ。相手は使徒。たった一人の人間がかなう相手では無い。この娘は一見冷静なようで、すぐにムキになるのだ。鉄の仮面の奥に潜む激情、凄まじいまでの自尊心。自分の目的のためには妥協というものを知らない。止まれば、負ければ、やめれば、そこで全ては終わり。遠回りだろうがなんだろうが、目標地点に向かって進むことしかこの娘は知らないのだ。

……誰かに似たのだな。ゼムはそう思った。
睨みあう両者。潮風が木の葉を巻き上げる。遠い波の音。

「ヌフン、あーあー、静粛に」

偉そうで、どこか間の抜けた声に、ネッコは目を覚ました。

そこは、どこかの広間だった。造りはミルチア風でもあるし、ペルセン風でもある。しかし、厳密にはどちらとも言えない独特の設計だった。ネッコは巨大な銀の円卓の前に座っていた。

向こうの端まで10mはあるだろうか？とにかく馬鹿デカイ円卓だ。そして、円卓を囲むように七匹の生き物が座っていた。どれも見たことも無いような生き物だ。

(なんだ……?)

「それではこれより、議会を開廷する！」

さっきと同じ声。声の主は、ネッコと対極の場所に座る、たまごのような生き物。楕円球の体に、落書きのような顔がついている。ついでに、ヒモのような手足が伸びている。ネッコは思わず吹き出しそうになったが、状況がよく分からないので我慢してみた。

「こ、ここは？」

ネッコは訪ねた。

「議会って、なんの議会だ？」

「おぬしの魔法の使用許可を出すか出さぬかの議会じゃよ」

ネッコから右に二匹目の生き物が言った。フードを被り、白いひげをちょこんと生やしたへびだ。

「魔法？」

「あなたがサンダルークの怒りの書で習得しようとしていた、例のモディファイド・ベアです」

そのもう一匹向こうの生き物が言った。光の塊のような姿をしていて、輪郭もおぼろげである。まるで人魂のようだった。

「ヌフン。これは精霊会の特設魔法議会である。この議会は、ネッコ・ヴァンシユタイン。君の人生を大きく変えることだろう」

たまご型の生き物（おそらくこの議長だろうか？）が言った。

ついに気が狂ってしまったのかもしれない。僕は自分の夢想の中にいるのかもしれない。

ネッコはそう思いつつも、こんな生き物に自分の人生を左右させられるのは、嫌な気がした。

「えー、それでは改めて議会を開廷する！」

——精霊会による魔法議会。

そこは、どこに存在するというものでは無く、世界の火や水、土、台所の鍋、石像、墓地、森、海、沼、山といったありとあらゆる場所に内在する精霊たちが、ネッコという人間の意識を中心に互いにリンクして初めて成り立つ仮想の空間。各々が舞台であり、演技者であり、鑑賞者であり、管理者であり……細い蜘蛛の糸が紡がれて巣となるように、ネッコや精霊たちの意識が一本一本の細い糸であり、一つの蜘蛛の巣なのだ。

「分かんないな」

ネッコは生き物たちを眺めながら言った。

「僕の魔法許可を出すとか出さないとか、どうしてそんなことを……お前達みたいなぬいぐるみになんの権限があって……」

ばんばん、とトンカチで机を叩き、議長らしきたまごが叫んだ。

「ネッコ・ヴァンシユタイン、口をつつしみたまえ！」

口々に何かを囁き合うぬいぐるみ達。

ネッコは自分があまり良い立場に無いことぐらいしか分からなかった。ぬいぐるみという言葉葉がいけなかったのだろうか？ぬいぐるみをぬいぐるみと言っただけが悪いんだ、とネッコは思った。

「静粛に！」

ばんばん、と、またたまごがトンカチを打ち鳴らす。

「いいですかネッコ君！？」

たまごが大声を張り上げて叫んだ。

「私たちは魔法を司る精霊！君の態度一つで、今回の魔法の使用許可は見送りになるのだぞ！」

「魔法って、モディファイド・ベアのの？」

「そうだ」

「お前達が魔法の精霊？本当に？」

「我々を疑うのかね、君は！？」

ネッコはそれ以上口答えせず、黙って腕を組んだ。たまごの言う事が本当なら、黙って成り行きを見守る方が賢いだろう。ここまで苦労したのだ。レベル5の魔法、使えるものなら是非とも使ってみよう。

「ふう……」

たまごは議會を一瞥すると、言葉が続けた。

「ではよろしいかな。これより議會を開廷す……」

「反対だすよお、おりはあああ！」

ネッコの左隣のカメレオン風の生き物が突然席を立ち、きちがいのように叫んだ。予想もしない急な剣幕に、その場に居合わせた全員の視線があつまる。

「……どうした、フレデリック君。反対って……議會の開廷がかね？」

「いや、違うだす。魔法使用許可をやるべきではない、ということだす」

「ああ……」

「……」

大丈夫なのかこいつらは。

と、ネッコは思った。

「ん……では、まず反対論者から。フレデリック四等精霊、どうぞ続けて」

「はい、続けるだす」

フレデリックと呼ばれたカメレオンがネッコの方を見た。ただのカメレオンには似つかわしくない名前だ。

「まず、今回の使用者は明らかに力不足だす。この魔法の前使用者であるサンダルクの力が百だとすれば、このネッコ・ヴァンシユタインの力はせいぜい二十程度だす！」

ネッコはむっとした。

「七十はあるだろう」

ネッコの反論に、カメレオンの隣に座る石像の乙女が笑った。石の肌石のドレスを着飾っているが、動きはスムーズで実に生き物らしい。やはり石像に宿る精霊なのだろうか？

「ほほほほ。自惚れやさん。あなたのお爺さんでせいぜい五十ですわよ」

「なに、僕の祖父さんをバカにするのか？」

「事実を申したまでですわ」

「ま、せいぜい三十だすな。これ以上は譲れないだす」

カメレオンと石像の乙女が声を揃えて笑った。

「そんなはずないお！ネッコちゃんはもつと強いお！」

ネッコのすぐ右隣に座る、毛虫のような精霊が言った。どうやらこの議会は自分に対する反対者ばかりではないらしい。ネッコは少し安心した。

「僕がいちばんネッコちゃんの活躍を知ってるんだお！」

「それはあなたが五等精霊だからです。下界の見回りご苦労様、ドン・フリーキー。でもね、あまり大きな口を利くものではありませんよ。ここにいるもの達はあなたを除いてみな四等精霊かそれ以上。あなたは所詮五等精霊。本来、こうして席をとにもするのですら光栄なことなことです。立場を弁えなさいな。ほほほほ」

石像の乙女の言葉に、ドン・フリーキーは悔しそうな顔をした。いや、正確にそうなのかはよくわからないが、多分悔しい顔なのだろう。

ネッコは思った。

(精霊にも身分があるのか……どこに違いがあるのだろうか？やはり、個別の能力や生まれの違いかな……いや、そもそも精霊ってどうやって生まれるんだ？)

ばんばん、とたまごがトンカチを鳴らした。

「フランソワ四等精霊！この議会に上下身分は関係ない。賛成者、反対者をそれぞれ数だけ、無作為に精霊会から選抜しているのだ。発言は平等なものとして扱われる！」

「ほほ。ええ、分かっておりますわよ、エッグマン三等精霊殿」

「……さあ、反対論者。続けて！」

「反対にはまだ理由があるだす」

例のカメレオンが言葉が続けた。

「レベル5の魔法と言うのは、そうやすやすと人間の使用を許していいものではないです。みなさんそれをお忘れじゃないですか？一体、何のために前、前、前人類が魔法を五段階にわけ、その危険性を定めたのかわかったもんじゃありません。こうしてポンポン許可していたら、いつまた第二の魔王モート誕生させることになるか……」

「前、前、前人類？」

ネッコが訪ねた。

「前、前、前人類ってなんだ？」

「ほほほほほ。お馬鹿さん。言葉の通りですわ。あなたの、前の、前の、前の、前の人類。あなたは

アトラースの……たしか四番目の人類ですよ」

フランソワの言葉にぎくつとするエッグマン議長。

「なに？さて、そんな話僕はしらないぞ。聞いたことも無い。僕達の前に人類があったただなんて……」

「リセットじじいが必要なもの以外全部消しちゃうんだお。だから前人類の情報は何も残らないお」

ドン・フリーキーが言った。

「リセット……なに……？」

「こ、こら、こらこらこらこらこら！」

ばんばんばんばんトンカチを連発するエッグマン。

「そういうのは生身の人間には絶対厳禁！軽々しく口にしない！」

「ちよ、ちよっと待ってくれ」

ネッコが言うのと、全員の視線が彼の方に集まる。

「なんか、人類の存亡に関わるような重要なこと聞かされたような気がするんだけど……」

ネッコの言葉に、しいーん、と静まり返る議会。

「……気をつけるだす、ネッコ・ヴァンシユタイン」

カメレオンが声のトーンを落として言った。

「知りすぎは体に毒だすよ」

カメレオンがそう言うのと、誰もなにも喋らなかつた。

ヒゲを生やしたヘビが咳払いをした。どこか別の場所から、わざとらしく鼻を嚼る音も聞こえる。あるものは姿勢を正し、あるものは微動だりしない。まるで氷河期のような沈黙にネッコは戸惑った。やはり、さっきの会話はただごとではないらしい。

「……その……」

ネッコが言う。

「お前たちの言う、リセットじじい、つてのは……」

「おりの意見はそれだけです。とにかく、レベル5はもっと嚴重に取り締まるべきです」

カメレオンが言うのと、反対組（どうも、反対組みがネッコの左側、賛成組が右側に座っているらしい）が一斉に頷いた。

ぱちぱちとまばらな拍手が議場に響く。

（……流された）

と、ネッコは思った。

「うむ。ご苦労、フレデリック君。では、次の人」

「ほほ。反対派の意見は概ねフレデリックの言った通りですわ」

「では賛成派の意見を聞こう」

「僕が賛成派を代表して意見を言うお。構いませんか？ミズチ四等精霊、ウィル・オ・ウイス
プ四等精霊」

「構わんよ」

「お任せします、ドン・フリーキー」

同じ賛同席に座るヒゲのヘビと人魂が言った。おほん、と咳払いをするドン・フリーキー。

「まず、実力の面から言ってネッコちゃんは十分資格を満たしていると言えるんだお。多少ムラがあるけど、魔力の瞬発力は間違いなく現存する人間界トップクラスだし、なにより頑張りやさんだお！」

「ほほほほほ。頑張っただけでレベル5の魔法が使えるなら、誰も苦労しませんわ」
ばんばん、とトンカチの音。

「意見があるなら手を上げてから言いたまえフランソワ君」

「はい、わかっております議長。ほほほ」

「……それに、ネッコちゃんはきちっとした精神の持ち主だお。サンダルクのいた時代にも強力な魔法使いはたくさんおったけど、みんな邪な精神に取り付かれていたから、だから賢者サンダルクの境地に辿り着く前に死んでいったお！怒りの書っていうのは、サンダルクが残した善き魂と悪しき魂を振り分ける装置みたいなもの。その篩にかけられてもネッコちゃんはこうして生き延びたお！」

「いや、死にかけてたですよ」

「ぎりぎりのところで踏ん張ったお！」

「ほほほ。ここに召喚しなければ死んでましたわ」

「生き延びたお！」

必死に自分を庇ってくれるドン・フリーキーには悪いとは思ったものの、正直なところ、ネッコはあまり自分が生き延びていた自信はなかった。自分が善き魂の持ち主とも思えない。なにせ地上最低の自己嫌悪の三日間だったのだから。

ばんばん、とトンカチの音。

「静粛に！ 証明しようのないことでの水掛け論は時間の無駄である。次！」

そのとき、反対席側で一匹の精霊が拳手しているのが見えた。いや、一人と言うべきだろうか。その精霊はいままでずっと押し黙っていたのだが、ネッコは彼の存在を一番気にしていた。というのも、その精霊は、紛れも無く人間の姿をしていたし、強烈な、それでいてどこか親しみ深いオーラを漂よわせていたからである。老人姿で、ひたすら厳しい顔つきだった。

「うむ。それではサンダルク四等精霊。発言を許可する」

「はい」

「さ、ささ、さささサンダルク！？」

ネッコが慌てて立ち上がる。

「騒々しいぞ、ネッコ・ヴァンシユタイン君！」

議長がネッコを叱る。

「で、でも、サンダルクって……」

「ほほほ。つまらないことで一々驚いて……これだから下界のものは」

フランソワが不愉快そうに言った。

「サンダルク君はその功績が認められて、死後、精霊会魔法部に特別招待されたですよ」

「せ、精霊になったのか……人間が……？」

「まあ、そういうことだす」

ネッコはサンダルクの方をみた。心臓の高鳴りが止まらない。これが本当に本物のサンダルクなのか……？それとも、この体験自体がやはり単なる自分の夢なのだろうか？

「発言よろしいかね」

サンダルクが言った。ざらつき、鋭さのある、それでいて上品な声。ネッコはいままでこんな声を聞いたことがなかった。自分の知らない言語だったら、人間の声だと気づかなかったかもしれない。

「ネッコ・ヴァンシュタイン氏の実力が現存する魔法使いの中でもトップクラスというのは認める。それどころか、史上を辿ってもこれほどの素質はそうおるまい。しかし……これは実力云々の問題ではない」

サンダルクはどこかうつろな瞳で議会を見回す。

「そ、それでは一体なにが問題なのです？」

ネッコが訪ねる。サンダルクは彼の方を見た。

「レベル5というの、なにも無い空間に何かを産みだす業。次元をすりかえる業。時間に関わる業。生命の生滅に関わる業。世界のシステムに触れる業。あの魔王モートが人外へと姿を

変えた進化の業。即ち、神の領域の力なのだ」

サンダルクが続ける。

「ネッコ君、さっきも言ったとおり、君が魔法使いとして至らないから我々は反対しているわけではない。ここに立っているのが君でなくても、例えば偉大なる君のお爺様であろうと、俺は反対しただろう。俺は、レベル5魔法という存在が、この世にあってはならないものだと思っっている。正常な神経の持ち主がああ力を使ったなら、誰だってそう思うはずだよ」

「貴公の申すことも一理あるが……しかしサンダルクよ。毒をもたねば、毒を制することはできません」

賛成派のミズチが言った。

「魔王だけではない。使徒の中にだってレベル5の魔法を操る者もおる。そんな連中を相手にできる、正しい心をもった人間が一人はおらんことには……やはり世界は上手く回らんのだよ。賢者サンダルク。あの時代のおぬしのような人間がおらんことにはな」

「……」

サンダルクは俯いたまま、じっと黙っていた。

「だったら、魔王や使徒にレベル5魔法を許可しなきゃいいだろう。お前達は魔法を司る精霊なんだろう？」

「魔王モートは異常なのだよ。世界のルールを無視する、破格の魔力を持っていた。一体どういう原理であれがこの世に生まれたのか……我々にも想像はつかん。恐らく、宇宙的な偶然の

悪戯じやろう」

ネッコの言葉にミズチが答える。

「世界のルールを無視する破格の魔力……」

その言葉に潜む超人間的な響きに、ネッコは思わずぞくぞくしてしまった。ふいにウイル・オ・ウイスプがチカチカと明滅する。

「なにかねウイル・オ・ウイスプ」

「議長、私の意見を申し上げましょう」

ウイスプはみんなの目につくように少し上昇した。

「ネッコさんはいまでも大変な状況です。彼の妹がとてもピンチなのです。妹の父親……つまり、禁術師ゼム・ロックの元に一匹の悪しき心と巨大な力を持った者が迫っているのです」

「アムリタが!? 悪しき力って……いったい誰が!？」

ネッコが勢い良く立ち上がる。ばんばんと議長がトンカチを打ち鳴らす。

「使徒・ヴァジュラです」

ざわめく議会。

「ほほほほ。ヴァジュラですって」

「そら大変だす」

ばんばん、とトンカチ。ウイスプが言葉が続けた。

「ヴァジュラは失った片腕をゼムに再生させようと、はるばる魔界くんだり訪ねてきました。

そして、ネッコさんの妹アムリタさんが彼を拒絶します。アムリタさんはとてもピンチです。そこで……これは久々の魔法精霊議会です。人間をここにお迎えしたのは数百年ぶりです。

（サンダルークさんは議会を開いて彼を召喚せずともほとんど満場一致で使用許可落ちましたものね）そのお土産といっちはなんですが、ネッコさんに魔法モディファイド・ベアの使用許可を一回だけ与えてあげるといっちはどうでしょう」

ウィル・オ・ウィスプが言うと、ドン・フリーキーはうんうん、と頷いた。難しい顔をする反対席。

「うーん、まあ、おりはそれなら……女の子をみすみす死なすのもかわいそうだし」

と、カメレオンが言った。精霊会は精霊個人の意見が重視されるため、人情的な判断から下される議決も多い。

「ほほほほ。フレデリック四等精霊は相変わらず女の子に甘いのですから……冗談じゃありませんわ。おまけの一回って……くじ引きじゃないんですよ」

「フランソワさん。では、リセットじじいの件について、絶対に喋らないという約束付きでは？」

ウィプスが言うと、フランソワを始め、議会の精霊たちが一斉に気まずそうな顔をした。「ん、教えてくれるのか？」

ネッコが訪ねる。

「い、いいえ！これ以上教えられるわけありませんわ！ほほ！いまでも十分知りすぎ注意です

わのよ！ほほほほ！ごほ、ごほん。わかりました。それでは、もし下界でリセットじじいについて公言すれば、即・爆死という契約でモディファイド・ベアの使用許可を許しましょう」「フランソワ君！君に決定権があるわけではない！」

議長が怒鳴る。

「……ふうむ。サンダルク君。君はどう思うね。同じ人間として」

サンダルクは口元に手をあてがって、黙って宙を眺めていた。議会にいた全員の視線が、賢者の方へ集まる。

（……俺はやはり、反対だ。一回、たった一回の使用が、世界の黄金律を少しずつ狂わせ、いつか決定的な事故を起こすことになる。あのモートのような重大事故を……！しかし……もし……仮にそれが新たな開拓のきっかけとなるなら、あるいは価値のあることなのかもしれない。世界の規律を破って人間が自由になる日がくるのだ。だが……問題は世界のことだけではない）

サンダルクはちらりとネツコの方を見た。ネツコはどきつとする。

（そう。これは、一人の人間の人生がかかっている。間違え、障害、失敗。それらが次の一步を踏み出させることを、俺は知っている。俺はいつだって、自分の力でそんな壁や圧力をぶち破ってきた。その度に強くなれた……だが、それがなんだというのだ？力を得たところで、目的の無い力は更なる脅威と己の破滅しか導かない……一回、か。その一回が、たった一回の無尽蔵な力というものが、この少年の心に一体どう影響を及ぼすか。この少年の未来をどう変え

ていくのか……賭けるのか？この少年が聡明な人間であることに……」

「どうだね、サングルーク君」

議長の問いかけに、サングルークは静かに頷いた。

「……一度だけなら」

「あ、ありがとうございます！」

ネッコは立ち上がり、サングルークに向かって言った。

「少年、気をつけたまえ」

サングルークは彼の方を見ずにいった。ネッコは思わずぎくりとする。

「……知りすぎは、体に毒だ」

「それおりの名言です！」

カメレオンがいきり立つ。

「毒を毒と知れ。自分に与えられただけのものでやってみるのも、あるいは素晴らしいことなのだよ」

「で、でも僕は本当に懂れてるし、あなたのような生き方をしてみたいんです」

「俺のような？」

「あなたのような、あらゆる困難を魔法で解決していくような……」

「やめておくがいい」

サングルークは言った。

「孤独で、際限の無い、ひどく疲れる生き方だ」

疲れるだって!? ネットコは思った。正反對だ! あなたの言う自分に与えられただけの世界の方が、よっぽど窮屈で、疲れる!

「では、ネットコ・マズルカ・ヴァンシユタインに、リセットじじいの件を公言したらば即爆死の条件付で、一度だけのモディファイド・ベアの使用許可を発効する。使用時間は三分間! よろしいね」

ばちばちばち、というまばらな拍手。なんとなくネットコは照れくさかった。

(三分か……随分と短いもんだ)

「それではネットコ君、これが君のモディファイド・ベアの媒体だ」
ぽとり、とテーブルに何かが落ちてきた。

「ん、これは……」

ネットコはテーブルに落ちてきたものを手にとり、じっくりと眺めてみた。しかし、それは紛れも無く、彼の母マリア・ヴァンシユタインが作成した、例の「クマネコ王子」であった。

「これが……こんなものが媒体!？」

「モディファイド・ベアとは人の気持ちを実物に具現化するタイプの魔法。いわゆるところの召喚魔法の一種だ。適切な媒体があればその効果は倍化する」

「で、でもこんなものが本当に……」

「君にとってこれ以上の媒体はありませんよ。質問は以上か? 我々も忙しいのだ。魔法の気流

の管理とか……とにかくいろいろな。君も妹がピンチなのだろう？」

「そうだ！アムリタを助けなきゃ……」

「うむ。武運を祈るぞネッコ君。さて、議定書の作成はフランソワ君に一任しよう」

「ほほほほ……え？」

「リセットじじいの件の罰だ。上等精霊に報告してもよいのだぞ！」

「ほほ……わ、分かりましたわ。ちっ」

そして、ぞろぞろと議会から退出していく精霊たち。

「さ、サンダルーク！」

ネッコはサンダルークに向かって叫んだ。彼はすでにドアをくぐって、部屋を出て行く直前だった。

彼は、ピタリ、と動きを止めてネッコの方を見る。

「あの……」

「……」

ネッコはなにかを言おうとしたが、なにもでてこない。目の前に自分にとっての神がいるのだ。どんな言葉をかければいいのか、彼には到底思いつかなかった。

「ま、またお会いできますか？」

サンダルークは口の端を緩めて、そのまま退出していった。ネッコはしばらくその場で立ち尽くしていたが、やがてアムリタのことを思い出し、慌てて自分の後ろのドアに手をかけた。

相手が本当に使徒なら……あのラウドやボールスのような実力の持ち主なら、人一人ではあまりに危険すぎる！

無事でいてくれ……そんなネッコの強い願いは、不安と言う陰りに覆われ始め、彼を戦いの場へと駆り立てた。

——サタ岬。

アムリタが薙ぎ払った腕から、三発の電撃弾が飛び出し、弓なりにヴァジュラに向かって突き進んだ。命中とともに激しい稲光が闇を切り裂く。

帯電する焦げ臭い空気の中から、無傷のヴァジュラが、悠然と、余裕をもった足取りでアムリタに近づいていく。

「雷は通じず」

距離を取りながら、今度は氷のつららを放つアムリタ。これも命中。しかし、ヴァジュラの肉体にはなんのダメージも与えていなかった。

「氷は皮一枚破けない」

そのとき、歩を進めるヴァジュラの足元で「カチッ」という音がした。不思議に思ったヴァジュラが何気なく足元を見た瞬間、地面から凄まじい爆発が巻き起こり、彼を飲み込んだ。距離を取ると見せかけて、アムリタが仕込んでいた魔法の罠である。

しかし、爆炎の中から、まるで日向道でも散歩しているかのようにヴァジュラは姿を見せた。炎を全身に纏って顔中に湛える残酷な笑みは、まさに悪魔そのものであった。

「燃え盛る炎ですら俺の身を焼くことはできない」

やはり距離をとるアムリタ。相手は近接戦闘型。魔法使いの自分が相手に勝っているのは、なんとと言ってもリーチの長さなのだから。おまけに、相手は究極と言って差し支えないほどの腕力の持ち主。向こうの攻撃範囲内に入るとは即死を意味する。

「確かに魔法は嫌いだ。俺は攻守ともに魔力などというものを捨てさって、ただ己の肉体のみを鍛えることだけに生を費やしてきたから」

なにを思ったのか、突然、傍にある岩を叩き割るヴァジュラ。岩はまるでビスケットのように粉々に砕けた。その中から手ごろな石を一つ拾い上げる。

「だけどなあ、肉体もある次元にまで鍛え上げることができれば、魔法だって通用しない。わかるか？ 魔力に対しての抵抗が低かろうが、肉体が決して壊れないのだから、炎だろうが氷だろうが雷だろうが念力だろうがなんだろうが通用するわけがないんだよ。全ては物理的な問題だ！」

ヴァジュラは大きく振りかぶると、片手に握った石をアムリタ目掛けて投げつけた。圧倒的な速度と球威。空気を切り裂く音が耳をつんざき、真っ直ぐアムリタに向かって突き進む。と、言っても、人間の感覚で「突き進んでくる」と感じた頃には、とつとつに命中していることだろう。アムリタがこの石を避けられたのは単なる幸運だった。ヴァジュラが大げさな振りか

ぶりを見せたから、彼女はそれにタイミングをあわせて身を翻しただけのこと。もし向こうがその気になれば、ほとんどノーモーションで投げられただろう。

石が額をかすめていたのか、アムリタの額から一筋の糸のような血が流れてくる。さすがの彼女もこれにはぞっとした。彼女はきつとヴァジュラを睨んで、ポケットからハンカチを取り出し、頬を伝う血を拭った。

「へっ……」

相手の気丈な態度を、ヴァジュラは愉快に思った。もうひとつ石を拾う。

「お前達はもろい。もろすぎる。こんな焦げたパンカスみたいなものが命中しただけで……」
今度の投擲は早かった。おまけに球威も上がっている。

アムリタはほとんど反射的に魔法を唱え、大地を盛り上げて盾にした。盛り上がった土の壁に石の弾丸が命中し、その部分だけぽっかりとへこむ。もう少し壁が薄ければ突き抜けていたことだろう。

「即死しちゃうんだからなあ……」

このままでは不利だ。そう感じたアムリタは、すぐ近くの海水を利用して魔法の霧を張った。すると、辺りはまたたくまに白い闇に覆われて、視界は閉ざされ、お互いの位置が分からなくなった。

(霧……？やれやれ、浅はかなもんだ)

ヴァジュラは目を細め、神経を集中し、立ち込める魔力の渦を探した。ゼムのいた方向で、

ゆらゆらと黒い魔力が揺れている。その揺らめきはどこか力なく薄れていた。

（こっちの黒い魔力の影がゼム・ロックだとして……）

紫色の魔力の渦が、徐々に遠ざかっていくのが見えた。

（こっちが娘か！ふん、愚か者め。あれだけ挑戦的な態度をとっておきながら、いまさら尻尾を巻いて逃げるだなど……）

ヴァジュラは石を一つ手探りで拾い上げ、握り締めると、紫の魔力の渦を睨みつけた。

「お嬢さんよ！貴様が久々の好敵手になりうるかと思っただけ、どうやら俺の勘違いだったみたいだなあ？ふん、年甲斐も無く興奮したものよ。俺は弱者に用はない、さっさとくたばっちまい……」

突如、ヴァジュラの頬にひんやりとした感触……人の掌の感触。

「う！？」

ヴァジュラはギクリとした。同時に、自分が畏にはめられたことを理解する。

（しまった！あっちの魔力の渦はダミーで……）

ヴァジュラが身を翻す前に、顔面を強烈な爆発が襲った。先ほど逃げながら撃っていた魔法の数々とはケタ違いの破壊力。爆風が顔中の穴から噴出し、目玉や鼓膜が吹っ飛びそうになる。

ヴァジュラは薄れいく意識の中で考えた。相手（アムリタ）は、自分にこの一発を食らわせるために、このヴァジュラの心に慢心と油断を呼びこむために、わざと力をセーブしていたのだ！しかし驚いたのは、近距離戦闘の鬼と言われたこの俺の懐に忍び込むあの度胸！頭で分

かっけていても普通はできまい……やはり、この相手は只者ではない……！！

さっと晴れ上がる霧。爆音が気になったゼムは思わず立ち上がり、二人の方を見た。顔を抑え、まるで虫けらのようにのた打ち回るヴァジュラと、それを冷ややかに見下ろすアムリタ。アムリタがおとりとして使ったのは、魔力を湛えたただの火の玉だった。それはゆらゆらと森の方へ向かって漂っていくと、ある地点で力なくポトリとおっこちて、消えた。

ゼムはぞつとした。自分の中に感じる、妙な高揚感。

(……この娘は……私のなんだというのだ……?)

「があ……ぐっ……ゲホ、ゲホオ……！！」

どれだけ頑丈な皮膚をもつていても、その内部は鍛えようが無い。目、鼻、口、耳と言った、頭部の穴から強烈な魔法の爆炎を叩き込まれたのだから、いかにヴァジュラ、使徒と言えども、無事ではすまなかった。重要な器官をいくつも損傷した。激しい耳鳴り、焼け付く目、鼻腔、喉。上手く息が吸えないのは、肺もやられたからだろう。

悪魔のような微笑でアムリタが相手を見下ろす。

「圧倒的すぎるから弱いよ、あなたは」

アムリタの言葉など聞こえない。ヴァジュラはただ、苦痛から逃れようと、顔を抑え、ジタバタともがきつづけた。

使徒と人間の一对一の勝負。狼と羊の如く歴然とした実力差、アムリタはむしろそれを利用したのであった。特にヴァジュラのような自分に絶対の自信を持つ相手にはそれがやり易かつ

た。実際に絶対的な力を持っているからこそ、自分の欠点には気づかない。自らの翼で高く飛べることを万能だと勘違いしたイカロスが、太陽に焼かれ海に落ちたのと同じように、有能な相手ほど簡単に自分を見失ってくれるのだった。

その時、森の方から足音がした。ゼムがそれに気が付く。

足音の主は、ようやく決闘の場に現れたネッコ・ヴァンシュタインだった。彼の片手には例の熊の人形が握られていた。

「ど、どういうことなんだ、これは……?」

驚くのも無理は無い。状況によってはアムリタの死すら覚悟していた彼の視界の先に、彼女が使徒を圧倒している様子が映っているのだから。傍には力なく横たわるゼム・ロックの姿。

ネッコは思った。まさか、アムリタはたった一人で使徒と戦っているのだろうか?なんて無茶なことをしているのだろう!

「ネッコ・ヴァンシュタイン……」

恨みを込めた声でゼムが呟いた。ネッコはちらりとそちらを見る。

「ヴァジュラを……あの娘に殺させるな」

「……なに?」

「ヴァジュラがいる限り、あの娘の命は救われる」

ゼムの言葉に、ネッコの心臓が激しく脈打つ。

「分かるか？あの娘自身が魔族になれば、命が失われることもないのだ。ヴァジュラがいればその手引きをしてくれる。貴様はあれを助けたいのだろうか？」

「な、なにを……」

「……」

ゼムの言葉に躊躇したネッコだが、睡を飲み込み、表情を引き締めた。

「……か、勝手なことを……！アムリタに悪魔の瞳を植え込んだのはお前だろうに！」

「……」

「なんで今更そんなことを言うんだ！狂人め、お前は実の娘に毒を盛ったんだぞ！？それも、自分の身勝手な復讐のために……あの瞳がいったい何の役にたったって言うんだよ！？」

「だが、そういう事象の全てが重なりあつてあの娘ができた」

「なにっ!？」

「あれがなにか分かるか？」

「お前の……娘じゃないか」

「作品だよ。私の魔法人生における、最高のな」

「なっ……」

ネッコははっとした。

（そうか。こいつも……この男も哀れな創作者なんだ。僕やアルフォンソ、父さんなんかと同じく、なにかを作らなきゃ生きていけない病人なんだ。空想のパンでしか腹を満たせない人間

なんだ！自分より優れた魔法使いである祖父さんが許せないわけなんだ……だけど、だからといって許されるようなことは一つも無い！」

ネッコは地面に横たわるゼム・ロックを、思い切り蹴飛ばしてやりたい衝動に駆られた。が、彼の哀れな姿を見るうちにすぐにその気持ちは失せた。むしろ気になったのは、ゼムの先ほどの、アムリタが助かる、という言葉だ。

「……アムリタはそのことを……自分の命が助かるかもしれないってことを……」

「ああ。知った上でヴァジュラを倒そうとしている。本当に愚かな娘だ……どうしようもなく愚かな、恩知らずの裏切り者。しかし、それでもあやつが使徒ヴァジュラを圧倒する姿は、私に無気味な恍惚感を与えてくれる！見る、ヴァンシユタインよ！あれを作り上げたのは私だ。

このゼム・ロックなのだよ……！」

ネッコはアムリタの方を見た。彼女の足元で、生まれたての子馬のように、よろよろとよろめきながら立ち上がろうとするヴァジュラ。アムリタが止めを刺すための詠唱を始める。ネッコが慌ててそちらに駆け寄った。

「あ、アムリタ！待つんだ！」

アムリタはネッコの方を見る。

「殺すのか、そいつを……！」

「ええ」

「生きのびるチャンスを失うんだぞ？」

「そうね」

「そうねって……」

自分の死を意味するんだぞ！改めて問いかけようとしたネッコだが、言葉は喉から出てこなかった。いや、正確には出せなかったのだ。アムリタの意志の籠った目つきが彼をそうさせた。悪魔に魂を売り渡すぐらいなら潔く死を選ぶという決意、いや、もはやそれは決定と言ってもいい。揺ぐことの無い、強靱な精神の選択。……アムリタのような人生を送ってきた人間にとって、希望というのはあまりに現実からかけ離れた言葉なのかもしれない。同じ境遇なら、自分もそうしただろうか？

ネッコはふいに襲ってきた感情に、思わず胸を締め付けられた。

「それでも……それでも、死んじゃダメだろ？」

「……？」

「せっかくお前の運命は変わりつつあるのに……ここで死んじゃダメだろっ！？」

きよとんとするアムリタ。誰かが自分を気遣うたびに味わうこっけいな感覚である。孤独に、頼るものもおらず、たった一人で戦ってきた彼女にとって、他人の感情などというものは、自分が操り、利用する以上のものではない。それが自分のために向けられるなんて状況は、彼女にとって想定外のものであった。

ネッコ達と行動をともにしていた時期は、彼女にとっていまだ良く分からない感覚につつまれた、特別な時間である。新鮮で、理解し難く、やはり、こっけいとしか言いやい様の無い感覚。

決して望んでいた感覚ではない。そもそも望むも望まぬも、彼女はそれを知りもしなかったのだから。だが決して悪い気持ちでは無いのだろう。ただ正体がよくわからないだけで、否定したいような感情でないことはたしかだった。

「……ぶっ」

そんなことを考えているうちに、アムリタは思わず嘔出した。笑う？ どうして？ ネットコはもちろん、嘔出したアムリタ自身にも不思議だった。

彼女は、死ぬ前にどうしてもこの感覚に名前をつけたくなくなった。

死ぬ前に？

死ぬまであと一体どれぐらいだろう？

一月？一週間？一日？

それとも……

「あ……そうだわ、アムリタよ！アムリタというのはどうかしら？」

「アムリタ？」

「ええ。私の飼っていたネコの名前なんです、昨年死んでしまつて……その子、神様みたいにいい子でしたの」

アムリタは、ふと思ひ出した。自分の名付け親、エレインのことを。

もしここから生きて帰れば、あの人にも会えるのだろうか？黙って出て行ったことを怒って

いるかもしれない。

(なにをいまさら……)

アムリタは、そんな風に考える自分が急に哀れに思えた。

(誰も彼も、私のことなど忘れてくれればいいのに……)

「……アムリタ後ろおおっ！」

ネツコの叫び声に、え？という顔をするアムリタ。

ヴァジュラの豪快な回し蹴りが、アムリタの細い首筋に打ち付けられた。遠心力のかかった強烈な一撃。木の枝を踏み折ったよりももつと太い、とても嫌な音が響いた。

アムリタはそのまま数m吹き飛ばされ、猛スピードで走る馬車に跳ね飛ばされた猫か犬のように無残に転がった。そしてポロ雑巾のように無造作に横たわると、うめき声もたてず、微塵も動かない。

「は……っ！」

思わず息が詰まるネツコ。

自分の顔から血の気が引いていくのが、彼には理解できた。

仕方のないことだ。アムリタの末路を見て、ゼムは思った。愚か者に落とされた当然といえは当然すぎる鉄槌。たしかにあの娘は傑作だった。だが所詮は自分の裏切り者。作品が壊れてしまったのならまた作ればいい。私の人生は、これから数百年と永らえることになるのだから

……いくらでもチャンスはある。そう理解しているはずなのに……。

「……ふん」

（この空虚さはなんだ？まるで、マリアを失ったときのような……）

「そ、そそそ……そく……し……だ」

ヴァジュラが焼け爛れた喉で言った。が、とても聞き取りにくい。

「そ……く……死だよ。あの……娘は……」

ヴァジュラは嘲り笑うような表情で、ネッコを見た。その瞳は吸血鬼のように真っ赤に充血している。

怒りと、絶望と、悲しみに震えるネッコ。

ヴァジュラはざらついた喉でくすくすと笑い出した。その声は、心の底から楽しそうだった。彼は思った。

（本気で殺し合い、あと一步のところまで殺されかけ、こちらが殺される前に、相手を殺す。これだ。これこそ、本当の戦いというもの。死を賭してこそその死闘だ！そう。この充実感を味わうためにも、俺は何百年も己の肉体を鍛えつづけているのだ。次はこの小僧か？この小僧もさっきの娘のような苦痛と残虐と恐怖と陵辱を俺に与えてくれるのか？ええ、お前にできるのか？おぼっちゃんよ！）

ヴァジュラは潰れた喉で、言ってやりたかった。

小僧、信じたくないのかもしれないが、あの嬢ちゃんは死んだんだよ。あっさりと、まるで

虫けらみたいにな！安心しろ、お前もすぐ嬢ちゃんの下へ送ってやる。死んだことを二人で認めずせいぜい地獄の大王を困らせるがいい。死に方はどれがいい？同じように首の骨をぼぎつとやるか、心臓をぶち抜かれるか……頭を叩き潰すつてのもいいな。大丈夫、そんなに痛みは感じない。もちろん、お望みとあらばいくらでも苦痛を伴って死ぬ方法も俺は知っている。なにせ、人を破壊するのは、こうして使徒になる前から得意だったもんでね。ものの壊し方を知ってんだよ、俺は。誰よりもな！」

「ひ、ひいひひひっ！」

潰れた喉を空気がかすめていく奇妙な笑い声。それを聞いたとき、ネッコはヴァジュラが言わんとしていることを一瞬にして理解した。と、同時に、自分の中でプツン、となにかが切れる音がした。全身に寒気のような怒りが走り、肌があわ立つ。

ふと、ヴァジュラは背後に不穏な空気を感ずる。背後をとられた？いつのまに？いや、そもそも誰に？さきほど現れた新手の小僧はこうして自分の前で、女々しく悲しみに肩を震わせているではないか。それに、これは生き物の雰囲気ではない。さつき娘が放ったダミーのような魔力だけの塊だろうか？他人と同じ手を使うとは、やはり、人間とは浅はかなものだ。

ヴァジュラは余裕を持って後ろを見た。しかし、そこにいたのは魔力のダミーではなく、巨大なネコ、あるいはクマのようなぬいぐるみかなかだつた。目はまん丸で、口はさげ、牙のような鋭い歯はしっかりと噛み締められ、ジグザグに描かれている。身の丈は、身長二mの自分よりも大きい。

「な……んだ……これ……は？」

ヴァジュラがぬいぐるみの胸倉を掴むと、頭が自分の顔の前に来るように引っ張りよせた。目を覗き込んでみる。空っぽで、なんの生気も感じさせない、本当にまん丸の目だった。

(ぬいぐるみ……か？やけにデカいな。しかし、いつのまに)

「この野郎……」

ネッコが毒々しく呟いたその瞬間、ぬいぐるみの目に輝きが灯った。モディファイド・ベアの発動である。

ネッコの体に急激に押し掛かる脱力感。彼が魔法を発動した瞬間、彼の中のほとんどの魔力がこのぬいぐるみに吸い取られた。モディファイド・ベア。ようやくの末の魔法レベル5の発動だが、しかし、ネッコには達成感など微塵も感じられなかった。むしろ、目の前でむぎむぎ妹を殺される無力な自分自身を殺してやりたいぐらいだった。

ネッコが発動した魔法の感触に、思わず自分を疑うゼム・ロック。

(あの魔力と迫力は……まさか、レベル5！？ルドヴィヒですら到達できなかった次元に、こんな小僧が……そんな……バカなことが……！)

「はっ……！？」

異様な雰囲気におおされ、慌てて手を離すヴァジュラ。だが、その身を後ろに引く前に、ぬいぐるみはジグザグの歯を大きく開き、ヴァジュラの頭に齧りついた。ヴァジュラの首から鮮血が吹く。

「が……!!」

慌てて引き剥がそうとするヴァジュラ。しかし、首にはしっかりとぬいぐるみの牙がつきた
てられていて、無理に引き剥がそうとすれば自分の頭を引きちぎってしまうのが先だろう。口
を開こうとするが、顎は凄まじい力で閉じられていた。おまけに、ヴァジュラには片腕が無い
のだ。片腕では開くものも開けない。

(こ、こいつ、このクマ……なんだこいつ!とんでもない力で……)

ヴァジュラはたまらず、ぬいぐるみの胴体を殴り始めた。布や綿が詰まった胴体とは思えな
い鋼鉄のような強度。アムリタの魔法で何とも無かったはずの手の皮がむけた。

ぬいぐるみはヴァジュラを吐き出し、鋭い爪のついた手で喉元を掴んだ。そして空高く持ち
上げると、まるでクワでも振り下ろすように地面に叩きつけ、相手に乱暴なダメージを与える。
後頭部をもろに強打したヴァジュラは、自分の全身が痺れるような感覚を味わった。

「うおおおおお!」

ネッコが叫ぶと同時に、王子はヴァジュラの首を掴んだまま、高く持ち上げ、また地面へと
叩きつけた。何度も何度も叩きつけ、地震のような震動とともに、地面がめり込んでいく。

「ぐ……かあ!」

目を白黒させながら、ヴァジュラは必死に脱出しようとぬいぐるみの胴体を蹴る。格闘の天
才だけあって、無茶な体勢からの蹴りが水月や股間、人中などに寸分の狂い無く命中していく
様は、まさしく芸術的ですからあった。しかし、今回の相手に人体はおろか哺乳類共通の急所す

らなんの意味もなさない。ダメージというものを与えているのかどうかすら分からない。のっそりと現れた死の影が確実に命脈を枯らそうとしている中、それでも、ヴァジュラはひたすらその鋼鉄の人形を蹴りつづけた。考えなどというものはもちろんない。彼にはそれ以外にどうしようも無かった。

ゼムは這いながら、ぐったりとして動かないアムリタの方へ近づいて行った。彼にはもう幾許の命も残されていなかった。歩くことはできず、立つ事すらできない。息をすることさえ大業に思えてきた。なのに、どうしてわざわざこの娘の所へと向かうのだろう？死の前の錯乱？馬鹿馬鹿しい。しかし、ゼムは這うのをやめなかった。少しずつ、少しずつ前へ進み、そして、ようやくアムリタの元へと辿り着く。

アムリタの首の骨は、確かに折れていた。だが、死んだわけでは無さそうだった。アムリタの魔法で手負いをおったヴァジュラが、すぐには致命傷を与えるほどの蹴りを放つことができなかったのか、あるいはアムリタが瞬間的に魔法のシールドを張ることができたのか……ただ、生きているとは言え、重傷と致死傷との境目の際どいダメージ。放っておけば、命の灯火が完全に消えさるのも、やはり時間の問題だった。

(……バカな娘だ。やはり、ヴァンシュタイン家はバカばかりだな。マリア、貴様がもう少し賢ければ、この娘が死ぬことも無かっただろうに……)

ゼムはアムリタの顔にかかった髪を掻き分け、彼女の顔を見た。血の気の無い、青白い肌。

ほんの少しだけ開いた唇から、か細い呼吸がもれている。だがそれももう、あと幾許かの時の内に徐々に薄れていって、やがて失われてしまうのだろう。

なんと安らかな寝顔だ……子供の頃から、少しも変わっていない。

ゼムは自分の考えに一瞬不愉快そうな顔を見ると、自分の心の片隅にある小さな戸惑いに気づき、慌てて首を横に振った。次に自分の腐りかけの掌を眺め、小さな嘆息を漏らし、またもう一度、今度はさっきに比べてゆっくりと首を横に振った。

ゼムは思った。認めよう。私の願いは叶わなかった。私はヴァンシユタインに敗れたのだ。

しかし、皮肉なものだな。戦いに敗れ、全てを諦めた私が帰るべき場所を繋ぎ止めていたのが、この娘の存在だったとは……アムリタ……甘露か。なかなか良い名だ。

(愛情とはなんだ？曲がりくねった愛情しか、私の中には存在しない。ふふ。狂人だからな、この私は！だが形は歪であれ、それも紛れも無い一つの愛情だと呼ぶことを許されるのなら、アムリタよ、私はお前を愛していた！)

ゼムが最後に思い浮かべたのは、彼が初めてマリア・ヴァンシユタインと出会ったときの、彼女の笑顔だった。あの瞬間以外に、彼はマリアの笑顔を知らなかった。

(すまなかったな、マリア……)

ゼムがかざした右手に青白い輝きが灯り、最後の魔力が込められた。

一方、クマネコ王子とネツコの猛攻は続く。

「はっはっは！どうだ使徒！魔物め！人形相手に手も足も出ないじゃないかあ！」

王子がヴァジュラをまた地面に叩きつける。ヴァジュラは口から血を吹き、その目つきは意思や気迫を感じさせない。

「どうだ！どうやって殺して欲しい！？アムリタと同じで、首の骨を折られたいか？心臓をぶち破るか……スイカみたいに頭をぶっ潰して……いや、違うな。違う違う。そんな甘い死に方で死ぬると思うな。王子！」

ネツコがさつと手を振ると、王子はぼろぼろのヴァジュラを自らの背中に抱え込んだ。右手は首を抱え、左手はちょうど膝の上あたりを抱える。いわゆる、ネックブリーカーの体勢である。

「う……か……はっ……！」

想像を絶する苦しみ。ヴァジュラは目を見開き、舌を伸ばし、苦悶の表情を浮かべる。なんとか身をよじって逃げ出そうとするが、このダメージの残った体では、この最強の相手の怪力に身動き一つとれない。

「このままお前の体を、ゆっくりと、弓のように引いて行って、背骨をへし折り、体を真っ二つに裂いてやる……へへ、へ……長い時間をかけてほんの少しずつお前を殺すんだ。さあ、助かりたければ今すぐ僕とアムリタに謝れ」

「……ころ……せ……」

「ふん。謝つても殺すよバァーカ。死ね」

ぎしぎしと軋みをあげ始める体。更なる苦痛が全身を襲う。残酷な笑みを浮かべるネッコ。それは、アムリタがヴァジュラを圧倒し、見下ろした時の、あの表情にも似る。この共通の残酷性は、あるいはゼムではなく、ヴァンシュタインの血だったのかもしれない。誰よりも魔法に純粋なヴァンシュタイン家が、自らの魔力で敵を圧倒する時の恍惚感！ピアニストが自分の演奏を拍手喝采で迎えられたときの、絵描きが自分の絵を大勢の人間に認められたときの、科学者が発明品を完成させたときの、哲学者が真理を見つけたときの、それらとなんら変わらないのだ。

しかし、勝者がいれば敗者がいる。

そして、いままさに敗れんとする、もう一人の求道者。

（こんな、こんな小僧に、この俺が……使徒ヴァジュラが……！一体、一体このぬいぐるみはなんなのだ！？魔法人形（ゴーレム）か？しかし、た、ただのゴーレムにしては、あまりにも……強すぎる……聞いたことがある。サンダルクの最も恐ろしい魔法の一つに、くぐつを操る業があると……まさか、こいつもその魔法を？この小僧がサンダルク級の敵だということか？そんなまさか……！）

首に鈍い痛みを感じながら、アムリタは目を覚ました。

アムリタは折れたはずの首を擦った。痛みこそ残っているが、骨折している様子は無かった。

しかし彼女は覚えていた。あの瞬間、ヴァジュラに蹴られた瞬間に、間違ひなく自分の首は折れていた。おそらく、誰かが回復魔法をかけてくれたのだ。誰が？ ネットコ・ヴァンシユタイン？ 彼は無事にヴァジュラを倒すことができたのだろうか？ そして、ゼムも……。

アムリタは肘をつき、上半身を起こすと、ネットコとヴァジュラの方を見た。巨大な熊のぬいぐるみがヴァジュラを背負って、痛めつけている。そのすぐ傍で悪魔のように笑うネットコ。

(まだ二人は戦っているの？……あのぬいぐるみは……ルドヴィヒの孫……！)

アムリタははっとした。では、一体誰が回復魔法を？ もちろん、答えは一つしかなかったが、アムリタにとってにはわかには信じられない事実であった。

ふと、彼女はすぐ傍に倒れこむゼム・ロックに気がついた。

(……)

アムリタは、彼の背中に手を置いてみた。息をせず、体温も無く、心臓も止まっている。

ゼムは死んでいた。尽きかけの命をなんとか繋ぎ止めていたのは、自らの魔力を押さえ込んでいたからであり、その魔力を開放すれば当然の如く彼は死んでしまう。アムリタに骨折の治療をするほどの余裕は彼には無かったのだ。すなわち、彼は自らの命を燃料に、最後の魔法をアムリタにかけ、そして死んでいったのだった。

しばらく我を忘れて、ぼんやりとゼムを見下ろすアムリタ。

(……それでも……)

アムリタは思った。

(……それでも私はあなたを父親とは呼ばない。急に父親ぶって、娘扱いして、親切ぶったって……私が易々とあなたの元へ帰るなどと思わないで欲しいものだわ。人付き合いというのはね、一方通行じゃないのよ？それが例え血の繋がった相手でも……勝手すぎるのよ、あなたは！それにあなたは魔族になって生き長らえるんじゃないの？せっかく第二の人生が見えたというときにこんな死に方をするなんて……全く、禁術のゼム・ロックも哀れなものね)

アムリタは小さな溜息をついた。それから、まだふらつく足を踏ん張り、なんとか立ち上がって、最後にもう一度だけゼムを見た。彼が死んだことをマリアが聞いても、やはり、彼女も悲しまないのだろうか？自分が死んでも誰も悲しまない。これがゼムの求めた道の結果で、彼にとつて自由と言うべき生き方だったのだろう。孤独なものだ。アムリタはそう感じた。そして、怖かった。自分が死んでも、こんな風に孤独なのだろうか。

「……一応、礼だけは言っておくわ」

アムリタは自分の肩掛けを脱ぎ、ゼムの顔に被せた。

「さよなら。バカ親父」

「痛いか、苦しいか、辛いかな!?」

王子がヴァジュラの背骨を軋ませるのを眺めながら、ネッコは叫んだ。

「お前の罪はこんなもんじゃ済まされないんだ！ええ！？僕の妹を……僕のアムリタを返せよ、馬鹿野郎！」

「く……はっ……」

ヴァジュラの意識が遠のく。恨めしい。自分の弱さが。まるで人間の頃の心境だった。妹か……彼は思い出す。彼が昔、奴隷として身を窶していたころ、たった一人の妹を無慈悲な主人に殺されて、復讐を近い、自らを死に物狂いで叩き上げた。そして、彼は主人を殺した。すると、主人の復讐と言って誰かが自分を狙ってきた。その者も殺した。そうして色々な人間から命を狙われ、生きるために彼は更に自分を叩き上げた。しかし、強くなれば強くなるほど、強い敵とぶちあたり、また強くならなければならなくなった。気が付けば彼は人の心を捨て、鬼となった。自分を守るために、魔族にまでなつて、そして他人の妹をこうして殺している。

でも、それでもいい。力さえ手に入れば、あとはもうどうでもよかつた。使徒になつて本当にありがたかつたのは、その精神的迷いの無さだった。

それなのに……そこまですても、まだ誰かに負けるといふのだろうか？まだ誰かに殺されるというのだろうか？それも、たかが人間風情に！

（し、死んでたまるか……！この俺が……死んでたまるか……！死ぬ前にやり残したことなんてない。やりたいこともない。だが、死ぬこと事体が堪えられん！死んではならんだ、この俺は！使徒・ヴァジュラは最強のはずだああ！）

「が……クク……」

もはや怨念とでも言うべきヴァジュラの執念に、圧倒的に攻勢なはずのネツコは思わずぞつとした。半死のヴァジュラの体からどす黒いオーラがたちこめ、周りの風景を真っ黒に塗りつ

ぶし、世界を真つ暗の闇に溶かしてしまいそうな感覚。ネッコは怖気づいた。このダメージ、この状況で、いったいどこからこれだけの執念が……？

刹那。がくん、とぬいぐるみの手から力が失われる。

「はっ……!?!」

どさり、とヴァジュラの体が地面に落ちた。

「ど、どうした王子!?!」

見る見るうちに小さくしぼんでいくクマネコ王子は、やがてマリアの作ったぬいぐるみへと姿を戻していった。

……精霊会の契約どおり、三分間がたったのだ。

「う、うそだろ……王子!?!」

十秒かそこらの間、苦しそうに咳をしていたヴァジュラは、やがてふらふらと、幽鬼のように立ち上がる。首を傾げて、ぽきっ、という音を鳴らす。一步、二歩、と歩を進め、ネッコの方へ近づくと、ぽん、とネッコの頭にゆっくりと右手を乗せた。

その間、ネッコは全く動けなかった。彼は頭の中が真つ白になってしまっていた。魔力と言う魔力はモディファイド・ベアに使い尽くしている。万事休すである。

「嫌い……じゃ……ないんだぜ。お、お前……みたい……や……奴は……俺と、お、同じ……だから……な」

相変わらず機能を果たさない喉で、ヴァジュラが言う。

このままではネッコが死ぬ。そんな時に、アムリタはふと、ヴァジュラの背後に落ちているマリアのぬいぐるみに視線をむけた。

ネッコが己の魔力を託してヴァジュラと戦っていたぬいぐるみ。

アムリタは気づいていた。このぬいぐるみには、紛れも無くネッコ以外のもう一つの魂が宿っていたのだ。マリア・ヴァンシユタインの魂が、自分の息子を守るために戦っていたのを、アムリタは知っていた。

（あのマリアのぬいぐるみは……人の魂を取りこみ、力に変えることができる。人の魂……そう。人を救いたいと思う気持ち、敵を憎む気持ち、怒り、悲しみ、喜び、憐れみ、全ての感情が、命と言う発動機にかけられて生まれ出るエナジー……それが魔力！でも、私にはもうそんなものがない。ここでルドヴィヒの孫を救えば、全てはそこで終わりなのだから）

アムリタは精神を集中させた。全身に青白いオーラが立ち込め、ざわざわと髪が逆立つ。周りの空気が熱に包まれ、電流のような光が走る。陽炎のようにゆらめく風景と、大地の壮大な震えが岬を包み込んだ。

「む……!?」

異変に気づいたヴァジュラはネッコを地面に叩きつける。自分の体を襲った激痛も忘れて、ネッコは体を起こし、アムリタの方を見た。

「こ……こいつは……こいつだけは、好きにさせてはいかん！」

ヴァジュラがアムリタ目掛けて突進した。その鬼気迫る勢いは、傍から見ているネッコのほ

うが身震いしたほどだ。

（私の命を燃やし尽くす！私の魔力、全ての魔力を吸い込んで、立ち上がりなさいヴァンシユ
タイン家のしもべ！今一度立ち上がり、この人の悲しみを捨てた哀れな鬼を……おまえが
討つよ！私たちの敵を討つべく……さあ立ちなさい！）

アムリタの輝きに共鳴して、クマネコ王子が巨大化し、むくっと起き上がる。

アムリタは片腕を大空に向かって突き出した。

「立ちなさい、ヴァンシユタイン家のしもべ！」

ヴァジユラが大きく振りかぶる。そして、アムリタの顔面に鋼鉄の拳を打ちつけようとした
その瞬間……彼は背後に強烈な殺気を感じた。体がバラバラにされてしまいそうな、強大な魔
力の渦に、彼は氣をとられずにはいられなかった。振り上げた拳をピタリと止め、慌てて後ろ
を振り返る。

「なん……だと……!?!」

——羅漢洞の前。

数人のヴァジユラの部下達が、リリパットがおまじない気分ですヴァジユラの左腕を埋めた、
あの場所を取り囲んでいる。彼らの青ざめた顔が、ただ事ではないことを物語っていた。

騒ぎにつられて羅漢洞から姿をあらわす使い魔・リリパット。

「どうしたんだあ？」

「り、リリパット様！これを……」

ヴァジュラの部下達を掻き分けてリリパットが覗き込む。彼はわが目を疑った。

そこには、鮮血の真つ赤な絨毯が敷かれていた。中心点、すなわち、ヴァジュラの腕を埋めた名残のある土の盛り上がった場所から、まるで湧き水のように止めどなく溢れる出る赤い血。それがじわじわと広がり、あわせるように部下達も下がっていく。ただ、リリパットだけは湧き出る血だまりに足をつけようともし、ぼんやりとその場に立ち尽くしていた。

「ヴァ、ヴァジュラ！……お前、いったい……」

暗示的な光景に、嫌な予感が脳裏によぎり、はっとするリリパット。

「まさか……お前……！」

ヴァジュラが振り返った途端、ズドン！という大きな音とともに、彼の胸をなにかが貫いた。それは、クマネコ王子の腕だった。場所は左胸、心臓の位置である。噴出す鮮血。使徒とは言葉、まぎれもない致死傷。

「王子！」

ネッコが立ち上がると、クマネコ王子はネッコの足元にほとんど死体となったヴァジュラを放り投げた。どさり、と地面に落ちたヴァジュラは痙攣しながら、自由の利かなくなった体に

鞭打ち、一本だけの腕で這ってその場から逃げようとした。心臓を貫かれたと言うのになんという驚異的な生命力と意思力であろう。しかし、二、三mの血の絨毯を引いたのち、彼は恨めしそうなうめき声をあげると、まるでなにかを掴むように腕を伸ばし、やがて、力なく倒れこんだ。

使徒・ヴァジュラは死んだ。誰よりも力を望み、あらゆるものを力でねじ伏せてきた彼だが、結局は更なる力に滅ぼされたのだ。

そして、全ての魔力を失ったアムリタは、その場にがくりと崩れ落ちる。

「あ、アムリタ！」

急いで駆け寄るネツコ。アムリタの首を抱える。

「おい、アムリタ、アムリタってば！こら、また死ぬつもりか！？」

「……」

じんじんと痺れる頭。自分の中がからっぽになった感じがする。ぼんやりとした瞳で、自分を抱えるネツコを見つめる。彼は相変わらず男らしくない表情で、目に一杯の涙を浮かべていた。使徒ヴァジュラは倒した。一体、なにを涙する必要があるのだろうか？

「……？？」

アムリタの不思議そうな顔を見て、ネツコは慌てて自分の目を拭いた。これ以上情けない兄を演じてどうする？彼はまた自分が恥ずかしくなった。

「……ごめんなさい。ゼムは死なせてしまったわ」

アムリタは特に何も考えずに口を開くと、なんとなくそんな言葉が出た。だが、ネッコはゼムの方など見向きもしなかった。

「私たちの敵討ちは……未完に終わってしまったのよ」

「だからって、お前まで死ぬことはないんだからな」

「まただ。例の新鮮で、理解し難く、やはり、こっけいとか言い様の無い感覚。」

新鮮？アムリタは思った。忘れているだけで、本当は知っているはず。でも、どうしても名前が出てこない。そう、思い出すことを禁じられた日々は終わったのだ。もう、思い出してもいいはずだ。

ネッコはアムリタの腕を引っ張って、自分の肩にかけた。そして立ち上がると、足取りのおぼつかないアムリタを抱えながら、強引に歩き始める。

「っ……っ！」

消耗しきったアムリタの体を眩暈と吐き気が襲った。思わず目を閉じ、辛そうな顔をする。

「……まだ……もう少し横になっていたいんだけど」

無神経なネッコに向かって、アムリタがぶっきらぼうに言った。

しかし、ネッコが足を止める様子は無い。

「ああ、何日でも気の済むだけ眠ればいいよ。ただし……自分の家の、自分のベッドでな！僕の父さんと、二人の女中が待っているからさ。父さんはね、口うるさいけど、悪い人じゃないよ。あの人はいつだって僕たちや周りのみんなのことを考えてくれてるんだ。女中のリタは大

らかで優しく、僕にとつて母さんみたいな人だ。ナターシアは……ま、すぐにお前も慣れるよ。あれで結構面白い奴なんだ。気が強くて、不器用で……祖父さんは研究所に籠りつきりであまり帰つてこないから、また今度連れて行ってやるよ。母さんだって、いつまでもあんなところにいるべきじゃない。いつかきつと迎えに行こう」

震える声で喋りつづけるネッコ。アムリタは彼の言っていることがよく理解できなかった。

「……一体なんの話をしているの？」

「自分のこととなると頭が回らないんだな、お前は……」

「……」

「いいかい、アムリタ・ヴァンシュタイン嬢！お前には帰るところがあるんだ。もう一人で生きて一人で死ぬ人生はここで終わったんだ。これからはずっと、命の続く限り、お前はヴァンシュタイン家の一員なんだ。二度と忘れるんじゃないぞ！」

気が付けば、すでに新しい一日は始まっていた。太陽が登り、小鳥がさえずり、やかましいセミの鳴き声が狭い森の中にじりじりとひしめき合う。木々を縫う風が潮風を連れてきた。木漏れ日が顔に照りつける。瞬間の輝きと熱に、生の快活さを見る。青い空と雲と太陽が浮かぶ天井の、その普遍的な美しさ。ありきたりで、なにもものにも代え難い生の喜び。宇宙的で圧倒的な生命感とノスタルジイ。

そうか！ネッコは死闘の末に、勝利者に捧げられた自然の祝福の中で、初めて気がついた。怒りの書を通して自分を憎み、蔑み、殺してやりたいと思えるほど嫌悪を積み重ね、自身の価

値を放り投げた日々。しかし、そんな自分にも太陽というやつは分け隔てなく平等に光を与え、生きる喜びを教えてくれるのだ。そうだったんだ！だから太陽は、空は、海は、世界は、そして他人は、自分以外の全ての魂は、こんなにも美しいんだ……！全てが僕に生きる力を与えてくれている。例えば卑屈でも、不満だらけだとしても、最後の最後まで人としての人生をやり遂げようという意志を育んでくれる！帰ろう、仲間の元へ。家族の元へと、僕は帰るんだ！彼らは僕を待っていてくれるんだ、この世界には、僕を待っていてくれる人たちがいるんだ。なんということだろう？こんなに素敵なことは無いじゃないか！

「帰ろう、アムリタ。僕らを待つ人たちのところへ」
優しさ、かもしれない。

アムリタは、例の感覚がいったい何だったのか、ようやく分かった気がした。それはきっと、優しさという名の人と人との結びつきなのだろう。アムリタは別れを告げた。呪われた人生と、悲しい性を背負った父親に。そして、感謝した。自分を新しい運命に導いてくれた最高の兄と、彼の家族、友人達、イーリアス神の見守る生命の星に。

彼女は歩き始めた。決して楽ではない、辛い一步一步を自分の意志で踏みしめて。滲んだ視界の先に、新しい自分の帰るべき場所を求めて。

——サンダルークより遙か南西某所。

流れていく視界。受ける風はその長髪をなびかせる。

アッドはサンダルークを抜け、南西、レオデグランズへと愛馬、レッドチャリオットを走らせていた。

向かうはカーノスメルテ、以前の占いにあった彼の過去を知るものを探すため。

以前は仲間との合流を果たす方が先決であった。

彼らはアッドがアッドである者たちであった。そう感じていた。

そして、彼らと出会えた今、アッドはロアが旅立ったのをきっかけに自分の過去を知ることにした。

自分が何者であるのか、当初の内はよく考えもした。

しかし、考えても仕方のないことだ、意味のないこと、必要のないこと。

アッドは自分の記憶をそう考えるようになり、実際にもはや思い返そうとすることすら無くなっていった。

以前、レオデグランスでエルフに言われるまでは自分がエルフと人間の混血であるらしいことすら、アッドは知らなかった。

それからどれくらいが経ったのだろう。

そんな興味も尽きかけたもの、だがある種の宝物にも似たものの手がかりを手に入れた。

知りたくないというのは嘘になるだろう。

記憶、過去は生き物にとってかけがえのないものといえる。

またしばらく駆けたのち、アッドは愛馬の休憩と位置の確認を兼ねて小川のほとりに馬を止め、地図を見ることにした。

「あの村から北西…、この方角であってはいるが、どこまで行けばいるかわからないしな…ま
ず精霊の森から行くしかないか」

その眩きは川の音に流され、風に消えていくのだった。

さらにレッドチャリオットを駆けさせ、アッドは一先ずの目的地、カーノスメルテが遠く、
丘の向こうにその景色が写るまでに近づいていた。

アッドはレッドチャリオットを降り、その向こうに微かに見える森を眺めた。

「まずはあそこからだな。チャリオット、とりあえず街で休むとしよう。さすがのお前も疲れ
たようだしな」

レッドチャリオットの鬘を撫ぜながら、アッドはそう呟いた。

カムナギムトを出たネヴィーナは苦悩の表情を浮かべながら、深い森の奥へと戻ってきた。思い立った焦がれるモノへの手がかり、しかしそれも手がかりとは呼べるものではなかった。死んではないということがわかっただけだった。

それも、今この瞬間にも死んだことがわかるかもしれない。

そんな繋がりが憎らしいほどに、ネヴィーナには憔悴していると云えた。

「ガルガンデイ：」

組んだ腕、片方の手で薄い桃色をした長髪を指で弄んながら呟く。

しばらくそうしたあと、目を閉じ、髪をきつく握り締める。

身を縮こめるように腕に力を込める。

激しい喪失感に襲われるネヴィーナ。

しかし、その喪失感を埋めれるものはおらず、辺りにはただ静けさを宿した森がいるだけであった。

どれほどそうしていたらどうか、ネヴィーナには永遠にも感じられる刻をそうしていたあと、そっと目を開き、静かに闇に溶け込んでいった。

次にネヴィーナが姿を現したのは、少し大きな街の町外れだった。

目の前にある古い建物の扉を開け、徐に踏み込んでいく。

瞬間、鋭い銀の閃きが襲い掛かる。

しかし、ネヴィーナは動かない。

動く必要はなかった。

その剣閃は、ネヴィーナの頭を切り裂く寸前で止められていた。

そして平然と、

「ご挨拶ね、エアリアル・ウォーケン」

そう微笑して相手に声をかけた。

「これは驚いたな、ネヴィーナか？」

剣を収めながら、エアリアルは驚きながらそう返答した。

村人の着る薄い布地の服を着てはいるが、その鍛えられた身体と、その若く見える顔に宿る双眸からは、キラキラとした力を感じる。右ほほにある斬り傷も、与える印象の強さを後押ししているようであった。

「どうしたんだ、こんな久々に？ 確か……」

「モート様がアトロに敗れてすぐだから約三百年ぶりかしら」

「そういえばそうだな」

そう平然と呟いて、エアリアルはニヤリと笑みを浮かべた。

彼、エアリアルもまた魔族であった。

「あなたの方こそ、魔王軍の切り込み隊と名高いヴェネルクス軍の副官にして、魔界一の刀匠である貴方が、なぜ人間の街なんかに住んでるの？」

ネヴィーナは親しげにエアリアルに声をかける。

「おまえさんには言われたくないな、お互い隠居の身だろ？」

大げさに手を広げ、エアリアルは笑みを崩さないままそう言った。

そして、悲しげな表情を浮かべ、

「ガルガンディの野郎がいなくなっちゃったからな……」

その悲しげな言葉を受け、ネヴィーナも再び表情を曇らせる。

エアリアルとガルガンディは師と弟子のような関係であった。

ガルガンディは、エアリアルから剣を学び、その剣でモートのために戦っていた。

エアリアルは元々魔王だの、人間だのには興味のない魔族であった。

しかし、使徒となったガルガンディが彼と出会ってから、彼の生き方は変わっていた。

自分の弟子のような、時には弟のようなガルガンディに力を貸すために魔王軍にその身をゆだねていた。

そのガルガンディが魔王軍からいなくなったのだ、彼には魔王軍にいる理由はないのだろう。モートが敗れてすぐにネヴィーナに別れを告げ、行方をくらましていた。

「まあ、オレの話は置いといて、ネヴィーナお前だよ、どうしてここに？いや、俺のところには言った方がいいかな？」

先ほどまでの悲しげな表情を消し、どこか軽い調子で尋ねる。

「まさか、魔王軍に戻れていうんじゃないだろうな？ 噂でポールスが敗れたってのは聞いたが……」

「そんなわけあると思う？ 私も貴方のいう隠居の身よ。ただ、古い友人に会いたくなかったのよ、彼を探すのが困難になったから……」

言葉の最後のあたりは、本当に微かな声であった。

「そうか、やっぱり探してたんだな」

ネヴィーナの心情を察し、優しげな声色でそう言う。

「ええ……」

両者の間を沈黙が支配する。

沈黙を打ち破ったのはエアリアルであった。

「まあせっかく来たんだ、お茶でも飲んでいきな。いい魔界の茶が手に入ったんだ」

そう能天気を思わせる調子で声をかける。

「ええ、そうさせてもらうわ」

そんなエアリアルの気風がガルガンディに兄と慕わせた理由なのだろうとそんなことを考えながら、ネヴィーナは応じるのであった。

——カーノスメルテ入り口。

少し前の蟲の襲撃によって受けた被害の復興もままならないが、活気のある街の入り口で、アッドはチャリオットを引きながら、自分の過去について考えていた。

（あの魔族を倒したとき、オレの意識は完全に吹き飛んでいた。しかし、気づいた時にはあの魔族は消滅していた。今のオレにそんな力はないはずだ……だとすれば、それは失くした過去の力。オレの本来の力だ）

そこまで考え、ふと苦笑する。

（ここまで昔のことを考えるのは何年ぶりだ？本当にオレは変わったな、ロア、ネッコ、メルフィナと出会って）

彼らを思い起こすような表情をした後、アッドはその考えを振り飛ばすように頭を振った。

「今は、オレの過去に集中すべきだろうな」

アッドの目に映るのは、街の反対側の入り口、その向こうに広がる精霊の森であった。

「じゃあそろそろ行くとするわ、あまり長居しても貴方に悪いでしょうしね」

そう言つてネヴィーナは席を立つた。

「そうか、ガルガンディの情報が入ったら教えてやるよ」

「ええ、お願いするわ」

そう受け答えし、ネヴィーナは足元の闇に消えていった。

しばらくの沈黙の後、エアリアルは自分のお茶をちびりと飲み、思い出に浸っているような表情をしていた。

彼もまた、いなくなった使徒、ガルガンディに再び会いたいと考えるものであった。そんな沈黙を打ち破る音が玄関の扉から放たれる。

「なんだ？」

「ウオーケンさん、仕事だ」

「ちっ、こんなときに」

にがにがしげな面持ちのまま、玄関の扉を開く。

「今度はなんだい？」

「今魔王軍退治の戦士達がこの街に来てるのは知ってるだろ？」

「ああ、そんな話は耳にはしている」

「その戦士が街の鍛冶に文句を言ってきた。今おおもめしてんだよ」

そう慌しげに事を伝える男。

以前、エアリアルは興味本位で人間のために剣を打ったことがあった。そのできが良すぎたためか、街の鍛冶関係からは異常なほどの信頼を受けていた。エアリアルとしてはいい迷惑だったのだが、最近ではなんとなく慣れて来ており、それなりに応対してやることにしていた。それが隠居であったとしても魔族としては異端中の異端であることは充分に承知していた。しかし、それでもいいと彼は思っていた。そんな異端が自分には似合ひであるとそう感じていたのだ。

「今日はそんな気分じゃないんだが……」

「そんな事言わないで、頼むよ！下手したらけが人が出ちまう」

必死な形相をして頼む男に、エアリアルは渋々折れたのだった。

「仕方ない、そんなに大変なら出てやるよ」

そう渋々家を出て現場に向かうエアリアル。

家を出てしばらく歩くと、おそらく目的地であろうところが見えてきた。

多くの野次馬が出ており、辺りには人ばかりができています。

その中心部と思しきところからは怒声が響いていた。

「おい！どうしてくれんだ！！オレの大事な剣をよお」

エアリアルにそんな怒声が聞こえてきた。

「ちよっと、通してくれ、通してくれ！」

人垣を掻き分けながらその中心部に急ぐ二人。

「ああ〜！」

中心部に出ると、鍛冶屋と思しき男がさつきから怒声を吐いている戦士風の男に胸倉を掴まれている。

「おい、そこにいさんよ、何があったんだ？」

恐れなぞ微塵もなく、ざつくばらんに話しかけるエアリアル。

「あん？なんだてめえは？」

血走りかけている目をエアリアルに向けてくる戦士。

「どうしたんだって聞いているんだよ」

そう不敵に言うエアリアル。

その自身に気押されたのか、

「こいつがオレの剣を駄目にしてくれやがったんだよ！」

胸倉を掴んだ男を睨みつけながらそう答えた。

「そうかい、その剣を見せてみな」

そういつて手を出すエアリアル。

なにやらぶつぶつ言いながら掴んでいた胸倉を放し、腰の鞘から剣を引き抜く戦士。

確かにエアリアルから見ると鈍らもいと鈍らもいところのひどい剣であった。おそらく野菜も切れないのではないかとまで思わせるような鈍らだ。

「んで、何を失敗されたんだい？」

問いかけるエアリアル。

「磨きを頼んだんだよ、こいつに磨いてもらう前まではこの剣はそんなじゃなかった！」

そう声を張り上げる戦士。

エアリアルは鍛冶屋の男を向き、

「どんな作業を？」

「いつも通り焼きなまして……」

鍛冶屋の話を聞き、大きく頷くエアリアル。

戦士に向き直り、

「残念だなあ、あんた」

一瞬なんのことだかわからないという顔をした後、戦士はエアリアルに食って掛かった。

「何が残念なんだよ！」

エアリアルは大げさに肩をすくめ平然と言い放った。

「こいつはもう芯の金属がやられてるのさ、致命的な傷が入ってる。きっとお宅の未熟な腕の

せいだろ。金にモノを言わせて背伸びするのはいいが、もっと自分の腕を磨くことをオススメするよ」

「てってめえ！」

戦士は激昂し、エアリアルに掴みかかろうとした。

軽く笑みを浮かべたまま反撃に移ろうとするエアリアル。

「……」

そのとき、人垣からすっと一人が進み出て、エアリアルと戦士の間を割ってはいる。

「なんだ？」

相手が襲い掛かってくる瞬間にもかかわらず、エアリアルは素っ頓狂な声を上げる。

戦士は頭に血が上って見えていないのか、そのまま出てきた男に突進をかける。

澄んだ剣を抜く音が聞こえたかと思うと、戦士はその場に崩れ落ちた。

（なんだ？邪魔しやがって）

魔族であるエアリアルには当然取るに足らない相手であった。しかし、割と好んでしているストレス解消を他人に奪われたのだ、少しイライラした感じで相手を眺めるエアリアル。

その男が振り向いた瞬間、エアリアルは文字通り凍りついた。

「……通行の邪魔だ」

そうエアリアルに告げ、アッドはその場を後にしようとする。

「おっおい」

去っていくアッドに声をかけるエアリアル。

「……先を急いでいる」

そう短く答え、アッドは振り返りもせず、人垣を掻き分け、レッドチャリオットに跨り、その場を後にするのだった。

街のとおりを歩いているアッド。

（少し過激だったか……）

先ほど、自分の通り道を邪魔したものを倒したことを少し後悔していた。

（もう少し穏やかにしていないとな）

珍しくそんなことを考えていると、

「おい、その兄さん」

アッドの背後から声がかかる。

アッドが振り返ると、先ほどの騒ぎの中心にいた男と対峙していたエアリアルであった。

「……なんだ？」

「ガルガンディ、なんだはねえだろ？オレだよ、俺」

そう親しげに声をかけるエアリアル。

「……オレはそんな名前ではない。そう思う」

「はあ？何言ってるやがんだ？」

アッドの返答に首を傾げるエアリアル。

「……オレには記憶がない。しかし、オレを知っているものはこの街にはいないはずだ」
アッドはそうエアリアルに告げた。

しかし、これは嘘、咄嗟の方便であった。エアリアルから感じ取った得体の知れない感覚がアッドに拒絶の意思をもたらしたのだった。

「記憶が……」

アッドの言葉を聴き考え込むエアリアル。

「……オレは先を急ぐので」

そう告げて、振り返り、そのまま歩いていくアッド。

取り残されたエアリアルは尚もしばらく思案を続け、

「こりゃ、確かめてみないと」

ニヤリと笑みを浮かべそう呟いたのだった。

その目には、人間にはありえない、そう魔族の光が籠っていたのだった。

エアリアルと別れたアッドはまっすぐにレッドチャリオットの元へ行き、精霊の森に至る街の出口へとその脚を進めていた。

街を出てすぐ、アッドの前に立ちはだかるように経っているエアリアルがいた。

「……」

無言でエアリアルを見つめるアッド。

「なあにいさん、俺と手合わせしてもらえないかい？」

不敵な笑みを浮かべながら、エアリアルはそういう。

エアリアルは街で見かけたときとは違い、漆黒の軽鎧を纏、腰に一本の長剣をたずさえてい
る。

「……手合わせする理由はない。それにオレは先を急いでいる」

そう答えて再び歩きだそうとするアッド。

しかし、尚も声をかけるエアリアル。

「なあにいさん。とりあえず今の名前を教えてくれるか？不便でかなわねえ」

「……」

エアリアルをしばらく眺めた後、アッドは

「アヴァウツド、アヴァウツド・キャメロンだ」

「アヴァウツドか……、ところでお前さんは魔王を倒す勇者様志望なんだろう？」

またも不敵な笑みを浮かべながらアッドに問いかけてくる。

「……魔王を狩るための戦士だ」

「おおくそうかい、それだけでこっちとしては挑む理由があるんだよ。ハアツ」
アッドの返答に、満面の笑みを浮かべ、気合を込める。

エアリアルを中心に土煙が舞い上がる。

腕で目を守ったアッドが次にエアリアルを捉えると、エアリアルの耳はエルフほどに伸び、髪の毛の色が黒から赤へと変わり、顔の左半分には、古代文字のような字が浮き出ている。

「わかったか」

お茶をけるようにアッドへと声をかけるエアリアル。

「……」

無言で剣の柄を握り、エアリアルに対峙するアッド。

「いいねえ、そうこなくちやよ」

目を細めてアッドを眺めるエアリアル。

「オレの名はエアリアル・ウォーケン。さあいくぜアヴァウツド、楽しく舞おうや」

そう叫び、エアリアルは瞬時に腰の剣を抜刀し、アッドへ駆け始める。

(早いー)

エアリアルの初太刀、その激烈な打ち込みにアッドは下を卷いた。

「くっ」

二撃、三撃と打ち込まれるエアリアルの太刀。アッドは斬り返すどころか、防戦一方で押されきみであった。

「オラオラ、どうしたよアヴァウツドさんよ。そんなんじや魔王は倒せないぜ」

激しい打ち込みを続けながら、余裕を見せるエアリアル。

「オラア」

そう気合を吐き、袈裟斬りを仕掛けるエアリアル。

その動きが少し大きくなる。その隙を逃さずに、エアリアルへ斬撃を放つアッド。

「甘い！」

しかし、それはエアリアルの仕掛けた罠であり、アッドが見つけたその隙は、エアリアルが故意に作り出したものだった。

なんとか身をよじり、鎧の胸のところを切り裂かれただけに留まる。

軽く肩で息をするアッド。

「おい、どうしんたんんだ？これくらいで音を上上げたってのか？」

対するエアリアルは至極余裕の面持ちで、アッドを冷ややかに見つめるのだった。

「おい、そんな調子じゃあ魔王には到底かなわねえぞ」

アッドの斬撃を軽くないしながらエアリアルはアッドを挑発する。

「…くっ」

それでもかまわずに、剣を振り続けるアッド。

(完全に読まれている)

アッドはそう考えていた。

一方エアリアルは、

(同じだ、全く同じだぜ。はは、こいつは完全にヴェネルクスだ！)

内心で大笑いしたいのを堪えていた。

ずっと昔に失ったものをふとした所で見つけた心境に似たものであった。

「さあかかって来いよアッド！」

エアリアルは嬉しそうにそう咆えて、アッドの斬撃を弾く。

それから何時間そうして戦っていたのだろう：アッドには永遠にも感じられる長い時間エアリアルに打ち込み続けていた。

しかし、そのうちにおかしな感覚が自分の中に芽生え始めたのに気がついた。楽しい、そう楽しいのだ。そしてどこか懐かしかった。

（俺は魔族と戦って、しかも完全に凌駕されているのに：なぜこんな気持ちになるんだ？）
アッドは自分にそう問いかけながらも、エアリアルに剣を振るい続ける。

気合とともに一閃、弾かれたその力を利用してさらに一閃。
同じように、エアリアルもアッドの変化を感じていた。

（動きがよくなっている：ふっ、昔の自分を取り戻しかけてるのか）

エアリアルの顔は、もはや隠しきれない笑みが浮かんでいた。

アッドの剣を後ろとびにかわし、距離を取るエアリアル。

「ふん、なかなかいい動きになってきたじゃねえか」

不敵な笑みを浮かべ、そう声をかける。

息を整えつつ、エアリアルを見つめるアッド。

「けどな、そろそろ終わりにさせてもらうぜ」

そう宣言し、気合を入れ始めるエアリアル。

その溜め込まれていく魔力を感じ取り、アッドの背中に冷たい汗が流れる。

「さあどうする？」

エアリアルの手にする剣に魔力が収縮していく。

「まあ聞いてもしかたねえわな、どうにかしてみせろ！」

そう咆え、エアリアルは駆け始める。

剣を構えなおし、己に念じるアッド。

（俺の全てをこの一撃に！）

「がああああ！」

アッドも駆け始める。

二人が交錯し、辺りに爆音が木霊する。

それはあたりに地震のような地鳴りを感じさせるほど凄まじいものであった。

大量の砂埃が上がり、中心を覆い隠す。

その砂埃が晴れたとき、立っていたのは一人だけだった。

剣を肩に担ぎ、少し先を見下ろしている。

「防いだか」

エアリアルはそうアッドに投げかける。

膝をつき、剣で身体を支えるアッド。

しかし、その目は生気を失っておらず、エアリアルを睨みつけている。

（一瞬覚醒したか？）

そう自問自答するエアリアル。

肩で息をするアッド。ふらつきながらも立ち上がり、剣を構える。

「ほう、いい根性だ」

そう笑みを浮かべ、エアリアルは剣を構える。

エアリアルが動こうとした瞬間

「エアリアル」

そう呼ぶ声が聞こえた。

エアリアルが振り向くと、そこには桃色の長髪をなびかせたネヴィーナが立っていた。

「ネヴィーナか」

不満気味にネヴィーナに声をかける。

「こんなところで魔力を放出して戦っているのはどういうわけ？」

そうエアリアルに問いかけるネヴィーナ。

「理由？理由ならあるぜ、俺にとってこれ以上ない理由ってやつがな」

そう言って口の端に笑みを浮かべ、後方を指し示すエアリアル。

「理由？」

その仕草を訝しげに眺め、その指し示す方に目を移すネヴィーナ。

そして、その先にあるものが目に映るやいなや、その整った顔に驚愕の仮面を張り付かせ、

「そ、そんな…ガルガンディ？」

そう呟いたのだった。

「……」

ネヴィーナの出現により、アッドの焦りの色が強くなる。

(あれは魔族……まずいな、奴だけでも厳しいってのに)

「ガルガンデイ……」

そう呟きながら無造作にアッドに近づいてくるネヴィーナ。

アッドは剣を構え直してネヴィーナを睨む。

「!?!」

その行動に驚愕を隠せないネヴィーナ。

「奴は記憶を失っているみたいだ」

後ろからエアリアルの声をかける。

「記憶が?」

エアリアルの方へ振り返りながらそうオウム返しに聞き返す。

「ああ、んで今は魔王討伐の勇者様ってわけみたいだぜ」

劍を肩に担ぎながらエアリアルはそうネヴィーナに述べた。

「……」

熟考にはいるネヴィーナ。

「まあオレはあいつを刺激してやってんだけどよ」

アッドの方を向いたままニヤリと笑うエアリアル。

「少し彼と話をさせて」

そうエアリアルにいい、アッドの方へ歩く。

劍に殺気を纏わせながらネヴィーナとの距離を測っているアッド。

「ガルガンディ？……」

「……オレはそんな名前ではない」

ネヴィーナの眩くような問いかけに短く返答するアッド。

「では、あなたの名前は？」

「……アヴァウッドだ」

「そう、アヴァウッド……私に、いえ私たちに見覚えはない？」

「……ないな」

ネヴィーナの問いかけに即答するアッド。

「……魔族に知り合いなぞ」

「今の貴方ではないわ、あなたのなくした過去、臍氣にでもいい、貴方の頭の中に少しでも

残っている古い記憶……」

アッドの発言を遮って、ネヴィーナは一気にそう話した後、一度息をつき、「それをたどってみて見覚えはないかと聞いているの」

そう言ったネヴィーナの言葉には逆らえない気迫のようなものが宿っていた。

「……」

ネヴィーナの得もしれぬ気迫にアッドはいつもならしない思考の海へ潜っていく。

それは仮にも敵を前にした行為ではないだろう。

しかし、ネヴィーナの鬼気迫るとも呼べる気迫に影響されたからであった。

アッドが唯一保っている昔の記憶、魔王を必ず殺してやるという絶対の意思。

アッドは思考の中でまたその感情にぶつかった。

(殺す、魔王を殺す、必ず、必ず、必ず……)

しかし、頭の中で繰り返すその復讐を誓うその闇の意思を受けて尚、アッドは冷静な自分を発見した。

(今まではこんなことなかったな……)

そんな以外さを感じながら、アッドはその強烈とも言える意思の階層、自分の根底とも言える思考の階層に身をたたずませていた。

そして、突然にそれはアッドの思考の階層に現れたように感じた。

闇のような意思の海の中に静かに揺られていた温かい意思、感情、そして……記憶。

「うっ」

思考に入ったネヴィーナとエアリアルは、突然苦しみ始めたアッドに焦りの色を隠せなかった。

「どうしたんだ？」

「わからない……何かを思考の海で見つけたのかも」

エアリアルの間いに口元を少し緩ませて答えるネヴィーナ。

その間にもアッドは獣のような方向を続けていた。

「がああああああ」

剣を手から落とし、頭の掴んでいる。

「ガルガンディ！」

ネヴィーナの呼びかけにピクツッとアッドの身体が反応する。

ネヴィーナとエアリアルの顔に喜びの感情が出る、出そうになる。

しかし、その寸前に、激しい爆音とともにアッドを中心としてエネルギーの爆発が起こった。

「なに！？」

「わかんねえ、だがちつとばかしやばい」

混乱気味のネヴィーナの肩を掴み、後退するエアリアル。

「ガルガンディ！」

アッドの方へと手を伸ばして叫ぶネヴィーナ。

しかし、アッドの姿は巻き上がる砂埃によって遮られていた。

「どうなったの？」

その場で冷静でいられなかった自分を恥じているのか、少し頬を染めてエアリアルに問いかけるネヴィーナ。

「ああ、詳しいことはわかんね。ただ、さっきのものはものすげえ魔力の奔流だ」

「魔力の？ってことは」

「期待はあると思うが、確実とは言えないな」

段々収まってくる大漁に放たれた魔力と砂埃の影響が薄れていく。

二人はその中心部を少し期待を含んだ視線で見つめていた。

「！」

そして、砂埃が晴れる寸前に、大きな魔力を持った存在に気が付く。

「こっこの魔力は！」

「これは、この魔力は彼のものよ、ガルガンディ！」

そう叫ぶネヴィーナ。

濛々とした砂埃が晴れたその中心に立っていたものは、アッドであった。

しかし、その頬と右手にタトゥーのように黒き文様が浮かび上がっていた。

「ガルガンディ！」

「ヴェネルクス！」

二人の声がハモる。紛れもなく、アッドのその姿は彼らの頭の中にあるヴェネルクス・ガルガンディのものであった。

近づこうとする二人。

しかし、鋭い殺気がふたりに飛ばされる。

「！？」

二人が視線を向けると、ゆっくりと二人に剣を向けたアッドがいたのだった。

待ちわびた再会。

しかし、彼らの再会に笑みを浮かべる余裕はなかった。

「ちっ、軽く暴走してやがる」

打ち出された魔力の籠った剣閃を避けながらエアリアルは悪態をつく。

「ガルガンディ…」

エアリアルは呆然としたネヴィーナを守りながら攻撃を避けなければならなかった。

「しっかりとしろ！ネヴィーナ。もうちよつとだ、もうちよつとでヴェネルクスが戻ってくるんだ！ここで気張らなきゃならんだろうが」

攻撃の間を縫ってネヴィーナの意識を呼び戻そうとする。

すでに暴走したアッドの斬撃によってあたりの地形は変形しようとしていた。

「このままじゃまずいな」

さらに飛んできた剣撃を避けながら考えを巡らせる。

「ちっやり難いっただらないぜ」

そんな悪態をつきいたとき、二人の直前に気配が現れる。

一瞬で舞い上がる砂煙。

そこから弾き飛ばされるように飛び下がる影が二つ。

「ちっ、やってくれんじやねえかよ」

そう呟いたエアリアルのはほには軽い斬り傷が浮かんでいた。

「もうブチ切れたぜ、手加減抜きだ！」

そう叫び、隣のネヴィーナを突き飛ばす。

「えっ何」

咄嗟のことで反応ができないネヴィーナ、いや反応できるような状態ではなかったからなのだが、そのまま尻餅をつく。

「そこで大人しく見てやがれ」

そう言い残し、魔力を開放、エアリアルはアッドへ向けて駆けていった。

凄まじい力のぶつかり合いによる衝撃がネヴィーナの方へまで飛んでくる。

「ガルガンデイ、エアリアル……」

ネヴィーナの呟きは、激しく打ち付けあわれる剣の音によって掻き消された。

「おらおら！」

一回、二回と剣を結ぶ二人。

アッドに意識はなく、ただ力を解放しているだけだとエアリアルは考えていた。

事実、彼の弟子であるヴェネルクスの剣技はこんなものではないと感じられていた。

しかし、墮ちても13使徒であった者の相手はただではすまない。

エアリアルもアッドも、お互い身体に斬り傷を造り、しかしそれでも斬り合っていた。

「ガルガンディ！」

ネヴィーナは混濁とした思考の迷宮に迷い込んでいたと言える。

それほどまでに、彼に剣を向けられたことはネヴィーナへの衝撃が大きかった。

(せっかく会えたのに…こんなことなら…)

そう負の方へ感情と思考が偏りを見せる。

それがネヴィーナの動けない理由。

ネヴィーナにはこの三百年間、ガルガンディしかなかったのだ。

たとえ行方不明でも、その存在は大きかった。

(こんなことなら…)

思考が負の連鎖を再回し始めた時、

「お前はどうしたいんだ？ネヴィーナ」

ネヴィーナの思考に降る光があった。

(ガルガンディ！)

「お前はもうしたいんだ？」

それはネヴィーナが以前に聞いたことがあるだけの彼の言葉だったのかもしれない。

しかし、その彼の言葉は、ネヴィーナに負の連鎖を断ち切る刃を手に入れさせた。

「そう、私は二度と彼を失わない……」

そう決意を込めた視線を前方で激しく斬り合っている二人へと向けた。

響き渡る金属音。

アッドとエアリアルルの剣舞はまだ終わりを告げることはなかった。

しかし、エアリアルルもかなりの魔力を消耗し、肉体の疲労も蓄積してきていた。

「ちっ、元気な奴だ……」

剣を交えながら、エアリアルルはまだアッドの方にはそれ程の消耗は見られないと感じていた。

エアリアルルの中にある、使徒への特別なイメージがそれを手伝っていたのかもしれない。

アッドの横なぎの一閃を受け、少し態勢を崩してしまいうエアリアルル。

すぐさまそこへ縦に凧ぐもう一閃。

(やばい)

そう思ったとき、横合いから闇の玉が飛んでくる。

すばやく距離を取るアッド。

「……ネヴィーナ」

「ごめんなさいね、エアリアルル。私は決めたわ、彼を、ガルガンディをもう二度と失わない

と……」

そうエアリアルに宣言し、アッドへと駆けるネヴィーナ。手には細身の両刃剣が握られている。

「ガルガンデイ！元にお戻りなさい」

そう駆けながら叫び、前方に三本の魔力の刃を出現させる。

同時に交わされることを避けるため、一個ずつアッドへ到着する時間がズラされている。空中へ飛ぶアッド。

「ガルガンデイならそんな避け方はしないわ」

空中へ飛んだアッドを追跡するネヴィーナ。

その背中には漆黒の翼が四対、その姿を広げていた。

「エヴィル・アボード」

ネヴィーナの声が響き、振った剣より闇の形をした衝撃がアッドの身体をすり抜ける。そのまま落下するアッド。

後には、片腕を抑えたネヴィーナが空を舞うのみであった。

「ガルガンデイ」

落下したアッドを追い、地へ降りるネヴィーナ。

少し先に気を失ったアッドが横たわっていた。

その顔には、先ほどまで見られた文字のようなものはない。

「ガルガンディ…」

横に佇むネヴィーナ。

「まだ完全覚醒には至っていないみたいだな」

「ええ」

後ろから掛かったエアリアルの声に振り返らずに言葉を返すネヴィーナ。

「どうする？ 持って行くか」

「いえ、しばらくはこのまま…向こうで何か手段を考えましょう。それに、なぜガルガンディがこうなったのか、それを知りたいわ」

「そうか…けど本当にいいのか？」

「ええ、彼が、彼が存在しているということが分かれば、また耐えられるわ」

エアリアルの問いかけに力強く答えるネヴィーナ。

「そうか。じゃあ行くか」

「貴方も来るの？」

「お前だけじゃこいつを戻せるかわからんだろ？」

そう言って意地悪そうな笑みを浮かべるエアリアル。

「そうね…じゃあ行きましょうか」

「ああ、久々の魔界、帰郷ってとこかな」

そう言って二人は闇の中へ消えた。

森の奥深く、一軒の小屋があった。

そこは、暖かさに溢れていた。

両親と、その子供が二人。幸福の中で生活をしていた。

「かあさん、カティーネと一緒に湖に行つて来るよ」

「気をつけるのよ」

「わかつてるつて、カティーネ、行くぞ〜」

「待つてよ、お兄ちゃん」

そう言つて少年は、カティーネと一緒に湖へと駆け出して行つた。

そして、夕暮れまで妹と湖で遊び、暖かい彼らの家へと帰ってくる。

まさに幸せな家庭であった。

少年の目から見ても、両親は仲むつまじかった。母と父の種族は違つたと両親から聞いたことがあつたが、そんなことは全く関係ないと彼は思つていた。

そんな幸せな生活が永遠に続くものであると、そう信じていた。

そんなある日の事、

「お兄ちゃん、どこいくの？私も連れてってよ」

家をそっと出ようとした彼はカティーネに見つかった。

「ダメだって、カティーネはかあさんの手伝いをしないと駄目なんだろう？さっきかあさんに呼ばれてたじゃないか」

「でも」

「今日は遊びに行くんじゃないんだ、すぐに帰ってくるって」

そうカティーネに告げ、少年は家から駆け出した。

しばらく走った後、

「危ない、危ない。カティーネへのプレゼントを取りに行くのに、ついて来られたらバレちゃうじゃんか」

そう呟き、目的地へと急ぐ。

どうやら妹の誕生日で、そのプレゼントを取りに行くらしい。

「こんなもんでいいかな？」

しばらく後、湖近くの花畑で妹の好きな花を両手にいっぱいにした少年が満足げに花畑に立っていた。

「へへへ」

妹の驚く顔が眼に浮かんだのだろう、笑みを零して家への道のりを駆けていった。

そこに何が起こっているのかも知らず。

少年に家が見えてくる頃、その異変が嫌でも眼についた。

扉の前に鍬や鋤などを持った人たちが大勢いたのだ。

少年は恐る恐る近づき、家の近くの木陰に隠れて様子を伺った。

「でてこい！」

「このご時勢に禁忌破りか！」

「全部でめえらのせいだ」

すごい剣幕で扉を叩いている。少年が見ると、彼らは父とは違う耳、母と同じ耳を持っている。た。

「かあさんと同じ種族……」

少年は幼心にそう思った。

その内、彼らの行動はエスカレートし、ついには扉を蹴り破り、中に雪崩れ込んでいった。

「!？」

咄嗟のことで反応できなかった。少年はいくらなんでもそこまではしないだろうと思いついていた。

そして聞こえる悲鳴。

少年は木陰から駆け出し、家に踏み込んだ。

そこで彼を待っていたものは、彼が永遠として疑わなかったもの、その終焉だった。リビングでうつ伏せに倒れている父、奥の台所で妹を庇う様にして倒れている母、その母の胸の中で動かない妹。

すべてだったものになっている、死体。

それが一目で理解できた。三人とも背中に鋤が生えているのだ。

「まだいやがったか！」

「この忌み児め！」

そして、彼らは少年を見るや、狂気の瞳を少年に向けてきたのだった。

「わああああ」

少年は叫んだ。

すべてを否定するかのよう。

そして、一番近くにいた男に体当たりをかける。

予測していなかったのか、態勢を崩し、持っていた鋤を落とす男。

その鋤を拾い上げ、狂ったように振り回す。

その一撃が一人の男に当たり、その男は頭から血を流し、その場に倒れこむ。

「うわああああー！」

「てめえ！」

「殺せ！殺せ！」

そんな少年に殺到する男達。

所詮は多勢に無勢、さらに大人と子供だ。

少年の鋤はあつという間に取り落とされてしまう。

「うううああああ」

じりじりと少年に近づくと男達。

脱兎の如く、家から駆け逃げる少年。

駆けて、駆けて。

どれくらい駆けたであろう。

等々追いつかれてしまったのだった。

「よくもやってくれたな！」

「お前は死ぬべきなんだよ！」

少年を追い詰め、勝手なことを口々に叫ぶ。

「ボクの、ボクの家族を返せ！」

「なにを言ってるやがる！」

それでも少年は叫び続けた。

「ボクの家族を返せ！ボクの家族を返せ！」

そして、そのとき異変は起こった。

少年の周りを光が包んだのだ。

「なんだ？まさか！」

「魔法か、このクソガキ！」

「うああああああ」

何事かを叫ぶ男達の声を掻き消し、少年の咆哮が辺りに木霊した。何かが破裂する音が聞こえ、光があたりを包む。

立っている者はなかった。辺りには肉塊が散らばっていた。

「うああううう」

その中で異質な存在、少年があたりの惨劇を眼にし戸惑っていた。

「うあああ！」

完全に取り乱した少年の下に、一人の男が現れた。

それは事が起こってからどれくらい経っていたのだろう。

少年は完全に気が狂ったと自分で思っていた。

しかし、その男は、少年の顔に両手をあてがい、少年の瞳を見てこう言った。

「なかなかの力だ。よかったら俺と来るか？」

「あっ貴方は……」

少年は自分でも驚いたことに、声を出すことができた。

「俺か、俺はモートだ。お前は？」

「ボク、ボクは……」

目を覚ますとそこには荒野と呼べるものが存在していた。

「……夢？」

アッドは軋む身体を気にせず身を起こした。

「生きているのか……」

アッドの記憶では、二人の魔族はまだ死んでいなかったはずだ。むしろ、自分が窮地に立っていたはずであった。

「もう一人の奴が原因か？」

アッドはそう呟いた。

アッドの意識は魔力を開放したところからの記憶がないらしかった。ヨロヨロと立ち上がり、辺りを見回す。

アッドが右手の拳をふと見ると、そこにはタトゥーが残されていた。拳に力を込める。

そこには魔力と呼ばれる力の収束が感じられた。

「……」

アッドは自分が新たな力を得たことに薄々気が付いた。

その力が自分の役に立つのか、それはわからないだろう。

しかし、それは紛れもなく自分の力であったものはずであった。
アッドは自分が少し過去に足を踏み込んだのだ。

「戻るとしよう、帰るべきところへ」

そう呟き、アッドはその場を後にした。

まだアッドは気づいてはいない、取り戻したのは力だけではない。
自分の欠片を、自分の種をその身に宿したのだと言うことを。